



このたびはPC閲覧用『僕たちのライブ 1995』をダウンロードしていただき、ありがとうございました。PDFファイルをパソコン上でお読みになる際には、以下の機能をご利用になると読みやすくなります。

① Acrobat Reader の「フルスクリーンモード」を使う

…ウィンドウズの場合は「表示」メニューから「フルスクリーンモード」

もしくは画面左下の「フルスクリーンビュー」アイコンをクリック

…マックの場合は「表示」メニューから「フルスクリーン」

(いずれの場合も、もとの表示に戻る場合にはエスケープ・キーを押して下さい。

また、ソフトのバージョンによって表現が若干異なることがあります)

② モニターの解像度は800×600以上でお読み下さい

その他の注意事項をホームページの「勝手にQ+A」に掲載しておりますので、是非ご覧下さい。

<http://www.kanmanabe.com/faq.htm#p5>

中学校最後の文化祭が9月末に開催される。僕たちはそのステージに上がるべく、4月末にバンドを結成した。メンバーは4人。ベース、ドラム、キーボード、そしてギターを弾きながら歌うギター・ヴォーカル。

文化祭で出場バンドに与えられる時間は20分。準備や片付けの時間を差し引けば、演奏できるのはたった2曲だ。でも僕たちにとっては都合がよかった。4人のうち3人は楽器経験者だったが、ロック・バンドとしての演奏経験はなかったし、もう一人はまったくの初心者だったからだ。

バンドを組むという話になったとき、僕だけでなくメンバー全員が「2曲くらいできるやろ」と思っていた。でも現実は一筋縄じゃなかった。紆余曲折あり、先週ようやく初練習に漕ぎ着けたときには、バンド結成から丸2ヶ月が経っていた。つまり僕たちはまだスタート地点に立ったばかりなのだ。

「大丈夫かいの——」

そんな風に、僕はスタジオの外で缶ジュースを飲みながらため息をついている。でもそのため息も、スタジオから漏れてくる音に紛れて全く聞こえない。

梅雨明けの嫌な暑さでむせ返った外の空気が、その低くこもった音をじつとりと受け止めている。頭上では雲の向こうに隠れたばかりの太陽が、もう一度顔を出すのを今か今かと待ち構えていた。

【スタジオ】

スタジオ。とてもいい響きだ。特別な人間にしか入ることのできない秘密の場所。スタジオというのはそういう場所だ。でも残念ながら、目の前のスタジオにはそういうイメージを打ち消して余りあるくらいの外見上のハンデがあった。そのスタジオは、どこからどう見てもただの日本家屋なのだ。昭和建築という条件を付け加えたりなんかすれば、さらにスタジオのイメージから遠ざかってしまう。それでも僕たちはその「ふすま」と「障子」と「土壁」を主な防音材とする空間のことをスタジオと呼んでいるのだから、たいしたものだ。

その日本家屋は、メンバーの平尾のおかげで使えることになった。彼のおばあちゃんが介護施設に入るようになったのは、今年の2月のことだった。たった一人の主がいなくなり、放っておいて家が傷むことを心配した平尾の両親が、ときどき空気を入れ替えるために窓を開けに来ていた。その様子を見ていた平尾は、バンドを結成するにあたってその空き家をスタジオとして使うことを親に頼みこんだというわけだ。

「どうせつこうとらんのやけん使ってないんだからええやない」
その提案は意外にもあっさりと承諾され、おかげで僕たちはここでこうやって練習ができることになった。

【満濃町まんのうちょう】

平尾の名前を先に出してしまったけど、バンドメンバーの紹介に移る前に、まずは我が故郷の紹介をしようと思う。

僕が住んでいるのは四国・香川県の南西部にある満濃町という町だ。満濃池という日本一大きいため池があるおかげで、県内では老若男女を問わず町の知名度は高い。隣町は「こんぴらさん」のある琴平町で、これまた年寄りを中心にまだに絶大な人気を誇る観光名所であり、その2つの町の名前は辺境の地・香川にあつて、名物「讃岐うどん」と並んで全国的に知れ渡っている（と、両町民はみんな思っている）。そしてこの国で話されている言葉は「讃岐弁」と呼ばれ、「うだから」が「うやけん」に変換される以外は限りなく関西弁に近い関西弁の亜種である（と、県民はみんな思っている）。

僕が通っているのは満濃南中学校だ。西も東も北もないのになぜか「南」がつくが、省いても差し支えないので通称「満中まんちゅう」だ。満中の周りには田んぼしかないから、誰かが場外特大ホームランを打つてもどこかの窓ガラスが割れることは絶対にない。ただし、時期によってはカエルとウンカ（稲の害虫）をかき分けながら田んぼの中を歩かなければならないから手加減は必要だ。

スタジオとして使えることになった家は、満濃町の真ん中を流れる一級河川・土器川に架かる満濃大橋（たいして大きくはない）から5分ほど歩いたところにある。その家の東西南北にはいわゆる「お隣さんの家」があつたが、いずれも何枚かの田んぼで隔たれていたから、大きな音を立てても少々なことでは苦情が来ることはない。平尾の親からお墨付きをもらっていたスタジオの造りはとてもシンプルだった。建物の真ん中に15畳の座敷があり、その周りを短い廊下や縁側や台所や応接間が取り囲んでいる。応接間の上には小さな部屋があつて、物置として使われている。もともと物が少なかったと思われる家の中は、主の不在のせいもあるのだろうか、とても閑散として見えた。僕たちは15畳の座敷に機材を持ち込み、そこで練習することになった。そのスタジオは「スタジオ15畳」と名付けられた。

【平尾】

平尾はベース担当。ファーストネームは貴之たかゆき。平尾の中身を簡単に言い表すなら、「地味だが

真面目」ということになるだろう。地味で真面目なことがベーシストには求められると雑誌に書いてあったから、彼がベースを手を取ったのは必然だったのかもしれない。でも彼はバンドに誘われた時にはベースを弾いたことがなかったし、ベースに弦が何本張ってあるかも知らなかった。

平尾は「よくわからないが金持ち」だとみんなに思われていた。親がどういう仕事をしていて、どういう家に住んでいるのか、誰も知らなかった。でも学校では、株で大儲けをしたとか、宝くじで2億円を当てたとか、そういう噂が絶えなかったので、あぶく銭で成り立っている家庭というネガティブなイメージを大半のクラスメイトが持っていた。でも真相は闇の中だった。少なくとも平尾を間近で見る限り、そんなに金持ちそうには見えない。

平尾について他に僕が知っていることは、画家のサルバドール・ダリを敬愛しているということだ。ダリの絵はどれも好きみたいだが、とくに蜘蛛みたいに足の長い象の絵がお気に入りだった。平尾はその足長象の絵を45分の授業の間に必ず1頭は描いたから、平尾のノートは教科を問わず象だらけだった。だからノートを使わない体育の授業が何よりも嫌いだといつもぼやいていた。

平尾はベースのボディにも象のペイントをしている。黒いボディの上に描かれたピンク色の象は、いまにもその長い足をこちらへ向けて踏み出しそうに見える。平尾の夢は、スペインのフィゲラスにあるダリ美術館に行くことだ。「フィゲラスはバルセロナの北のほうにある町や」と説明されたけど、僕はバルセロナの場所さえわからなかったし、ダリが6年前まで生きていたことも知らなかった。それ以来、平尾は僕の前でダリの話をしなくなった。

僕が音楽以外の部分で平尾について語れるのはそれくらいだ。でも彼がバンドのメンバーであり、仲間であることには違いない。何より僕は平尾の地味だが真面目なところが好きだ。

【機材】

さっき僕は「スタジオに機材を持ち込んだ」とすらつと流してしまっただけど、これめちゃんと説明しないといけないだろう。

バンド活動をするにあたって、まず必要なのは楽器だ。そして次に必要なのが、その楽器の音を鳴らすための機材だ。ギターやベースならアンプ、ヴォーカルならマイクとスピーカー、キーボードならスピーカーが必要だ。これがないと練習にならない。ギタリストやベーシストが自宅での個人練習用に小さなアンプを持っているのは普通だが、キーボーディストは大抵の場合ヘッドフォンを使う。だからバンド練習をするときには、音を外に出すためのスピーカーがないと話にならない。スピーカーを搭載したキーボードもあるけど、ギターやベースの音に負けないくらいの大音量は絶対に出ない。

ヴォーカルについても同様だ。ヴォーカルはどこでも練習できるから、自宅にマイクと専用のスピーカーを持っているヴォーカリストはなかなかいないだろう。でもバンド練習となる

とマイクを使わないわけにはいかない。

そういうわけで、一般的にバンド練習と言ったときには、これらの機材が揃っている「練習スタジオ」で練習をすることを指す。練習スタジオは「スタジオ」と略するのが通例で、ほかに音楽スタジオと言ったり、リハーサルスタジオなんていう呼び方をすることもあるそうだ。

スタジオは簡単に言えばバンドのためのカラオケボックスのようなもので、時間帯や部屋の広さによるが、安いところなら1時間1500円くらいで借りられる。防音設備と機材が揃っているから、あとは自分の楽器を持ち込めば練習ができる。アマチュアのドラマー（ドラムを叩く人）がドラムセットを家に持っていることは少ないから、練習スタジオを使わないとドラマーはいつまでたっても本物のドラムを叩くことができない。そういう意味では、ドラムは楽器として捉えるよりも、練習スタジオに行かないと使えない機材として捉えた方が現実味がある。

それでは僕たちはどのようにして機材を調達したのか。その答えはまたまたメンバーの中にある。

【敬^{けい}ちゃん】

本名は滝元敬子。4人のメンバーの中で紅一点。担当はドラムだ。敬ちゃんは吹奏楽部ですとドラムとパーカッションを担当してきた。本物のドラムをほとんど毎日叩いているわけだから腕前は確かだ。「ロックはやったことないけどできるかどうかからんで」と言っていたが、その経験を生かしてスタジオ練習を引っ張っていったのは他でもない敬ちゃんだった。

敬ちゃんの家庭の話をしておう。平尾の家庭が謎に包まれているのに対して、敬ちゃんは町内でも有名な電気屋の娘だから素性は知れ渡っている。滝元家は5人家族で、少し恰幅のいい笑顔の絶えない母親と、少し痩せ気味の笑顔の絶えない父親、それに笑顔の絶えない姉と笑顔の絶えない弟がいる。そういうわけで、言うまでもなく敬ちゃんも四六時中笑顔が絶えない。家族全員の笑顔が絶えないと、どうなるか。それを僕は今回のスタジオ機材の一件で思い知ることになる。これは平尾のおばあちゃんの家がスタジオとして借りられるという話が決まったその日の夜の、滝元家の食卓での会話だ。

（報告はすべて敬ちゃんによる。ところどころにある文字の上の黒丸はアクセントのある場所で、「ニコニコ」は僕の想像だ）

「ねえねえ、お父さん」ニコニコ「なんや？」ニコニコ「平尾君のおばあちゃんの家を貸してくれるようになったんやって」ニコニコ「そらよかったでない」ニコニコ「ほんでな、バンドの練習するのに機材がないけん、なんとかならんやろかってみんなで話しとんやけど」ニコニコ「機材で、なんがいるんや？」ニコニコ「ギターアンプとベースアンプとミキサーとスピー

カーとマイクとマイクスタンド」ニコニコ「ドラムもいるんとちゃうんか？」ニコニコ「あ、忘れとった。いるなあ」ニコニコ「機材なあ——ちよつと待つとれよ」（父、どこかに電話し、5分ほど会話）「あんな敬子、例のほれ、変なうどん屋あるやろ、あそこのおっさんが貸してくれるてよ言ってる」ニコニコ「ほんまに？」ニコニコ「せつかくあるのに誰もつこうてくれないから機材がもつたいたないわて。若いもんが使うんやったらタダで貸してくれるてよ使ってる」ニコニコ「ほんまに？」ニコニコ「ほなけどな、ミキサーがないんやて」ニコニコ「えー、どうしよ」ニコニコ「どうしてもいるんやな？」ニコニコ「いるなあ」ニコニコ「ほんならな、店用にも使えるけんひとつ買ってやろうかこうたろか？」ニコニコ「ええの？」ニコニコ「かまん構わない。店内用にいると思つたけんな、ついでじゃわ。ほなけど借りたもんは大事に使うんぞ。めがしたら壊した弁償やぞ」ニコニコ「うん」ニコニコ。

そのような敬ちゃんと父親の讃岐弁によるたった5分間のやり取りによって、のちにスタジオ15畳と呼ばれることになる練習場所の機材がすべて揃うことになる。まさにこれは僥倖と言うほかない。

補足をしておくと、敬ちゃんの父親の言う「変なうどん屋」とは町内に最近できたちよつと変わったセルフのうどん屋のことだ。聞くところによると、何でもその店長はロック・ミュージックが大好きで、自分の店でバンド演奏をしているところが見たいという理由で店内にステージを作り、さらにバンド用の立派な機材まで揃えたというのだ。レストランやバーならともかく、うどん屋にステージがあるという話は聞いたことがない。案の定、実際に営業を始めてみると、うどん屋としてはまあまあ繁盛したらしいが、ステージで演奏をしたいと言って来た人はいまだに一人もいないらしい。アイデアも悪かったが、場所も悪かったのではないかと僕は思う。満濃町のうどん屋にわざわざライブ演奏をしに来るような人がいるとすれば、それはよっぽどの変わり者に違いない。もしその店が高松市内にあったとしても、大差なかったんじゃないかとも思うけど。

そのうどん屋はステージと機材を持ち腐らせたまま、もうすぐ開店2周年を迎える。

【僕】

僕の名前は城崎温きのさきあつし。あと一歩でカニで有名な城崎温泉だ。そのせいで温泉がらみのあだ名をつけられそうなどころだけど、実はそうではなく、みんなからマイキーと呼ばれている。

そのあだ名の由来は映画『グーニーズ』だ。映画に登場する7人の子供の中に、一応主人公ということになっているがあまり活躍しないマイキーという名前の少年がいた。何が僕と『グーニーズ』のマイキーをつなげたかというと、両者の4つの共通点だ。ひとつは喘息持ちだということ、2つ目は歯の矯正をしていること、3つ目は母親が左腕を骨折していたこと、4つ

目は年の離れた兄がいることだ。3つ目に関しては、骨折が完治した今となってはほとんど意味をなさないが、小学校の5年生のときに母親が運動会の球入れ競争で骨折をした直後に、運悪く『グーニーズ』がテレビで放映されたのだから仕方がない。(映画の)マイキーのおかんも球入れ競争でうで折ったんやわ」とクラスのみんなが冗談を言っていたのに僕はひどく傷つき、同時に運動会の球入れ競争なんかで骨折をするほど鈍くさい母親を恨んだ。でも時間が経ってみると、そう悪くないあだ名だった。何と言ってもあの『グーニーズ』の主人公の名前なのだ。それに母親はそれ以来骨折していないから笑い話になることはもうないし、歯の矯正も1年前に終わった。喘息も昔ほどひどくない。だから僕と『グーニーズ』を結びつけるのもはもう兄しかないわけだ。

【兄】

兄は僕よりも5つ年上で、大学の2年生だ。神戸の異人館の近くで一人暮らしをしていて、詳しいことはわからないが、何とか工学を勉強している。

いま兄は正月とお盆にしか帰ってこないけど、僕のあだ名がマイキーに決まったとき兄は高校1年生だったから、もちろん僕と同じ満濃町民だった。5つ上の兄がいることはクラス内でもよく知られていたから、兄の存在はマイキーというネーミングの的確性をさらに押し上げた。中学・高校とずっとバスケットボールをやっていた兄は、いわゆる健康優良児だった。僕の倍くらいご飯を食べて、しかも牛乳が好きだったせいで、とにかく体格がよくて背が高かった。兄と比べられると僕の体はとても貧相に見える。もし年が離れていなかったら、僕は兄と比べられながらもっと辛い少年時代を送ることになっていたと思う。年が離れていたおかげで、見た目の差があまり目立たなかったのだ。

兄は僕にとつての音楽の先生でもある。兄は高校の軽音部でバンドをやっていて、歌を歌っていた。兄は楽器はからつきダメだったけど、歌だけはうまかった。高校に入ってバンドに誘われたときも、バスケ部と掛け持ちでライブがあるときだけ活動をするという条件でヴォーカルを引き受けたらしい。

兄はよく僕に音楽の話をしてくれた。アメリカやイギリスのロック・バンドのことや、高校の軽音部とバンドのメンバーのことや、楽器や機材のことを、5つ年下の僕にわかりやすいように話してくれた。ライブがある時期にはスタジオにも連れて行ってくれて、バンドの練習風景を見学させてくれた。バンド未経験者の僕がどうして色々なことを知っているかと言うと、何を隠そう兄のおかげなのだ。兄には本当に感謝している。

僕は小さい頃からピアノを習っていた。別に特別好きだったというわけではないけど、週に一度のピアノのレッスンを欠かしたことはなかった。ということは、まあ好きだったんだろう。そんな僕が兄の影響でピアニストからキーボーディストに転向したのは、自然な流れだったと

思う。

ただし問題がひとつあった。それは、満中に軽音部がなかったことだった。兄に相談はしてみたものの、部活以外でバンドをやったことのない兄は、外でメンバー探しをするためのノウハウを知らなかったらしく、たいしたアドバイスはもらえなかった。

どうしても音楽をやりたいかった僕は、とりあえず楽器が弾けるなら何でもいいやと思って吹奏楽部に体験入部してみることにした。でも、行ったその日にいきなり腹筋をさせられたのが嫌であっさりと入部を断念した。合唱部も検討してみたが、歌を歌うのがそんなに好きではないことを思い出し、見学にさえ行かずに断念した。

吹奏楽部と合唱部については、顧問の音楽教師にも問題があった。両部の顧問を兼任している畑崎という武蔵野音楽大学出身の教師は、毎年3年生になった女子部員に必ず手を出すという不名誉な噂が立つような人物だった。その話を僕は入学してすぐに耳にし、最初の授業のときに彼の風貌を見た瞬間、その噂を信じた。ベートーベン気取りか、長い髪で両耳を隠し（昔ボクシングをやっていた耳が潰れているという説もあった）、たれ目でタラコ唇。しかも髪が薄くて笑うと金歯が見えるその顔には、不敵なエロさが嫌というほど浮き出ていた。音楽はできくせに漢字が苦手という畑崎は、学級懇談会のときに黒板に「生徒」のことを「性徒」と書いてヒンシュクを買ったという逸話も残っていて、女子生徒はもちろん、男子生徒からも徹底的に嫌われていた。そのせいかどうかはわからないけど、僕が2年に上がったときに畑崎は別の学校に転勤になった。代わりにやってきたのは内山という音楽教師だったが、耳が見えないこととエロかったという点では畑崎と少しも変わらなかった。その内山は、現在も吹奏楽部と合唱部の顧問を務めている。

学校での音楽環境に恵まれなかった僕は、しばらく悩んだ末に、結局帰宅部を選んだ。同時に「家で練習して、いつかバンドをやるけん」と父に15万円のローランドのシンセサイザーをねだった。しかし敬ちゃんが父親に機材をねだったときのようにはうまくいかなかった。何と言っても安い買い物ではないから、そうすなりといくはずがなかった。でも、いつまでたっても部活が決まらずに毎日早く帰ってきては家で暇そうにしている僕を見かねたのだろう。ある日の夜、父が僕を書斎に呼んで言った。

「おまえ、ほんまにやるんやな？」

「やる」

「バンドやってどうすんや？ 音楽家になるんか？」

「ちやう。ちやうけどやりたい」

「ちゃんと勉強するて約束できるんか？」

「できる。絶対両方やる」

そして中学1年の夏、卒業まで何も買わないという約束と引き換えに、僕は念願のシンセサイザーを手に入れたのだった。

【シンセサイザー】

一般的に「シンセ」と略して呼ばれるこの言葉は意外と広く知られているにも関わらず、それが何かをちゃんとわかっている人はあまりいない。オルガンとエレクトーンとキーボードとの違いを正確に述べられる人が、町内にいったい何人いるだろうか。

簡単に言うと、シンセサイザーとは「音を作ることができる楽器」のことだ。そして、「楽器」であって、「鍵盤楽器」ではないことも重要だ。シンセの中には鍵盤のないものがある。ではそれで音がどうやって音を出すのかと言うと（あまり詳しく書くと長くなるから簡単に説明するけど）、「他の電子楽器」を使って音を出すのである。ここでまた「他の電子鍵盤楽器」としないことに意味があって、シンセの音を出させる楽器は、別に鍵盤楽器でなくてもいい。笛のような形をしているものもあるし、およそ楽器に見えないヘンテコな機械を使ってシンセを鳴らすこともある。つまり、シンセサイザーとは「音を出す機械であって、必ずしもそれ自体が演奏機能を持っていなくてもいい楽器」だということになる。これに「音を作ることができる」という条件をつければ、ほぼ正しいシンセサイザーの定義になるのではないかと思う。そういうわけで、オルガンはオルガンの音しか出ないし、エレクトーンはあらかじめ用意された音を選ぶことしかできないから、シンセサイザーとは言わない。キーボードも色々な音は出るけど音を作ることとはできないからシンセサイザーとは違う。

そういうややこしい話を抜きにすれば、実際のところ、バンドにおけるパート名（ヴォーカル、ギターのようなバンドにおける役割）を指すときにはキーボード、楽器そのものを指すときにはシンセ、という風にイメージしておけばいたい合っていると思う。ただし、シンセでも何でもない1万円くらいで買えるようなオモチャのキーボードのことを格好つけてシンセと呼ぶのは、僕が絶対に許さない。

【サンレコ】

音楽に関する主な情報源はさっきも書いたように兄だったわけだが、シンセを買ってもらったあと、兄が一冊の雑誌を教えてくれた。それは『サウンド・アンド・レコーディング』という雑誌だった。サンレコは、キーボードリストのためというよりは、サウンドエンジニアのための雑誌だ（キーボードリスト用には『キーボードマガジン』というありふれた名前の雑誌があるが、「あれはチャラチャラしよるけんやめとけ」と兄に言われたから買ったことがない）。

サンレコには毎月大量のシンセをはじめ、膨大な数の音響機材が掲載される。見た目がよく似ているせいで、読み始めのころは何が何のために使われるのかがさっぱりわからなかった。それが楽器なのか、そうでないのかもわからないほどだった。さらに専門用語が頻出するから、基礎知識のない僕には読むだけでも相当な労力が必要だった。それでもともと機械好きだっ

たこともあり、毎月辛抱強く取り組んだおかげで、1年も経つとかなりのことがわかるようになった。

でも如何せん実経験が足りなかった。楽器も持っているし、弾けるのだが、僕はバンド活動というものを一度も経験したことがなかったのだ。兄のバンド練習を見学し、知識はサンレコの誌面から手に入れる。バンドをやる前の僕にとっての音楽とは、その程度のものだったことを告白しておかなければいけない。

【ヨシヒコ】

本当は僕はこいつのことを書きたくない。ステージの真ん中に立ってギターを弾きながら歌うという一番目立つ役でありながら、不真面目な上に下品でエロいからだ。でもこいつのことを書かないと話が先に進まないの、仕方なく紹介することにする（だから順番も最後にしてやったのに、こんな風に前置きをするとやっぱり一番注目を浴びそうですます嫌になるんだけど）。

本名は宗山^{むねやま}義彦。北海道生まれの北海道育ちで、中学に上がると同時に親の仕事の都合で満濃町に引っ越してきた。北海道で12年間を過ごしたヨシヒコは、準・標準語を話す。標準語というものをテレビの中でしか聞いたことのなかった僕たちにとって、ヨシヒコの喋る言葉はいい意味でとても新鮮だった。うらやましいとか格好いいとか思ったことはないが、そういう言葉を口にすることができるということに対して一種の尊敬の念を抱いていたのだ。「くじゃん」とか「くだぜ」という表現は、讃岐っ子である僕にはとても真似のできない異国の言葉だった。そんなヨシヒコをめぐるっては、その話し言葉とキャラクターの濃さが災いして、入学当初から数多くの事件が発生した。ここではそのうちの有名な3つを紹介して、ヨシヒコのことを知ってもらおうと思う。

【疎開事件】

これは1年の1学期のクラス委員を決めるときに、学級委員長に立候補しようとしたヨシヒコのことを誰かが「あんな疎開してきたようなやつのは信用できん」と言ったことに始まる一連の事件だ。彼は疎開という言葉を完全に誤解していたのだが、クラスでとにかく目立つヨシヒコを（本人も目立とうとしていたし、準・標準語のせいで嫌でも目立った）よく思わない何人かが、その誤解をもろともせずに疎開という決して前向きではない単語を使ってヨシヒコのイメージダウンを謀ったのである。結果、まだ讃岐に来て間がなかったヨシヒコは、出鼻をくじかれた格好で意気消沈してしまい、立候補を辞退してしまった。そしてまた悪いことに、彼が学級委員長の代わりに選んだのが牛乳委員という給食の牛乳の配膳や片付けをする肉体労働

働役であったため、「さすが北海道やけん牛乳が似合うのー」というわかりやすい追い討ちを許す結果となってしまふ。これは言うまでもなく「香川県 vs 北海道」という田舎コンプレックスむき出しの醜い勢力争いの構図であり、多勢に無勢のヨシヒコが不利であることは言うまでもなかった。事件と言うよりは、単なるいじめだったのかもしれないと、今になって思う。

【帰化事件】

その事件は1年の夏休み前に勃発した。

香川県は、俗に言う野球留学生の受け皿として知られている。野球留学とは、甲子園に出たい球児たちが地元を離れて他県の強い高校の野球部に入部したり、高校の数が少ないせいでもともと甲子園出場の競争率が低い地域の高校に入学することを指す、どちらかというとイメージの悪い言葉だ。野球留学をするのはほとんどが関西圏（とくに大阪が多いそうだ）の高校生で、その受け皿になってきたのが四国と東北地方だと言われている。1987年の夏の甲子園で香川県の尽誠学園のエースとして活躍した伊良部投手はもともとは兵庫県出身であり、甲子園のために地元を出て他県の高校に野球留学することを選んだうちの一人だ。彼は甲子園に出たその年の秋のドラフトでロッテから1位指名を受けて入団し、いまでも野球留学経験者のお手本のな人生を歩んでいる。

野球留学については留学生を受け入れる側の立場から賛否両論があつて、賛成派は「実力のある選手が入部することで甲子園出場のチャンスが増える」と言い、反対派は「その選手の入部によって、レギュラーの座を奪われる地元の球児がいる」と言つてどちらも引かない。その議論をめぐつて僕がどういふものではないけど、ただひとつ間違いないのは、他県の力を借りることへのコンプレックスが下地にあるということだ。そのコンプレックスがプラスに働くと野球留学賛成、マイナスに働くと反対となるのではないかと僕は分析している。

さて、ここで「ヨシヒコは野球部に入部していた」という事実を提示すれば、野球留学の話がヨシヒコにつながることはすぐにわかつてもらえると思う。

ヨシヒコは小学校時代に札幌のリトルリーグでキャッチャーをやっていた。背丈はそんなに大きくはないが、どうやら肩が強かったらしく、小学生のときにはレギュラーメンバーとしてかなり活躍していたそうだ（本人談）。中学に入っても当然野球を続けるつもりでいた彼は、迷わず野球部に入部したのだが、夏休み前になって隣のクラスのもう一人のキャッチャー候補とのポジション争いが始まったときに、不幸にも野球留学反対という見当違いの逆風にあおられたのだ。もちろんヨシヒコはそんなものはお構いなしで、熱心に練習をした。実力では明らかにヨシヒコの方が上だったにも関わらず、またもや多勢に無勢でヨシヒコは追い詰められる。追い詰められたヨシヒコがある日練習中にグラウンドの真ん中で言った。

「俺はもうこっちに帰化したんだぜ！」

その言葉もまた見当違いだった。外国人Jリーガーや外国人力士のおかげですでに讃岐でも

市民権を得ていた「帰化」という言葉を明らかに間違って使ったヨシヒコはその場で爆笑の集中砲火を浴び、何をバカにされたのかが瞬時にわからなかったヨシヒコは、何とその場で退部を決意してしまう。これがのちに言う『帰化事件』の全貌だ。

【きじょうゆ生醤油うどん事件】

生醤油うどん（あるいは単に醤油うどん）は讃岐独特のうどんの食べ方で、ゆでたての麺を少し水で締め、それに醤油をかけて食べる。醤油は市販の醤油でも構わないが、一般的にはそれぞれの店が独自の醤油を作って出す場合が多い。醤油の他に、トッピングとして大根おろし、ゆず（レモン）、しょうが、ごま、天かすなどを入れるのだが、正しいレシピというものがあるのかどうかは僕は知らない。食べたことがない人には味を想像するのが難しいかもしれないけど、とにかくうまい。特に夏の暑いときにはこのぬるいうどんが無性に食べたくなる。

さて、この生醤油うどんは、讃岐っ子なら知らない人はいないほどのスタンダードなメニューなのだが、2年の夏休みにうどん屋へ行ったときにこのメニューをまだ知らなかったヨシヒコが「あれなんて読むんだ？」と聞いたことでひと悶着が始まった。ヨシヒコの隣に並んで座っていたクラスメイトが、「あれは『キジョウイ』って読むんやで」と嘘を教えたのである。この下ネタギャグはすでに讃岐ではベタなギャグとして、またその不道徳性ゆえに半ば封印されたギャグとして口にしないことが暗黙の了解だったのだが、何とヨシヒコはその食べたことなかった「生醤油うどん」という名のメニューを教えられた通りに大声で発音して、店のおばさんと店中の客から大ヒンシュクを買ったのだった。その過ちはその場の異様な雰囲気から本人がすぐに察知したが、あとの祭りだった。

しかし前に挙げた2つの事件との決定的な差は、讃岐で丸1年を過ごして各種の経験を積んだヨシヒコのその後の対応にあった。何と彼はその場で2杯目のキジョウイうどんを注文し、そして何と3杯目もいくという離れ業をやったのけたのだった。それはもう開き直りというか言いたいようなない暴挙だったが、笑い転げながら店を出たクラスメイトたちは、ヨシヒコを勇敢な者として心からの賛辞を送った。その日はヨシヒコが「讃岐っ子」としてはじめて受け入れられた記念すべき日となった。

また、ヨシヒコはロック・ミュージックを認めようとしないう音楽教師とのいざこざでもよく知られていて、数々の武勇伝を残している。畑崎と相性の悪かったヨシヒコは後任の内山ともソリが合わないらしく、今でもよく喧嘩をしている。

ヨシヒコの紹介がとても長くなってしまったけど、まだヨシヒコのバンドにおける役割についてほとんど紹介できていないので、さらっと流して終わるとしよう。

ヨシヒコはギタリストだ。ギターを始めたのは、例の「帰化事件」で野球部を辞めてからのことだ。結果的に彼の選択は正解だったのではないかと思う。彼はその事件の悔しさをバネに

して（たぶん、だ）、めきめきとギターの腕前を上げた。そして何を隠そう、ヨシヒコはこのバンドの創設者であり、残りのメンバーを集めた他ならぬバンド・リーダーなのだ。最初に書いたように、僕はヨシヒコのことをよくは思っていない。不真面目な上に下品でエロいからだ。ギターの練習だけは熱心だったが、自分が興味のないことからではできるだけ逃げて周りに迷惑をかけ、女の子の前でも平気で下品なことを言う。でも僕はヨシヒコを憎みきれない。それは讃岐弁に毒されずに準・標準語を使い続ける勇氣と、これまでの数々の事件を切り抜けてきた根性に一目を置いているからに他ならない。そして何よりヨシヒコは、このバンドを結成してくれた恩人でもあるのだ。

一九九五年三月末 春休み、そして新学期

少し時間を戻さないといけない。

事の始まりは今年の3月の末、2年生3学期の終業式の日だ。

終業式のあとにクラス替えの発表があるのが恒例だったから、教室に戻ると全員が担任のやってくるのをそわそわして待っていた。担任が教室に入ってきて短い挨拶をしたあと、新しいクラス名簿が配られた。名簿を手にとった順に、つまり教室の前から後ろへ向けて、まるで津波のようにどよめきが走る。学年にクラスは3つしかなかったから、3年にもなれば誰がどうい人物なのかは名前を見ればある程度わかるようになる。「おおおお、あの子と一緒にや！」とか「またお前とおんなじクラスかい」とか「こいつだれやろ、知つとる？」とか、そういうあからさまな会話が担任そっちのけで飛び交う。僕は名簿の上から順にさっと目を通す。思っていたとおり、知った名前ばかりだ。別に誰と一緒にいたいという希望もなかったから、僕にとってクラス替えは単なる通過イベントに過ぎなかったのだが、ひとつ気になったことがあった。

「平尾貴之？」

僕はその名前に見覚えがなかった。転校生かな？ と一瞬思った。でも転校生なら、逆に目立つはずだ。僕は両隣のクラスの地味な人物を片っ端から思い浮かべてみた。でも地味ではあっても、彼らにはちゃんと名前があった。どんなに地味でも3クラスしかないのだから、2年間のうちに一度は校内のどこかですれ違っているはずだ。校舎が特別広いわけでも、教室が離れているわけでもないのだし。

そんなことを思っていると、隣のクラスでもどよめきが起こった。うちのクラスに少し遅れて名簿が配られたのだ。どよめきの中から、ある人物の声だけがやたらと目立って聞こえてくる。

「おー！ すっげえ、お前と3年ずっと一緒かよ！ ジーザス！ え？ お前も？ おいおい

そんな嫌そうな顔しないでくれよーおい」

ヨシヒコの声だ。丸2年が経っても標準語のままだから、とにかく目立つ。ヨシヒコの有名な口癖のひとつに「JESUS」がある。「信じられねえ」や「すげえ」といったニュアンスで使っているらしいが、それが英語的に正しいのかどうかはわからない。

その声を聞いたとき、僕ははっとして名簿を見た。僕の名前のずっと下の方に、ヨシヒコの名前があった。後ろの方の席で「えー、あたし宗山君と同じクラスなんイヤやー」と誰かがぼやいている。ヨシヒコと同じクラスになったことのある友人がよく「あいつがおると授業中に眠れん」と言っていたことが頭をよぎる。

しかしそれはしょうがないことだった。クラス分けはもうすでに決まっているわけだし、今さら誰かが反対したところで覆るはずもないのだ。

「まあ、しゃあないやん」

そして僕は平尾貴之という人物の顔が思いつかないまま短い春休みを迎え、間もなく中学最後の1年のスタートを切った。

【井上さん】

僕たち4人がバンドを組めたのは、さつき説明したとおりヨシヒコの努力によるものだった。でもどうしてヨシヒコが平尾を誘ったのかということは、ずっと僕の中では大きな謎だった。でも謎には必ず真相がある。ただでさえ地味でマイナーな平尾に、ベースという一般的に地味でマイナーだと思われる楽器を持たせることに成功したのはちゃんとわけがあった。それは結論から言うと一種の脅迫だった。

隣のクラスに井上さんという女の子がいる。井上さんは1年のころから一部の男子の間で、和製美人と評されて人気があった。その呼び名は、井上さんが男女を合わせてたったひとりの弓道部員だったことからつけられた。顔は言うまでもなく美人の類だったが、どちらかというと古風な雰囲気が漂う顔だ。笑うと少し浅香唯に似ているという意見も多く、古いアイドルのイメージがしっくりきたのかもしれない。でも僕が思うに、容姿はともかく、井上さんの魅力はいわゆる女子グループに所属しない一匹狼のような燐とした立ち振舞いにある。休み時間には一人で本を読み、昼の給食はたいてい教室の隅で2、3人の小人数で机を囲んで食べ、放課後は武道館の裏で黙々と弓を引く。そういう芯の通った感じが、一部男子の共感と呼んだのだと思う。そして往々にしてそういう女の子は、女子からはあまり好かれず、それがまた男子の心を掴む。まあそういうありきたりな心理循環に、みんな好んで飛び込んでいったというわけだ。結局、僕は3年間井上さんと同じクラスにならなかったから、ほとんど話をしたことがなかった。雲の上の人、という言い過ぎだけど、僕との接点はいくらがんばって探してみても、同じ学年だということとはひとつも見つからなかった。

実は井上さんが有名なのはもうひとつ理由がある。それは同じ学年にもう一人井上さんがいたことだ。もう一人の井上さんは、はっきり言ってとても美人とは呼べない女の子だった。その井上さんは、陰で「ファルコン」というあだ名で呼ばれていた。顔が映画『ネバーエディングダストリー』に出てくる空飛ぶ白竜ファルコンにそっくりだったからだ（残酷なネーミングだと思うが、本当にそっくりなのだ）。言うまでもなくそのファルコン井上さんと和製美人の井上さんは、同じ名前だというだけで何かと比べられた。そして明らかに美人度の高い方の井上さんは、そうでない方の井上さんと比べられて相対的な美人度を上げ、さらに注目を浴びることになる。

新学期の最初の金曜日のことだ。放課後の掃除を終えてみんなが部活動に散ったあと、ひと気のなくなった教室に平尾とヨシヒコがいた。平尾は机の中の片づけをしていて（週末の日課だったそうだ）、ヨシヒコは土日の遊び相手を探しているところだった。ヨシヒコが遠目に平尾の様子を伺っているところで、平尾は一生の不覚を取ってしまう。平尾は机の中から、大事にしていた1枚の写真を床に落としてしまうのだ。その写真はいち早くヨシヒコの目に留まる。

「あ」

平尾がそう思ったときにはもう遅かった。ヨシヒコが駆け寄ってきて、その写真を取り上げたのだ。その写真には、和製美人の井上さんじゃない方の井上さんが映っていた。

それからのヨシヒコの行動はものすごかった。彼はその写真を持ったまま、「スクープ！　大スクープだぜえ！」と叫びながら学校中を走り回ったのだ。そのとき学校に残っていた全校生徒がその姿を目撃したという話だけど、決して大げさではないと思う。

そしてヨシヒコはずる賢かった。いや、冷静だったと言うべきかもしれない。ヨシヒコはそれだけのことをやりながらも写真は誰にも見せず、最終的に平尾の脅迫に使ったのだった。

ヨシヒコは青ざめた平尾の耳元でささやいた。

「ファルコン平尾って言われなくなかったらベースやれ」

その一言で平尾は落ちた。

思うに、「おまえだけだぜ」と言って僕にこっさり打ち明けてくれたように、ヨシヒコはあちこちでその話をしてたんじゃないだろうか。その場でばらすよりも、別の方法で利用しておいて、最後にばらしてしまえ。学校中を駆けまわりながら、たぶん彼の頭はそうように働いたのだと思う。

僕がバンドに誘われたのは、その事件の翌々週の月曜日だった。休み時間にヨシヒコが僕のところへやってきて「なあマイキー、文化祭でバンドやらねえか？」と言ったのだ。前置きはなかった。僕はふたつ返事で承した。そのときすでに、同じクラスの敬ちゃんもメンバーに加わっていた。強引だったから断れなかった、と敬ちゃんは随分あとになって僕に打ち明けてくれた。

そのようにして、僕の人生におけるはじめてのロック・バンドが誕生したのだった。

一九八五・四・二十四(日) 大分県立大分大学

僕たちのバンドが誕生した日は、奇しくも文化祭まであとちょうど5ヶ月という日だった。文化祭は毎年9月最後の土日を使って開催される。そして僕たちの出番となるイベント「音楽発表会」は2日目の日曜日というのが恒例だった。「音楽発表会」なんて、もっとましな名前にしろよと思うけど、もともとは吹奏楽部と合唱部の発表の場として用意されたステージだったのだから文句は言えない。フオーク・バンドやロック・バンドが参加するようになったのはつい最近のことらしいし、いまだに音楽教師を筆頭にした一部の教師たちからはそういうバンドが参加することに対して「ふさわしくない」という理由で反対の声が上がるというから、参加できるだけでもありがたいと思わなければいけないところなのだ。

スタジオ15畳に機材がはじめて運び込まれたのは、ゴールデンウィークの直前だった。放課後になって敬ちゃんが僕に話しかけてきた。

「ねえねえ城崎君、うどん屋さんが機材届けてくれるてよ言ってるおるけど、明日の夕方で構わない？かまん？」
敬ちゃんは何のことをマイキーとは呼ばない。

「かまんよ。運んでくれるん？」と僕は言う。

「うん、車で運んでくれるて。5時半でええ？」

「ええよ、スタジオにおつたらえんやろ」

次の日、僕は同じ帰宅部の平尾と一緒に、まだスタジオとは呼べない日本家屋の前で機材の到着を待った。機材には敬ちゃんがリクエストしたものに加えて、マイク1本とマイクスタンド1本が追加されることになっていた。「コーラスやるやろ」という、うどん屋のオーナーの粹な計らいのおかげだ。

埃にまみれたワゴン車が到着したのは6時前だった。ワゴン車を運転していたおじさんはうどん屋の名前が入った青いエプロンをしていた。オーナーではないようだった。

「すまん、遅くなった」

「すいません、わざわざ届けてもらて」

「いやいや、かまんのぞ。ほれより、何を始めてるんだなんがでつきよんで？」

「音楽スタジオや。バンド組んで文化祭に出るんや」

「ほお、バンドか。そら達者なのー」

まだなんちゃできんのや、と僕は心の中で思ったが、口には出さなかった。

「あれ？ ドラムは？」

「おおそうや、車がこんまいけんドラムがのらんかったんや。また来るきに今日はこれでおおらえてつか。無理に積んでめげたらいかんしな。ほなけどドラムちゅうのは、がいものすじくにおおつきよいのう、え？」

僕と平尾はおじさんの流暢な讃岐弁に相槌を打ちながら、機材を降ろすのを手伝った。一番大きかったのはベースアンプだった。

【アンプ】

アンプとは、スピーカーのようなものである。いい加減な表現だがこれは間違いではない。ではスピーカーと何が違うかと言うと、実は僕にはわからなかった。大きな音を出すという意味では同じだし、見た目もよく似ている。でもギターアンプとベースアンプがあるくらいだから、ちゃんと違うところがあって使い分けるのだろう。それについてはサンレコにも書いてなかったし、兄も教えてくれなかった。だから僕はアンプについて、その程度のことしか知らなかった。

その日スタジオ15畳に運び込んだ黒いベースアンプは、とても大きかった。高さは僕の胸のあたりまであって、幅も1メートル近くある。いかにもスピーカーっぽい網の目のパネルがついた大きな箱の上に、シールド（音声用のケーブル。カラオケのマイクから伸びている長いケーブルと同じものだ）のジャックを差し込む穴や、丸いツマミや電源スイッチが並んだ細長い箱が乗っかっている。その大きさや重量感から、1万円や2万円で買えるようなものではないことは誰が見てもわかる。プロ用の機材なのだろう。

僕と平尾はそのベースアンプを慎重に運び、あらかじめ畳の上に敷いてあった分厚いダンボールの上に乘せた。思ったよりも大きかったので、余りのダンボールをかき集めてきて、何とか間に合わせた。言うまでもなく、キヤスターが畳を傷めないようにするためだ。

ギターアンプはベースアンプの3分の1ほどの大きさしかなかったから、用意していたダンボールの上にぴたり収まった。機材を全部降ろしてしまうと、うどん屋のおじさんは忙しそうに帰って行った。

機材の配置はあらかじめ決まっていた。壁側にアンプ2台。それと向かい合うようにドラムセット（ドラムの位置には正方形に切った厚手の絨毯が敷いてある）。キーボードはドラムに向かって右手の障子の前。そしてキーボードの向かいのふすまの前が、マイクとキーボード用のミキサーとスピーカーを置く場所だ。

ミキサーについては、僕はアンプよりも確かな知識を持っている。キーボードリストにとってはシンセの次に大事な機材だからだ。ミキサーはその名の通り、音を「混ぜる」機械だ。でも混ぜるというよりは、「まとめる」という表現の方がわかりやすいだろう。

いま僕はシンセを1台しか持っていない。だからミキサーなんてなくても、シンセとスピーカーをシールド一本でつなげばそれで事は足りる。でももし2台目、3台目を使うことになったらどうなるか。スピーカーにシールドを差す場所が足りなくなるのだ。テレビなんかでよく見るように複数のシンセをステージの上で同時に使うのは今や常識だから、シンセ1台1台に1つずつスピーカーを割り当てていたら、ステージの上はスピーカーで溢れて大変なことになる。そこで活躍するのがミキサーだ。

ミキサーにはいくつかチャンネルがあつて、それぞれのチャンネルに1本のシールドを差すことができるようになっていて。そしてチャンネルごとにボリュームを変えたり、音質を変えたりすることができる。ボリュームを変えるツマミのことをフェーダーっていうけど、放送室なんかには必ずある「前後にスライドする四角いツマミ」のことだ。ミキサーにはチャンネルと同じ数だけフェーダーがあるから、ぱっと見てフェーダーが8つ並んでいれば8チャンネルのミキサー、16あれば16チャンネルのミキサーということになる。

では僕がシンセを1台しか持っていないのにどうしてミキサーが必要かと言うと、ヴォーカルのマイクをそこにつなぐ必要があるからだ。つまり、シンセの音とマイクの音をミキサーでまとめて、それをスピーカーに送ってやるというわけだ。ミキサーにはシンセやマイクのほかに、CDプレイヤーをつなぐこともある。練習中にみんなで曲を聴くときに便利だ。それから、無茶をすればギターやベースもつなぐことができる。ということとは、やろうと思えばギターアンプやベースアンプがなくても、ミキサーとスピーカーがあれば練習ができるということになる。ただし、そんなことは絶対にしない。なぜかと言うと（さっきも書いたように僕はスピーカーとアンプの違いをわかっていないから半分は想像だけど）、根本的にマイクが出す音と、シンセが出す音と、ギターやベースが出す音の種類が全然違うからだ。間違つたつなぎ方をする、と、音が出ないか、最悪の場合は機材が壊れることもあるという。だから、ギターとベースは専用のアンプを、シンセとマイクはスピーカーを使わなければいけないのだ。

敬ちゃんが父親に機材のことを相談したときに必要な機材の名前がすらっと出てきたのは、実はヨシヒコの指示があつたおかげだった。ヨシヒコはさすがに2年のキャリアがあるだけであつて、その辺のことはよく知っている。敬ちゃんはヨシヒコに言われたとおりに父親に話をしただけで、たぶんアンプとスピーカーの違いなんて分かっていないと思う。ついでに平尾について言えば、彼はたぶん今運び込んだ機材が何のためにあるのかさえわかっていなかっただろう。何せ平尾はまだベースを持っていないのだ。だからアンプやスピーカーについての知識なんて、あるはずもない。

ベースリストがベースを持っていないのに、練習スタジオは着々と出来上がっている。それが我が中3バンドの現実だった。

ミキサーとスピーカーを設置し終わると、部屋の中は急にスタジオらしくなった。あとはドラムとシンセがあれば、それはどこからどう見ても練習スタジオになる。敬ちゃんの父親が店用ということで買ってくれたミキサーは、8チャンネルの銀色のミキサーだった。黒いフェーダーがずらりと横に並んでいるのを見ると、それだけでわくわくする。

僕がミキサーとスピーカーの配線をやっている間、平尾は電源の延長コードを畳の上に引き回していた。思ったよりも長さが必要で、持ってきていた延長コードを全部使ってしまったようだった。

【ギター】

ひと休憩しているところにヨシヒコがやってきた。歯医者へ行くから遅れると言っていたけど、荷物の積み降ろしをしたくないだけじゃないのかと僕は疑っていた。

ヨシヒコは部屋に入ってくるなり、「おおっ！」と大げさに驚いてみせた。

「すげえ、マジスタジオじゃねえかよ。すげえ、アンプマジでけえじゃん」

「うまげにできたやろ」と平尾が自慢げに言う。

僕はベースアンプの方が大きいと文句を言だろうと思っていたけど、それについてヨシヒコは何も言わなかった。部屋の中をせわしく検分しているヨシヒコに向かって僕がそれとなく質問すると、ヨシヒコはこう言った。

「なーに言ってたんだ、ベースの方が低音だから大きいんだよ。ギターは高音だから小せえの」

「そんなもん？」と僕が聞き返すと、「そ」と短い返事が返ってきた。

僕はついだと思って、アンプとスピーカーの違いについて質問してみた。するとヨシヒコはわけもなくこう答えた。

「アンプは音を大きくする部分で、スピーカーは音を出す部分」

僕と平尾は揃って「ふーん」と頷いたが、わかったようで、実はよくわからなかった。

「例えばな」とヨシヒコが言った。僕と平尾は身を乗り出した。「このギターアンプはコンボタイプって言って、アンプとスピーカーが一緒になってるやつだ。そっちのベーアンは何かタイプって言って、別々になってる。ほら、上と下とでパーツが分かれてんだろ。上がアンプで、下がスピーカー。片方だけじゃあ音は鳴らないぜ」

「なるほど」と平尾はその説明に感心していたが、僕はベースアンプのことをベーアンと呼んだことのほうに感心していた。

「レコードは針がレコードの上を引っかいて音が出るだろ。でもあんな小さい音がいきなりスピーカーから出てくるわけがねえんだよ、な？ それを増幅してやるのがアンプ。ギターだっ

て同じだぜ。この部分な——」そう言ってヨシヒコは持っていたギターの弦の付け根あたりにある細長いプラスチックのパーツを指差した。「これがピックアップ。ここが弦の音を拾って、シールドを通してアンプにつながって、最後に増幅された音がスピーカーから出てくる。アンプがないと、こんなちっちゃな音が聞こえるはずがねえんだ」

「うんうん」と平尾が頷いている。

「なあマイキー、CDプレイヤー持ってるか？」

僕はヨシヒコが何をしようとしているのか分からないまま、カバンの中からスピッツのCDが入ったCDプレイヤーを出した。ヨシヒコはそれを受け取るとイヤフォンを手に持って再生ボタンを押した。CDの音がほんの少しだけイヤフォンから漏れた。

「これをな、ピックアップに近づけるとだな——」

突然CDの音がギターアンプから流れ出した。僕と平尾が顔を見合わせて驚いているのを横目にヨシヒコがギターアンプのツマミを回すと、小さかった音が一瞬にして爆音に変わった。アンプが壊れるのではないかと思うくらいの大音量がキンキンと部屋の中に響いた。今までに聞いたことのないようなボリュームだった。

「すげー！」

今度は僕と平尾は同じことについて感心していた。ギターとアンプの仕組みが一瞬にして理解できた瞬間だった。

【ベース】

ゴールデンウィーク中に、平尾のベースを買いに行くことになった。もちろんヨシヒコがアドバイザーとしてついて行くことになり、僕も興味があつたので同行することにした。

香川県にいくつ楽器屋があるのかは知らないけど、少なくとも満濃町とその近隣の町内にはひとつもない。だから楽器や楽譜をかうときには、ローカル線の琴平電鉄（通称コトデン）に乗って1時間もかけて高松市内の楽器屋まで行く。そこまで遠出をしなくても楽器屋はあるにはあるが、中途半端なところには中途半端な楽器屋しかないからやめたほうがいい。それでもコトデンで高松まで行くと片道500円はかかるから、よっぽどの用事がないと行くことはないし、行ったからには何かを買わなければすごく損をした気持ちになる。満濃町民は高松の楽器屋へ買い出しに行くわけだ。

コントラバスとはウッドベースのことだ。つまり「バス」と「ベース」は、どっちが何語かは知らないけど同じ意味なのだ。

オーケストラにおけるコントラバスが最低音域を担当し、全体のサウンドの底を支えるのと同じで、ロック・バンドにおけるベースもまたサウンドを支える重要な役割を果たす。

ギターが複数の弦を同時に弾いて和音を奏でるのに対し、ベースは基本的に単音しか出さな

いからハーモニーという言葉とはほぼ無縁だ。低音担当だから、出てくる音は全部暗い。そんなわけで、ベースという楽器は前にも触れたとおり、地味でマイナーな楽器だ。見た目がギターと酷似しているだけに、どうせやるなら派手なギターを、とみんなが思うのは無理もない。ステージにおけるベーシストの立ち位置はたいてい隅っこだし、目立とうと思っても限界があるのだ。

僕は楽器屋に行ってもいつもキーボードのコーナーと楽譜のコーナーしか見ないから、ベースやギターを置いてあるところには行ったことがなかった。その日はじめてその一角に足を踏み入れたわけだが、まず驚いたのはギターとベースの数の違いだ。ざっと見たところ、10倍は違う。もちろんベースが少ないのだ。

ギターとベースの見分け方は簡単だ。ギターは弦が6本でベースは4本。そしてベースの弦はギターより太い。ベースの中には弦が5本あるものもあるらしいけど、その楽器屋にあったベースは全部4弦だった。そして不思議なことに、ベースのボディのデザインは、総じてギターよりも地味だった。地味なのがベーシストの好みなのか、地味じゃないとベースらしくないのか、そのあたりのことはよくわからないけど、僕はそれを発見した瞬間、平尾が持っている楽器はベースじゃないといけないような気がした。同時に、ヨシヒコにはギターが似合うなとも思った。

ヨシヒコは僕たちの前に立って、ベースの置いてある辺りを慣れた足取りでひと回りすると、遠くからこちらをじっと見ていた店員を呼んで「試し弾きをしたいんですけど」と言った。すると店員はどこからかシールドとピックを持ってきて、床に置いてあったアンプ（もちろんベアード）にシールドを差した。

【ピック】

ピックは琴でいうところの「ツメ」だ。ピックを右手の親指と人差し指で持ち、先っぽで弦をはじくと音が出る。ピックはおにぎりのような角の丸い三角形をしていて、薄いプラスチック製だ。大きさや形は大体似ているが、色やデザインは色々ある。指で持って弾いているせいで周りからはピックのデザインなんてほとんど見えないわけだけど、これだけ種類があるということは、それぞれにこだわりがあって使い分けるのだろう。見えないお洒落というわけだ。ちなみに、ギター用のピックよりベース用の方がひとまわり大きく、ほんの少しだけぶ厚い。そして僕が観察して気づいたことをつけ加えるなら、ベースのピックのほうがデザインが地味だ。ベースはどこまでも地味路線で行きたがっているように思えてならない。

ギターにしろベースにしろ、実はピックを使わなくても演奏はできる。いや、「演奏ができる」というより、「ピックを使わない奏法がある」と言うほうが正しいだろう。フォーク・ギターを弾くときは大抵ピックを使わないし、テレビで見ているとベースは指で弾いていることのほう

が多い。でもいわゆるエレキ・ギターはみんなピックで弾いているし、とくにソロの速いフレーズはピックなしで弾くのは難しいだろう。ピックを使うか使わないかは、弾く曲や楽器によって変わるとのことだ。

「予算はどのくらい？」と店員がヨシヒコに尋ねた。するとヨシヒコは「4、5万です」と答えながら、平尾に確認するような視線を送った。平尾は「うん」と一言だけ返事をした。そのやりとりを見て、店員は状況を理解したようだった。

「あんまし種類がないけん、見た目で選んだらええよ」と彼は平尾に向かって言った。「3万円のやつもあるけど、あんまりお勧めできないな。さあ——この4万3千円のやつか、その向こうの5万円のやつか——どっちかやろうね」

そう言いながら彼はその2本を壁から下ろし、片方にシールドを差してアンプの電源を入れた。「ブーン」という低音のノイズがわずかにアンプから漏れた。平尾の代わりにヨシヒコがベースを受け取り、近くにあった丸椅子に腰掛けて指で弦をはじいた。

ボン、ブーン、ボツ、ボツ。

生のベースを近くで見たことは何回かしかないけど、ちゃんと弾けているように見えた。低音すぎてメロディが聴き取りにくいのが、同じフレーズを繰り返して弾いているようだった。

「んん——」

ヨシヒコはそう唸ってからアンプのボリュームを絞り、シールドをもう一本のベースに差し替えた。今度も同じようなフレーズを何度か弾いたあと、ヨシヒコは言った。

「こっちのほうが弾きやすい気がするぜ」

ヨシヒコはそう言いながら、その値段の高い方のベースのボディを持ち上げ、鉄砲を構えるような格好でネックの反りを確認していた。ネックは弦を張っている細長い板の部分で、そこが真っ直ぐで反っていないものがないと聞いたことがある。

店員さんが平尾に向かって、「君もちょっと触ってみい」と言ったので、平尾はヨシヒコの持っていたベースを受け取り、ピックを持って見よう見まねで音を出した。

ブーン、ブーン。ブーン、ボフツ。

最後はむせたようなどん詰まりの音だった。でも平尾の顔は真剣そのものだった。指が少し震えていた。平尾はもう一度弦をはじき、今度はその音が伸びて段々小さくなるのをじっと待った。10秒くらいして音がほとんど聞こえなくなってしまうと、今度はヨシヒコに頼んで安いのベースに替えてもらった。同じような要領でまた何度か弦をはじいたあと、平尾はヨシヒコと僕の顔を交互に見ながら「こっちがええわ」と言った。

それから平尾は1万円の小さなベースアンプと、錆止めのスプレーと、ピックを2つ買った。ピックは店員さんがおまけをしてくれた。平尾がピックを使うことは、楽器屋に来る前から決まっていたみたいだった。「初心者は絶対ピック弾き」とヨシヒコが平尾に言ったらしい。

ヨシヒコはギターの弦を何本か買ったみたいだったが、僕は何も買う物がなかった。キー

ボードにはギターやベースみたい消耗品がないのだ。

帰りの電車の中で、僕は平尾に聞いてみた。

「なあなあ、平尾はなんでベースこっちにしたん？ 弾きやすかったん？」
すると平尾は言った。

「黒かったけん」

それを聞いた僕とヨシヒコは「ギャハハハハ！」と大声で笑った。同じ車両に乗っていた全員がこっちを向いた。でも僕たちはしばらく笑い続けた。平尾は「なんがおもしろいん？」というような顔をしてこっちを見て困っていた。

「や^だつて、平尾がむちやマジな顔でひ^弾つきよ^いったけん、弾き心地とか音とか、そんなんで選んだんかと思った」

僕がそう言うと、ヨシヒコも笑いながら何度も頷いた。

「えー、ほん^だな^ててそんなんわからんやん俺には。はじめてやし」

「ほんなら最初から黒いのがええって言うとならよかったのに」

「ちやうよ、あっちのほうが派手やったけんやつて」

その日、僕とヨシヒコは帰りの電車の中で平尾をからかい続けた。やっぱりベースリストは地味志向なのだと思信した一日だった。

【ドラム】

ゴールデンウィークの最終日に、スタジオ15畳にドラムが運び込まれた。前と同じうどん屋のおじさんが同じワゴン車で届けてくれた。

確かにドラムは大きかった。ひとつひとつのパーツが大きく、太鼓の中身は空洞なのにそれなりに重い。「太鼓」と書いてしまうと何だか鈍くさい感じがするが、ドラムセットは太鼓とシンバルの組み合わせだと言ってしまうと構わないだろう。細かく言えば、大太鼓と小太鼓がひとつずつ、それにちよつと音の違う中くらいの太鼓が2つ。大きなシンバルが2枚と、小さなシンバルが2枚重なり合っているやつが1組、ということになる。

大太鼓というのはその名のとおり一番大きい太鼓だ。小学校の音楽室の倉庫にごろごろと転がっていたから馴染みがある。首や腰にかけたベルトで吊ってお腹のあたりに持ち、それをリング給みたいな形のスティックでドーン、ドーンと横から叩くあれだ。太鼓自体が重いし叩くの力があるから、力持ちの男子の仕事というイメージがある。あの大太鼓を床に置いて、ヘッド（スティックで叩く皮の部分）を手前に向ければ、それがバスドラムだ。ただし、スティックは手で持たず、特殊なペダルに取り付けておいてそれを右足で踏んで音を出す。

小太鼓は大太鼓と同じく駅弁販売みたいにベルトでお腹のあたりに固定するが、ヘッドが横ではなく上向きについていて、それを木琴を打つような格好で両手に持ったスティックで叩く。

鼓笛隊の先頭のほうでダラダラダラとスティックを残像ができるくらい速く動かして鳴らすあれだ。その小太鼓を特殊なスタンドに乗せれば、それがスネア（正式にはスネアドラム）だ。ドラムセットの中ではセンターに置いたバスドラムよりもほんの少しだけ左にあって、ドラマーは普通、左手に持ったスティックで叩く。

「小さなシンバルが2枚重なり合っているやつ」は、ハイハットと呼ばれている。バスドラムやスネアに比べてあまり馴染みのない名前だが、ドラムセットの中で一番たくさん叩かれるのがハイハットだから、当然とても重要なパーツだ。ハイハットの見た目は、おもちや屋の店頭でやかましく動き回る猿のぬいぐるみが両手に持っているシンバルを想像すればいい。その2枚のシンバルの真ん中に穴を空けてそこに鉄の棒を差し、横向きではなく、棒を縦にしてスタンドに固定すればそれがハイハットだ。形は2枚ともまったく同じで、大きさは洗面器くらいだ。それからスタンドの足元にはペダルがあって、それを左足で踏むと2枚のシンバルがくっついてカチカチとミュート（消音）の効いた硬い音が出て、ペダルから左足を放すとシンバルが少し離れてシャンシャンと派手な音が出る。ハイハットはスネアの左奥に置き、右手に持ったスティックで叩く。つまり、両手を体の前で交差してスネアとハイハットを叩くわけだ。さて、以上の3つのパーツが、ドラムにおける最重要パーツ、通称「3点セット」だ。この3つ以外は言ってしまうえばおまけだから、なくても演奏はできる。3点セットを中心に演奏し、ところどころで「中くらいの太鼓（Ⅱタム）」や「大きいシンバル（Ⅱクラッシュシンバルとライドシンバル）」を叩いてアクセントをつけるのだ。

【4^{フー}ビート】

具体的な例を挙げてみよう。ここに、

ズン、チャ、ズン、チャ

という4つの音で構成されたリズムがあったとすると、2回の「ズン」はバスドラム、2回の「チャ」はスネアの音だ。そして4つの音すべてに対して1回ずつハイハットが鳴る。「チツ、チツ、チツ、チツ」が「ズン、チャ、ズン、チャ」にかぶさるわけだ。これが基本的な4ビートの音の鳴り方だ。

これが8^{エイト}ビートになると、ハイハットを叩く数が倍に増える。つまり、4ビートの「ズン、チャ、ズン、チャ」の上に、ハイハットが「チツチツチツチツチツチツ」と8回鳴るのだ。これを基本にして、スネアやバスドラムのなる回数を増やしたりタイミングを変えることで、色々なバリエーションが生まれる。例えばバスドラムをひとつ増やすと、「ズン、チャ、ズズ、チャ」や、「ズン、チャズ、ズン、チャ」になったりする。もつと数を増やせば、「ズン、チャズ、ズズ、チャズ」みたいなややこしいパターンにもなる。でも大まかに言って、「バスド

ラムとスネアを（ほぼ）交互に叩く」ことと「ハイハットは（ほぼ）一定のリズムで鳴り続ける」のが特徴だ。

こう書いてしまうととても簡単なことのように聞こえるけど、実際にやってみるととても難しい。何といっても両手両足が常に違う動きをするわけだから、両手で済むピアノより面倒なのだ。僕は兄の練習についていったときに何回か叩かせてもらったけど、一番単純な4ビートをやるのが限界だった。これが8ビートになると音が増え、16ビートになるとさらに音数が増える。じゅうろく

そんなわけで、ドラムの仕組みについて知ってから、僕はドラムを叩ける人のことを手放しで尊敬するようになった。

ドラムセットの設置は敬ちゃんが一人でやった。場所や高さの調整は敬ちゃんにしかわからなかったし、敬ちゃんにしかできなかったからだ。僕と平尾は敬ちゃんの作業を見ながら、力仕事の部分だけを手伝った。それぞれのパーツはどれもそれなりに重かった。

面白かったのはチューニングだ。ピアノに調律があり、ギターやベースにチューニングがあるように、ドラムにもチューニングがあるらしい。敬ちゃんがチューニングしていたのは主にスネアだった。スネアの丸い枠の部分に均等に散らばった7つのネジがあり、それをオルゴールのネジ巻きのような金具で締めたり緩めたりして音を調整する。締めると音が高くなり、緩めると低くなる。締めるネジの場所によっても音が変わる。敬ちゃんは左手にスティックを持ってヘッドを叩きながら、右手に持った金具でネジを締めたり緩めたり、回す場所を変えたりしながらチューニングをした。とても慣れた手つきだった。

他の太鼓もチューニングをするそうだが、敬ちゃんがこだわっていたのはスネアだった。バスドラムもタムもほとんど触らなかった。敬ちゃん曰く、「スネアが一番大事やけんちゃんとやるん。でもバスドラも毛布とかを詰めてチューニングするんよ」ということだった。それを聞いた平尾が「どつかで太鼓に毛布詰め込んだん見たことあるで。あれはそういう意味やったんかー」といたく感心している横で、僕は「バスドラって略すんや」とまた別のポイントに感心していた。

僕と平尾が敬ちゃんのチューニングを見学している間、ヨシヒコはずっとギターを弾いていた。「そんなの俺は全部知ってるぜ」と言わんばかりだった。

こういうとき、讃岐弁でこう言うとき、気持ちがよく伝わる。

はむかっく
がいい！

【バンド名】

スタジオも完成した。ベーシストがベースを手に入れた。残るはバンド名を決めることと、

曲を決めることだった。

バンド名はとても重要だ。たとえ1回きりのライブだったとしても、バンド名は真剣に考えなければいけない。どうやって決めようかという話をしていたときに、ヨシヒコが「全員で1つずつ持ち寄って多数決で決めよう」とめずらしくまともなことを言い、それに全員が賛成した。

いざ考え始めてみると、その持ち寄り多数決システムのアイデア自体は良かったのだが、1つずつというのが意外と曲者だということに気づいた。1つに絞れないくらいたくさんさんのバンド名を思いついてしまうのだ。でも今さら「3つまでにしよう」とは言い出せず、僕はゴールデンウィーク明けの1週間を丸々バンド名を決めることだけに費やすことになった。

僕が真っ先に考えたのはグーニーズからヒントを得ることだった。バンドのリーダーはヨシヒコなんだから、僕のあだ名がマイキーだという理由でバンド名にグーニーズを持ち込むのは無理があるし、あまりにも芸がない気もした。でも僕はどうしても自分のバンド名に映画のグーニーズを使いたかった。

そこで僕はまず「フラテリーズ」はどうだろうか考えた。フラテリーは映画の中で子供達を追いつつ悪役一味の名前だ。仮面ライダーで言えばショッカー、ガンダムで言えばザクに相当する。でもフラテリーズの中にマイキーがいるのはどうなんだろう？ とすぐに思い直し却下。

次に思いついたのが、英語で海賊を意味する「パイレーツ」だ。響きもいいし、意味を知らなければそんなに悪い印象を受けない。でもアメリカのアメフトかアイスホッケーにそんな名前のチームがあったような気がしてすぐに却下。二番煎じはよくない。

次は「ウィリーズ」。これは映画に出てくる、海岸線の洞窟に宝を隠したという海賊のリーダー・片目のウィリーの名前だ。これも悪くはない。でも何となく最後に「ズ」をつけないと名前が締まらないのが嫌だった。それに複数形にすると全員が海賊のリーダーになってしまった変な感じがする。それならまだ「パイレーツ」のほうがましだ、ということでもこれも却下。

他にもたくさん思いついたけど、難しいことを考えれば考えるほどグーニーズからどんどんと遠ざかってしまい、結局僕はバンド名を決められずにいた。

スタジオで多数決をとるという日の前日になって、僕は映画『グーニーズ』をもう一度観てみようと思い、レンタルビデオ屋に行った。店の奥のほうの旧作コーナーで古くなって色褪せたビデオを見つけたとき、僕の胸は高鳴った。シンディローパーのテーマ曲が頭の中に蘇った。

僕は全速力で自転車をこいで家に戻ると、誰もいない居間でビデオを再生した。映画が始まって20分のところで、僕ははっと息を呑んで一時停止ボタンを押した。

それは屋根裏で古い宝の地図を見つけるシーンだった。1632年に海賊の隠した宝を探しに出掛けた冒険家が行方不明になったという新聞記事が大きく画面に映し出されていた。僕は画面の隅に小さく写った冒険家の名前をメモ用紙に書き取った。

Chester Copperpot

「チェスター・コパーポット！ ええ名前やん！」
その瞬間、僕の提案するバンド名が決定した。

翌日、スタジオ15畳にメンバー4人が集まった。平尾は随分前に来ていたようで、ベースをアンプにつないで遠慮気味に音を出していた。僕が部屋に入るとすぐに敬ちゃんがやってきて、それから10分遅れてヨシヒコが来た。

まず、ひとりひとりが考えた名前を紙に書いて並べてみよう、ということになった。僕はノートのページを半分に切ったものに、アルファベットとカタカナで「チェスター・コパーポット」と書いて出した。全員がほぼ同時に紙を出し、じつと他の3人が書いたバンド名を見る。

『エレファンツ』

『K A T Y』

『Chester Copperpot チェスター・コパーポット』

『ファルコンズ』

「ぶっ！」

読んだ瞬間、僕は思いっきり吹き出した。どれを誰が書いたのかが一瞬でわかったからだ。『エレファンツ』は平尾の足長象、『ファルコンズ』はヨシヒコの嫌がらせ、『K A T Y』は消去法で敬ちゃんだ。隣で平尾が青ざめた顔をしていた。僕は知らないふりをしてわざとらしくフオーロした。

『『ファルコンズ』ってなんや！』

するとヨシヒコは僕の意図がわかったのか、「空飛ぶ竜だぜ、かつこいいじゃん」とニヤニヤしながら言った。ヨシヒコが真面目に考える気がないことがその時点でわかった。

「敬ちゃんのはどういう意味？」と僕が聞くと、敬ちゃんは言った。

「みんなの頭文字がええかなと思たん。でも、宗山・城崎・平尾・滝元やと『M K H T』で子音ばっかりになってしても意味がわからんけん、ファーストネームにしたん。ケイコ・アツシ・タカユキ・ヨシヒコで『K A T Y』」

「なるほどなー」と僕は言った。「敬ちゃんやから『ケイティ』かと思った」

「あ、ほんまや。私の名前みたいやね、気づかんかった」

「まあええやん、とりあえず。ほんで？ 平尾のはあれやろ、ダリの象やろ？」

顔色の悪い平尾が力なく「うん」と頷いた。何だかわいそうになってきた。

「それで？ マイキーのはなんだ？ どっから出てきたんだ？」黙って話を聞いていたヨシヒ

コが僕に尋ねた。

「おう、これはな——」

僕はグーニーズからアイデアをもらおうとしたこと、フラテリーズやパイレーツを經由して、昨日ビデオを観たときによくこの名前にたどり着いた経緯を話した。すると神妙な顔つきで聞いていた3人が顔を上げて一斉にこう言った。

「それにしよ！」

あっさりと満場一致で可決。もっと修羅場を想像していたのに、ちよつと肩透かしをくらったみたいで居心地が悪かった。

どうやらバンド名を重要視していたのは僕だけだったみたいだ。平尾は最初からダリ関連にしようと思っていたらしく、同時に受け入れられるはずがないと思ってあきらめていた。敬ちやんのネーミングはいかにも女の子らしいし、ヨシヒコは本当にはじめから真剣に考えるつもりはなかったようだ。どうせ一回きりのバンドじゃねえか、なんて思っていたのかもしれない。

そのようにして、たいした揉め事もなく僕のアイデアが通り、晴れて我がバンドの名前が決まったのであった。

冒険家チェスター・コパーポット。

いい名前ではないか。

「一九五五・二十四(北)大分県大分市大分市

最後に残ったのが曲決めだ。バンドを組むときには「あの曲がやりたい」という具体的な目標があつて、それを一緒にやってくれるメンバーを探すのが普通だし、せめて「あのバンドがいい」とか「こんな曲が好きだ」とか、そういう意思表示があつて然るべきだ。でも僕たちにはそれがなかった。

僕に関して言えば、前からバンドをやりたいと思っていたところにタイミングよく誘われただけで、これといって演奏する曲の希望があつたわけではなかった。すでに説明したように、敬ちちゃんも僕と同じようにヨシヒコに声を掛けられて「別にええよ」的に参加を決め、平尾はただ脅されてやむなく「うん」と言っただけなのだ。一方、ヨシヒコは自分で言い出してバンドを組んだくせに、これまで僕たちに演奏曲について話をしたことは一度もなかった。それなのにバンド名は決まり、楽器が揃い、機材つきの自前のスタジオまで用意してしまった。要するに順番が逆だったのだ。

実を言うと、ヨシヒコにはある計画があつた。それはしばらく後になって僕だけが知るところとなるわけだが、とりあえず今はそれを置いておいて、ここでは我々がバンド、チェスター・コパーポットの演奏曲がどのようにして決まったかを書くことにする。

バンド名を決めたときのように、やりたい曲をみんなで持ち寄って多数決で決めればいい——バンドをやったことのない人はそう思うかもしれない。でも実際にはそうはいかない。曲決めには、色々な制限があるからだ。

まず大前提として、スコアが手に入るかどうか、というのがある。

【バンドスコア】

「スコア」は日本語でいえば「楽譜」だ。中でもバンド用に作られたものを「バンドスコア」といい、縮めて単に「スコア」と呼ぶこともある(「バンド用楽譜」ではあまりかっこよくない)。バンドスコアと普通の楽譜(例えばピアノ用の楽譜)とは何が違うかというと、複数の楽器の譜面が一緒になっていることだ。ピアノ譜は右手用と左手用の楽譜が2段セットになっているて、それが1ページの中に4、5列並んでいるのが普通だ。でもバンドスコアの場合は、ギター用、ベース用、キーボード用、ドラム用、そして歌のメロディ(強いて言えばヴォーカル用)など、複数のパートの楽譜が縦にずらっと並んでいる。その結果どうなるかというと、1曲あたりのページ数がめっちゃ多くなるのだ。曲によっては1ページで16小節しか進まないことあって、そうなるスコアを見ながら弾いていたのではページをめくるのが大変で演奏どころじゃなくなる。

楽器が混在しているという意味ではオーケストラ用の譜面もそうだが、あつちは逆に楽器の数が多すぎて1枚に収めるのが大変だから、ひとつひとつの楽器、あるいはパートごとに楽譜が分かれている。バイオリンはバイオリン用の楽譜、フルートはフルート用の楽譜、ピアノはピアノ用の楽譜、という具合に。

このようにバンドスコアは少し変わった楽譜なんだけど、今の僕たちにはこれがないと練習を始められない。もちろん世の中のすべての曲に対してスコアが作られているわけもなく、必然的に「スコアがあるかないか」は曲決めの際の最重要ポイントとなる。ではどういう曲のスコアがあり、どういう曲のスコアがないかというと、これはとても単純で、ズバリ「流行った曲かどうか」の1点だ。あまり売れなかった曲のスコアは存在しないし、売れた曲、もしくは売れたバンドのスコアはその辺の本屋で簡単に手に入る。アルバムCDが丸ごとスコアになっていることもある。演奏する側からしても「やりたい曲」ニアリーイコール「流行った曲」なわけだから、思惑は一致しているとも言えるだろう。

曲決めの第一関門がスコアの有無であるとすれば、その次は「演奏できるかどうか」だ。あたりまえだけど、これもまた重要なことだ。いくらやりたくても、できないものはできない。自分のバンド編成でできる曲だということはもちろん、技術的なことも考慮に入れなければならない。

チェスター・コパーポットの場合はどうだったかというと、まずギターはヨシヒコしかいな

いわけだから、ギタリストが2人いるバンドはダメで、弾きながら歌うのだからギターがあまり難しいのはダメ。僕がいるのだからキーボードがないバンドもダメ。かと言って、シンセは1台しかないからたくさんキーボードの音が入っている曲はダメ、ということになる。さらに、敬ちゃんのリクエストで16ビートの速い曲はダメ、ヨシヒコのリクエストでバラードはダメ（これは好みの問題だ）、そして平尾からのリクエストで難しいのはダメ、という条件が加わる。これらすべてを満たす曲となると、選択肢はそう多くないことは想像できるだろう。バンド名みたいに「これがいい!」といった簡単に決められるわけではないのだ。

僕たちが手始めにやったのは、本屋に行くことだ。バンドスコアはどんな本屋にも意外と数が置いてある。音楽コーナーの棚の3分の1くらいはバンドスコアが占めている。残りはピアノ譜と楽器の入門書だ。

日曜日の午後、僕たちは琴平町の本屋に集合した。楽譜の置いてある場所はだいたい店の奥の方だ。もっと具体的にいうと、ペットの飼い方や植物の育て方の本がある棚の隣にあることが多い。あまり買う人がいないということだと思うが、その割には種類がたくさんある。その本屋にも、最近のヒット曲をはじめ、さだまさしや井上陽水などの古い歌手のギター譜、ビートルズやローリングストーンズなどの洋楽バンドスコアなんかも置いてあった。

僕たち4人はその棚の前を占拠して、思い思いにスコアを手にとってみた。サザンオールスターズ、ミスチル、スピッツ、X、ジュディマリ、チャゲ&飛鳥^{チャゲアス}、チェッカーズ、ブルーハーツ、オフコース、ユニコーン。新しいバンドから懐かしいバンドまで、その棚には僕たちが聴いてきた音楽がある。いつもの僕はそのバンドスコアを素通りしてピアノ譜へ手を伸ばすわけだが、今日は違う。「これは演奏できんなー、難しいなー」なんて思いながらバンドスコアを見るのはとても楽しい。この中の2曲をステージで演奏できるなんて、考えただけでも心が弾む。

隣で珍しそうにスコアに見入っていた平尾が言った。

「なあなあマイキー、ユニコーンてなに?」

「え、知らんのか?」

「知らん」

「奥田民夫のバンドやん。もう解散しとるけど」

「へー、知らなんだ。あの人バンドやっとなん」

「そやで」

「そんな風に見えんけどなー」

「そうか?」

その向こうでヨシヒコが敬ちゃんと話している。

「チェッカーズとか、ちよつと古いやつも受けるかもしれねえなあ」

「私チェッカーズあんまり知らんよ」

「マジで? あ、でもサックスがいねえからダメだ」

「ほんまやね。でもシンセがあるけん何とかなるんちゃうん？」

「ん——でもなあ」

30分くらいそうやってああだこうだ言い合ったあと、ここでは埒があかないということになって、僕たちは昼ごはんを食べに本屋の向かいのうどん屋に行くことにした。

少し遅い時間だったこともあって随分すいていたので座敷に座った。敬ちゃんは昼ごはんを食べてきたと言っていたが、みんなが注文するのにつられて「かけうどん小」を頼んだ。「うどんは別腹」というのは讃岐では有名な格言だ。

うどんをさつさと食べてしまうと、僕たちはぬるいお茶を飲みながら選曲会議を始めた。

「やっぱミスチルじゃねえか？」最初に発言したのはヨシヒコだった。

「私もミスチルがええと思った」と敬ちゃんが続く。

【ミスターチルドレン】

いま一番人気のあるロック・バンドと言って間違いない。その名前を知らない中学生は日本中どこを探してもいないだろう。去年リリースされたアルバム『アトミックハート』は邦楽アルバムの歴代最高売上を記録し、ミスチルの名を日本全国に轟かせた。2年のときの僕のクラスでも40人中15人が『アトミックハート』を持っていたというのだからすごい。ついでに言う、僕たちは4人ともそのCDを持っていた。まさに驚異的な普及率だ。

そういう意味で、いまバンドでミスチルをやるのはとても理にかなっている。誰もが知っているし、誰もが好きなバンドで、しかもスコアがちゃんとある。さっき本屋で見たとこ、曲によってはチェスター・コパーポットにも十分演奏ができるくらいの難易度のものもある。少しヴォーカルが高いので歌にくいかもしれないが、条件はほとんど満たしていると言えるだろう。

「他には？」と僕が聞くと、「スピッツは無理？」と敬ちゃんが言った。

ヨシヒコによると、スピッツは「声が高すぎるのと、演奏が地味だ」ということでめらしい。僕はどちらかというとミスチルよりはスピッツのほうをよく聴いていたから少し残念だった。

「サザンは？」と聞いた平尾に対しては「楽器が多すぎる」という理由でヨシヒコのダメが出た。

同じように、ユニコーンは知名度が低い、Xは難しい、オフコースは暗い、ブルーハーツは騒がしい、チャゲ&飛鳥はバンドじゃない、という風にヨシヒコがほとんどのアイデアに反対した。しばらくそんな話をした末、「やっぱミスチルかなあ」という雰囲気になってしまった。

僕ははじめからちゃんと演奏ができれば何でもいいと思っていたから、別に反対する理由はなかった。平尾も敬ちゃんも同じような感じだった。

それから僕たちはもう一度本屋に戻り、今度はミスチルに絞って曲を決めることにした。店にあったのは、『アトミックハート』と『ヴァーサス』のバンドスコアと、有名な曲だけを集めた『ミスターチルドレン・ギター弾き語り全集』の3冊だった。『ヴァーサス』は『アトミックハート』のひとつ前に発売されたアルバムだが、知名度でいうと断然『アトミックハート』のほうが上だった。もう1冊はギター専用のスコアだから全然話にならない。ということで、話し合うまでもなく『アトミックハート』から2曲選ぼう、ということになり、みんなで500円ずつ出し合ってバンドスコアを買った。

その中から曲を選ぶのはそんなに難しくなかった。バラードでなくて有名な曲ということになれば、候補は『ダンス・ダンス・ダンス』『イノセントワールド』『クロスロード』の3つしかなかった。僕たちはその足でコンビニに寄って、その3曲を4部ずつコピーした。各自がその3曲を聴きこみ、次の日曜日にスタジオで話し合って2曲選ぼうということになり、その日は解散した。

【サウন্ズ】

火曜日になって、日曜日の選曲会議で話し合ったことがすべてパーになるような出来事が起こった。

「ち、ちよつとマイキー、ちよつとこつち」

大慌てで教室に駆け込んできたヨシヒコが手招きをしている。いつも大げさなことばかり言うから、僕はそういうヨシヒコの態度には慣れていた。今度は何を言い出すのだろうと思ったら、連れて行かれた裏庭の隅で敬ちゃんと平尾が待っていた。

「どしたん？」と僕が聞くと、敬ちゃんが言った。

「城崎君、2年の子たちがバンドやるって知ってた？」

「うん、何となく」

「今日ね、ちらつと聞いたんやけど、あの子らもミスチルやるらしいんよ」

「ええー！」

「しかも『イノセントワールド』と『クロスロード』」

「うそやー、完全にかぶつとるやん」

信じられなかった。しかも敬ちゃんはその証拠を握っていた。

「うちの部の後輩にその子らと同じクラスの子がおるんやけどね、クラス中に言いふらっしよるらしいよ、ミスチルやるんやでーって。スコアのコピーも持ち歩いとるらしいけん、ほんまやと思う」

「まじで？ きついなあ。かぶつたらいかんよなあ」と僕は言った。「他の曲でもええけど、ミスチルバンドが2つあってもおもしろくないよなあ」

「そうやんねえ」と敬ちゃん。

「ほんなら選曲会議、やり直しやね」と平尾。
みんなが黙って頷く。

演奏曲は本番まで秘密にしておくのが暗黙の了解だった。代々受けついだ伝統だと言ってもいいだろう。文化祭当日に配られるパンフレットにも、バンド名は出るが曲名は出ない。演奏する側も秘密にしておく楽しみがあるし、聴く側も「なんやるんやろう」と楽しみにして演奏が始まるのを待つ。何と言ってもその方が場が盛り上がるのだ。イントロを聴いた瞬間に「おーっ！」とどよめきが起きるあのムードは、何ものにも代えがたいものがある。しかしその2年生バンドは、早々と手の内を明かしてしまったのだ。

「バンド名も決まっとるらしいよ」

「なに？」

「サウন্ズ」

「は？」

「サウンドの複数形」

「そらわかるけど――安直やな」

「うん、私もそう思う」

「だせえ」とヨシヒコ。

僕もそう思う。平尾もこっそり頷いていた。

「こうなったらますますミスチルはできんなあ」

「おうよ。2年のペーパーに負けるわけにはいかねえぞ」

こうして、敬ちゃんの白昼の報告により、ミスチルがあつという間にライバルに回ってしまったのである。

「スコア買_いうてしもたのにね。コピーもしたし。もったいないなあ」と真っ先にお金の心配をしたのは意外にも平尾だった。

日曜日の予定だった会議を土曜日に変更し、僕たちは午前中からスタジオ15畳に集まった。最初に平尾が「蒸し返すみたいであれやけど」と断ってから言った。

「ヨシヒコ君さ、あのミスチルの曲、全部弾きながら歌えるん？」

するとヨシヒコは「まあ何とかな。『ダンス・ダンス・ダンス』がちよっと面倒だけだよ」と、控え目なことを偉そうな口調で言った。平尾が「ふーん、すごいなあ」と感心していた。

逆に僕が「平尾はどうやったん？」と尋ねると平尾はこう言った。

「そら全部難しかったで。最初のとこだけちよっとずつやってみたけど、あんなに速_{はよ}う指動かんわ」

無理もない話だった。

「そーいや平尾、どんなして練習しよん？ 本買_いうたん？」と僕。

「うん。本も買うんだけど、ビデオも買った。毎日ビデオ見ながら練習しよる」

「ほんまに？ 役に立つん？」

「さあ、わからん。やけど音がないとどういう感じかわからんけん、本よりはええと思うで」
平尾が買ったのはいわゆる教則ビデオというやつだ。確かに本だけしか読まないよりはましだと思う。

「なあ平尾」とヨシヒコが言った。「その練習したやつ、ちょっと弾いてみてくれ」

「ええっ——」

平尾は嫌そうだった。でも僕も聴いてみたかった。3人で責め立てた結果、平尾は渋々ベースをソフトケースから出して、アンプにつないだ。

アンプのノイズと一緒に、弦に指がほんの少し触れただけでもそれがちゃんと音になって聞こえてくる。平尾は腰を下ろし、畳の上にスコアを広げてベースを太腿に乗せた。

「ほんなら『ダンス・ダンス・ダンス』のイントロいくで」

右手に持ったピックが弦の手前でぴたっと静止する。

ボンボン、ツツボンボン、ツツボンボン、ツツバーンベンボンボツ

「すげー！」

僕は思わず声を上げた。ベースアンプから流れるそのイントロのベースラインはすごく格好よかった。弾いている平尾の指の動きも、とても様になっていた。きれいな逆くの字に曲がつた左手の指が、ネックの上の辺りを滑るように動いていた。

「おお、やるじゃん平尾！」とヨシヒコも驚いていた。敬ちゃんもパチパチと拍手をしている。

「ほんまに？ でも弾けるんこだけやで」

平尾は謙遜していたけど、そこが弾ければあとは練習すれば何とかなるという雰囲気をもっている。に感じる。

「他の曲もやってや」と僕がリクエストすると、平尾は「他のは聴いてもようわからんで」と言いながらスコアを広げて弾き始めた。

デンデンデンデンデンデンデンデンデンデンデンデンデンデンデン

「なんそれ」

「な？ やけん言うたやん、なんかわからんって。今の『イノセントワールド』のイントロやで」

「ほんまに？」

そんなことは聞くまでもなく本当だった。嘘なんか言うわけがない。続いて『クロスロード』も弾いてもらったけど、そっちも同じように何が何だかわからなかった。

ボーボーボー、ボボーボーデンデンデン、ボーボー

「は？」

つまり、だ。ベースとはそういう楽器なのだ。ぱつと聴いても何だかわからないようなフレーズを奏でる縁の下の力持ち。それがベースの仕事なのだ。同じ音が8回続いたり、1小節ずつとひとつの音を伸ばしたり、それがベースなのだ。

「もしやるんなら『ダンス・ダンス・ダンス』がええなあ。かつこええけん」

僕の反応を見たからか平尾がそう呟いたが、気持ちにはよくわかる。

【ゴダイゴ】

さて、もうそんな話をしてもしようがない。ミスチルは今やライブなのだ。ミスチルに負けない選曲をしなければならない。

この前の日曜日のような話がしばらく続き、ヨシヒコがことごとくダメ出しをした後、平尾が「ちよつと古いんやけどええかなあ」と前置きをしてから言った。

「俺な、ゴダイゴ好きなんやけど、無理かな」

「おお、ゴダイゴか」とヨシヒコが言う。

僕はゴダイゴのことはよく知っている。キーボーディストのミッキー吉野はその筋では有名な人だからサンレコに何度か登場していたし、何と言っても有名な曲が何曲かある。

「ゴダイゴってなに？」

ゴダイゴを知らなかったのは敬ちゃんだけだった。僕が『ガンダーラ』のサビの部分を取ってあげると、敬ちゃん「ああ、知つとるわ、その曲」と言った。僕はさらにこう続けた。

『『西遊記』見てなかった？』

「孫悟空の？」

「そーそー。『西遊記』をテレビでやつとつたん知らん？」

「テレビ？ 知らんなあ」

「堺正章が孫悟空やつとつたやつ。むっちゃや有名やで、なあ？」

僕が同意を求めると、ヨシヒコと平尾が大きく頷いた。

「オープニングとエンディングの歌がゴダイゴやったけんそれでみんな知つとんや」

すると平尾が「俺、CD持ってきたで」と嬉しそうに言って、カバンから1枚のCDを取り出した。ゴダイゴのベストアルバムだった。

「聴きたい！」と僕とヨシヒコは口を揃えて言った。

僕は平尾の持っていたポータブルプレイヤーをミキサーにつなぎ、スピーカーの電源を入れた。

「3曲目が『ガンダーラ』で、5曲目が『ホーリー・アンド・ブライト』」

僕は3曲目を再生した。懐かしいギターのイントロが始まった瞬間、堺正章と夏目雅子の顔が頭の中に甦る。僕が飛び上がって喜んでいると、ヨシヒコがミキサーのところに走って行ってマイクのボリュームを上げ、マイクスタンドの前に立って歌い出した。

そこに行けば どんな夢も 叶うというよ

誰も皆 行きたがるが 遥かな世界

その国の名はガンダーラ どこかにあるユートピア

どうしたら行けるのだろう 教えて欲しい

イン ガンダーラ ガンダーラ ゼイセイ イトウワズイン インディア

ガンダーラ ガンダーラ 愛の国 ガンダーラ

歌の途中で僕はCDとマイクのボリュームを上げた。スタジオがものすごい大音量に包まれる。

間奏が終わって2番コーラスに入ったところで、僕はヨシヒコからマイクを奪って歌い始めた。歌詞をほとんど覚えていたのが不思議だった。最後のサビの部分はヨシヒコとのデュエットだ。互いに負けじと声を張り上げた。

曲が終わると、僕は続けて5曲目を再生した。

5曲目も大変なことになる。僕はつい今の今まで忘れていたのだが『ホーリー・アンド・ブライト』は『西遊記』の続編である『西遊記2』のエンディングテーマで、これもまた名曲だった。イントロが始まった瞬間、ドラマのエンディングの映像をはっきりと思い出した。

遠い昔の話で 新しいこの星が

いま生まれて僕らの胸 清く照らしているよ――

テンポが速くてノリがいいこともあって、はしやぎ方は『ガンダーラ』どころではなかった。僕とヨシヒコはマイクを奪い合うようにして歌い、平尾も歌いながらあちこち跳びまわってはしゃいでいた。敬ちゃんも「ようわからんけど楽しいなあ」という顔をしてニコニコしていた。

ホーリー ホーリエンブライ

アスターイズシャーニエン ホーリエンブライ

ホーリー ホーリエンブライ

曲が終わってから、僕たちはずっとそのサビの部分を使い続けた。

「ホーリー ホーリエンブライ！」

こうしてチェスター・コパーポットの記念すべき第1回ライブの演奏曲が決まったのであった。

【耳コピ】

電光石火のごとく曲がゴダイゴに決まったのはいいが、僕たちはあることにすぐ気がついた。それはスコアがないことだった。あれほどスコアがないとダメだと言っていたのに、やっぱりこれがやりたいという気持ちにはかなわなかった。

そして僕らが挑戦することになったのが、曲を聴いて楽譜を作る作業、すなわち「耳コピ」だった。

耳コピは「耳コピー」の略だ（あんまり短くなってないけど）。いきなり耳コピをやるなんて、バンド未経験者が挑戦するにはちよつとハードルが高いように思えるが、何といっても僕はピアノを長い間習ってきたわけだし、ヨシヒコもギター歴が2年ある。敬ちゃんだってドラムのパートだけなら聴き取れるだろう。だから大丈夫だ。そのときの僕にはそういう妙な自信があった。

ひとつ救いがあったのは、例の本屋に『ゴダイゴ・不滅の名曲』というピアノ用の楽譜があったことだ。それがあると何が助かるかというと、曲のコード進行がわかるのだ。

【コード】

音階は有限だ。ピアノの鍵盤を引き合いに出せば、ドからシまでの白鍵が7つと、その間に飛び飛びに並んだ黒鍵が5つの合わせて12音。理論的には音階は無限だが、ある「ド」を基準にして1オクターブ上がると（あるいは下がると）また「ド」が現れるわけだから、実際のところ僕たちはたった12音の中に生きていると言うことができる。

コードとはその12音の中からいくつかの音を抜き出したもの、つまり「ドミソ」とか「レファラド」といった音の組み合わせ（日本語で言えば和音）のことだ。世の中のほとんどすべての曲は複数のコードがつながることになり立っていて、そのつながりのことをコード進行という。「どうさん」も「別れの曲」も「ケニアの国歌」も、使うコードの数や種類は違うけど、みんなそれぞれのコード進行を持っている。ただし、「ほとんどすべての曲」と断ったとおり、た

たとえばタンバリンを叩くだけの音楽を曲だと認めた場合、タンバリンの演奏には「リズム」と「強弱」はあっても「ドレミファ」はないから、コードが存在しないことになる。そういう一部の例外を除けば、「コード進行Ⅱ曲そのもの」という大雑把な言い方もできるかもしれない。

コードにはひとつひとつ名前がつけられていて、コードネームと呼ばれている。「ドミソ」は「C」で、「レファラド」は「Dマイナー・セブンス」という具合だ。曲の中に「この小節はCですよ」という表記があった場合、ドとミとソは無条件に弾いて構わない。その3つの音は、コードCの構成音だからだ。これだけなら話はとても単純だけど、やっぱり例外はある。コードがCであっても、構成音以外の音（例えば「レ」や「シ・フラット」）を弾いていい場合というのがあり、また逆に弾いてはいけない場合もある。これは書き出すとても長くなるし、正直言って僕には完璧に説明することができないからやめるけど、ここで僕が言いたいのは「コード進行がわかれば耳コピが楽になる」ということだ。つまり、ピアノ用に作られた楽譜であっても、コードさえわかれば、ベースがそこで何を弾けばいいかがある程度絞れるということだ。コードがまったくわからなければ当たる確率は12分の1で、コードがCなら確率は3分の1（ドミソのどれか）。簡単に言えばそういうことになる。

『ゴダイゴ・不滅の名曲』というピアノ譜のおかげで、僕は『ガンダーラ』と『ホーリー・アンド・ブライト』のコード進行を難なく知ることができた。平尾にダビングしてもらったカセットを聴きながら試しにシンセを弾いてみたけど、ちゃんと音は合っていた（楽譜によっては勝手に転調して作ったせいで原曲と音が合わないことがあるのだ）。僕はそのコード進行をもとに、平尾のためのスコアを作る作業に取りかかった。

ゴダイゴの2曲は、その前に選んだミスチルの3曲に比べて登場するコードの種類が圧倒的に少なかった。ちゃんと数えたわけではないけど、だいたい半分くらいだった。ミスチルは曲がややこしくて、ゴダイゴは単純、そう言ってしまうって構わないだろう。もちろん「ややこしいのいい曲」というわけでもないし、かといって「シンプルなのが売れる曲」というわけでもない。でもひとつ間違いなく言えるのは、ややこしい方が練習が面倒だということだ。だから、シンプルなゴダイゴになってよかった、と僕は密かに思っていた。

ベース用のスコアを作る作業は2、3日で終わった。もしこれがミスチルだったら倍はかかっていたと思うし、ゴダイゴほど正確に作れた自信はない。僕はルーブリーフに書き取ったものをちゃんとした五線譜に清書して、それをヨシヒコに渡した。

次はヨシヒコが平尾のために「タブ譜」を作る番だった。

【タブ譜】

バンドスコアについて書いたときに少し説明を省略した。それはギターとベースのための特

殊なスコア「タブ譜」のことだ。タブ譜には「ドレミファ」ではなく「どういう風に弦を押さえるか」ということが書かれていて、ちよつと変わった記号を使う。登場するのは「おたまじやくし」ではなく、「おたまじやくしの頭が数字に変わったもの」だ。それからタブ譜ではおたまじやくしが乗っている5本の線の代わりに、ギターの弦に見立てた6本の線（ベースなら4本）を使う。その6本の線の上に「数字付きおたまじやくし」が乗っているわけだ。例えば、3弦（細い方から3番目の弦）に「4」の数字が乗っていれば、それは3弦の4フレットを押さえなさい、という意味になる（フレットはネックの長辺に対して直角に打ちつけてある棒状の金属で、指で弦を押さえたときに弦の振動の根っこになる部分だ）。

その変なおたまじやくしにはちゃんと「ひれ」がついていて、それが普通の音符と同じように音の長さを表す。だから普通の楽譜が読めれば、タブ譜を見ればどういう演奏なのか（長く伸ばすのか、短く切つてたくさん弾くのか）ということは大体検討がつくんだけど、音が「ド」なのか「ミ」なのかということとはまったくわからない。

そういった理由で、僕にはおたまじやくしの方の楽譜は書いても、タブ譜を書くのは不可能だ。だからその仕事はヨシヒコに回ることになったわけだ。

ヨシヒコは嫌がっていたけど、こればかりは他の誰にもできないわけだからやるしかない。平尾もよせばいいのに「助けてヨシヒコくん」なんて言つてヨシヒコに媚を売るから、しまいに「甘えんじやねえ、のび太！」とヨシヒコが調子に乗つてしまつて収集がつかなくなつた。それ以来「ベースはギターのしもべだ」というのがヨシヒコの口癖になつてしまつた。ひどい言葉だけど、確かにヨシヒコと平尾だけを見ているとそんな気もしなくはない。

ところで、ギターとベースにタブ譜という特殊なスコアがあるように、実はドラムにもこれまた変わったスコアがある。

それが何という名前なのか僕は知らなかったし、敬ちゃんも知らなかった。「ドラム譜とちゃう？」と敬ちゃんはいいい加減なことを言っていたが、とりあえずここではそう呼ぶことにしておこう。

ドラム譜はタブ譜ほど見た目が普通の楽譜とかけ離れていない。線は5本だし、おたまじやくしもいる。一番左にはちゃんとへ、音記号もあるから、ぱつと見ただけでは本当にただの楽譜に見える。でもカラクリはこうだ。

「下のラがバスドラ。ミがスネア。上のシがハイハット」

「^{本気で言ってるのか}ほんまによん？」はじめてドラム譜の存在を知ったとき、僕はそう思った。この方法でいくと、例の「ズン、チャ、ズン、チャ」の4ビートは「ラ、ミ、ラ、ミ」となり、その4つの音の上のほうでハイハットが「シ、シ、シ、シ」が鳴っているという、一見するとバイエルの2和音の練習曲みたいな楽譜ができるのだ。嘘みたいだけど嘘じゃない。

ただひとつ共感できるのは、3つの音の高低が楽器の出す音の高低（バスドラが低くてハイハットが高い）に対応しているということだ。でもそれだけではわざわざおたまじゃくしと五線譜を使う理由までは納得できない。いったい誰がこんな適当なルールを作ったのだろうか。僕にはそれが不思議でなかった。

さて、そんなわけで耳コピとは言っても結局のところ、平尾のためのタブ譜を用意することに僕たちはちよつとした時間を使ったのだった。

ヨシヒコにベース用の楽譜を渡した次の日から、僕は自分の練習を始めた。演奏自体はそれほど難しくはなかったから、練習はそんなに大変ではなかった。何と言っても僕はゴダイゴのその2曲をよく知っていたし、コードさえわかっていたらあとはパズルを組み立てるようなものだった。カセットを何度も聴いて、ミッキー吉野が弾いているであろう音を探し出し、実際にシンセを弾きながらカセットの音と比べてみて、確信が持てるとそれを譜面に書き取った。聴けば聴くほど、そして弾けば弾くほど、僕の弾いている音がミッキー吉野の音に着実に近づいていった。

僕はある程度納得できるところまでコピーし終えたと、シンセの音作りに取りかかった。

【音色】おんしよく

シンセの音のことを特別に「音色」と表現する場合がある。これは「ねいろ」ではなく「おんしよく」と読み、「音色を選ぶ」とか「音色を決める」とか「いい音色」という風に使う。

シンセの説明のところに書いたように、シンセの真髄は音を作り出すところにある。最初からシンセに入っている音色（プリセット音）の中から、作りたい音に近いものを選び出し、それに手を加えていくというのが一番簡単な方法だ。ピアノの音と一口に言ってもプリセットだけで10種類以上あり、それぞれにちゃんと特徴がある。コンサートホールで弾くグラランドピアノの豪華な音、鍵盤が飛び出てきそうなくらいボロボロのアップライトピアノの音、カツンカツンと硬い感触のピアノの音、どんなに強く弾いても弱く弾いても同じ音が出るおもちゃのピアノの音。それがボタンひとつで次々に切り替わるのだ。

音色を選びながらシンセを弾いていると、僕の意識は色んな場所の色んなピアノのところへと飛んで行く――シンセサイザーにはそういう力があるのだ。

耳コピが終わり、シンセの音作りも終わってしまうと、あとはみんなの個人練習の仕上がり待っただけだった。

そして「さあスタジオで合わせてみよう」というところまでこぎつけたときには、文化祭まであと3ヶ月という日が目前に迫ってきていた。

香川県のニュースが全国ネットで流れることはめずらしい。面積は日本一狭く、県庁所在地の名前も松江市と大津市の次にマイナーだと言われている。そんな香川県の名前が去年は日本中を駆け巡った。

【1994年の大渇水】

水不足。その深刻さは、ここに住んでみないと絶対にわからない。去年の夏、県内でもっとも人口の多い高松市では、1日5時間給水という前代未聞の政策が打ち出された。その過酷さは想像するに余りある。夕方4時から夜9時までのたった5時間しか水が出ないのだ。断っておくけど、これは断水ではない。給水なのだ。「欲しがりません、勝つまでは」どころの騒ぎではない。欲しがっても出ませんのだ。

原因が降水量の少なさであるのは言うまでもなく、昔から水不足は香川県の枕詞だった。県内に1万6千あると言われるため池は他でもない水不足対策だが、結局雨が降らないといくらため池があってもダメなのだ。梅雨に雨が降らないとその年の夏は必ず水不足に見舞われ、米をはじめとする農作物に被害が出る。これは讃岐に生まれ育った人間なら誰もが経験として知っている。

とにかく去年の夏はひどかった。香川県と徳島県に水を供給している高知県の早明浦さめうらダムの貯水率がはじめてゼロになり、そのニュースはテレビや新聞で毎日のように取り上げられた。しかし悲惨な給水制限を伝えるトップニュースの裏で、水を大量に消費するうどん屋が軒並み閉店を強いられ、水を貸してくれなかったという理由で殺人事件まで起きたことはあまり知られていない。また、20年前の渇水には人工雪ならぬ人工雨を降らすべく、県が飛行機を飛ばして散水して雨雲を作ろうとしたという逸話まである。まるで三国志か卑弥呼の世界だと思っただろうけど、それほど事態は深刻なのだ。

でもそんな渇水の心配も、どうやら今年はなさそうだ。6月に入ってから順調に雨が降っている。梅雨をこれほどありがたがるのは香川県民だけだろうなと思う。

しとしとと降り続く雨の中、僕は傘を差しながら自転車をこいでスタジオに向かっていた。首から提げたカバンの中にはスコアが入っている。

スタジオの前には他の3人の自転車がとめてあった。入り口の扉をガラガラと開けると、中から「マイキー遅いぜ!」とヨシヒコの声が聞こえてきた。「わりい」と僕が返事を返して靴を脱いでいると、平尾がタオルを持ってきてくれた。ジーンズの膝から下がびしょびしょに濡れ

て色が変わってしまっている。

「よう降るねえ」と平尾。

「ほんまなあ。ほんでも今年は水に困らんで」

「そーやそーや」

まるで年寄りの会話だ。平尾と話しているとなぜかこうなる。

スタジオでは「さーて、いっちよ合わせてみるかあ！」とヨシヒコがひとりで気合を入れていた。敬ちゃんはドラムのセッティングが終わったらしく、スコアらしき紙きれをシンバルのスタンドにセロテープで貼りつけていた。

「敬ちゃん、2曲とも聴き取れたん？」と僕は尋ねた。

「うん、そなん大変ちゃうかったよ。リズムは簡単やしテンポも遅いしなあ。ミスチルのほうがよっぽどえらいと思う」

「やっぱそうなんや。よかつたんとちやうかなあ、ゴダイゴで」

「私もそう思う」

ヨシヒコはすでに自分の立ち位置を決め、マイクスタンドの高さも調節してあった。昨日の夜から親に頼んで運びこんでいたシンセの前にはもうひとつのマイクスタンドが置かれていて、マイクまでセッティングされていた。

「なあヨシヒコ、最初はコーラスなしでも構わん？ そのうち余裕ができたらやれると思うけん」と僕は言った。コーラスは僕の仕事だ。

「イエス、頼むぜマイキー」マイク越しに喋ったヨシヒコの言葉がスタジオの中に大きく響く。

「ヨシヒコ、ギターはエレキ？」

「おう、アコギも試してみようとは思ってるけどよ」

「2曲ともアコギの音だけやろ？」

「まあな。でもエレキのほうが弾き慣れてんだ」

【アコギ】

アコギは「アコースティック・ギター」のことだ。一般的に、アンプを通さずに音が出る楽器の名前の頭には「アコースティック」がつく。いわゆる「ピアノ」も正しくは「アコースティック・ピアノ」であり、「電子ピアノ（Ⅱエレクトリック・ピアノ）」と区別される。ギターの場合は、フォーク・ギターやクラシック・ギターなどがまとめてアコギと呼ばれ、「エレキ（Ⅱエレクトリック・ギター）」とは別物として扱われる。念のために、「アコギな商売のアコギかと思った」は親父ギャグに認定されているので要注意だ。

さて、ヨシヒコが持っているのはアンプで音を出すのだから当然エレキだ。でもエレキだからといって、すぐにあの「キューーン」「ギューンギューン」「テケテケ」の音だけを思い浮かべて

はいけない。そういう音を好んで出すギタリストが多いというだけで、みんながみんなそうではないのだ。最近知ったのだが、ヨシヒコはあまりそういうロックな音が好きではないらしい。

ヨシヒコが崇拜しているのがギターの神ことエリック・クラプトンだ。「黒人の音楽・ブルースを白人の手で解釈し直した」というのが、彼について語る際の常套句だ。その名前は超がつくほど有名だけど、実はヨシヒコに『アンプラグド』というアルバムを借りるまで、僕はエリック・クラプトンの音楽をちゃんと聴いたことがなかった。

自分の聴く音楽というのは、どうしても自分が演奏できる楽器の影響を受ける。僕はもっぱら鍵盤楽器だから、どうしてもピアノやシンセのたくさん入っている音楽を聴いてしまう。もちろんギターのことも多少は知っているけど、ギターの音質やギタリストのテクニクについて僕が本当に理解できる部分は少ない。だからCDを借りた翌日、ヨシヒコに「どうだった？」と聞かれたときも、僕はただ「ええなあ」としか感想を言うことができなかった。ヨシヒコが相手だと、知ったかぶりをしても「それは違うぜ」と言い返されるのがオチだから、余計なこととは言わないようにしている。

ギターアンプからは「アコギっぽい音」が出ていた。足元に置いたエフェクター（音を変え
る機械）が、エレキ特有の尖った音を丸く柔らかくしているのだ。ギターから伸びたシールドがエフェクターにつながり、エフェクターから出たもう1本のシールドがギターアンプにつながっている。電池でいうところの直列つなぎだ。

僕はミキサーのところに行ってシンセのチャンネルのボリュームがゼロになっているのを確認してから、シンセのところに戻って電源を入れた。そしてまたミキサーのところに行って今度はボリュームを8分目あたりまで上げ、最後にシンセのボリュームを上げる。鍵盤を押すとオルガンの音がスピーカーから出て、短い残響を残して消える。はじめは抑え目にしていた敬ちゃんのドラムの音が段々と大きくなっていった、スタジオの中がざわざわと騒がしくなる。平尾はこちらに背を向けて立って、アンプの上に置いてあるスコアをじっと見ている。僕が聴き取って、ヨシヒコがタブ譜に書き換えたスコアだ。スコアはA4の紙で3枚あるようだった。平尾はそれを何かの台紙に貼りつけ、どこにでも立てかけられるように細工をしていた。マメなやつだ。

「さーて、どっちからいくか？」ヨシヒコがマイクを使って喋ると、スタジオの中が突然しんと静かになる。

「CDの曲順通りでえんとちゃう？」と僕。

「じゃあ『ガンダーラ』からな」とヨシヒコが言ったところで、平尾が「ちよつとちよつとさあー」と遮った。

「あんなー、いきなり全部やるのもあれやし、最初は1回目のサビまでにせん？」

「サビの終わりまでか？」

「うん」

「よっし、じゃあまずはワンコーラスだけいこう。敬ちゃんのカウントでいいか？」
敬ちゃんが黙って頷く。

ひと呼吸。

カッ、カッ、カッ、カッ

前奏。4つの楽器が同時に鳴り出す。それぞれの音が独立して聞こえてくる。ドラムの音は僕の右から、ギターとベースの音は左の方からやってきて、自分が弾いているシンセの音は真正面のスピーカーから聞こえてくる。僕はほんの少しだけシンセのボリュームを下げる。4つの音が僕の耳の中で混ざり合う。

「スタツ」とスネアが一発鳴ったあと、歌が入る。

そこに行けば どんな夢も 叶うというよ――

ヨシヒコの声。心臓がばくばくと鳴る。ヨシヒコの声はシンセの音の前に出てくるように聞こえる。どの楽器よりもボリュームが大きく目立つ。僕は目の前に置いた手書きのスコアを見ながら指を動かす。緊張で少し指が震えているけど、何とか練習どおりだ。

サビの手前。ドラム以外の楽器が全部止まり、敬ちゃんの叩くシンバルだけが残る。少し間を置いてスネアの音が響き、歌が入る。

イン ガンダールア――

また音が動き出す。サビに入った瞬間、ガクンと音の数が増え、全体のボリュームが上がる。4つのコードを2回繰り返す。メロディを聴いているうちに、短いサビがあつという間に終わる。音がおもむろに止む。

「いいじゃねえか！」ヨシヒコがマイクに向かって叫ぶ。

楽しい楽しい楽しい！ めっちゃ楽しい！

生まれてはじめてのバンド練習。家で一人で練習しているのとはわけが違う。みんなでやっているという連帯感。そして体がぞくぞくと震えるような高揚感。

「平尾もいいぜえ！」またヨシヒコが叫ぶ。

「ええーそうかなあ」控えめなことを言いながら、平尾はものすごい笑顔をこっちに向けている。平尾は僕が聴き取った通りの音を弾いていた。ベースの音だけを何度も追いかけたからよ

くわかる。

「サビがちょっと速かったかなー」とひとり冷静だったのは敬ちゃんだ。

「なあなあ！ もう1回やろーで。今度は最後までいけるやろ、なあ平尾」

僕が興奮しながら言うと、平尾は小さくうんうんと頷いた。

「よっしゃ、敬ちゃんカウント頼む」

「はい」

カツ、カツ、カツ、カツ――

前奏、Aメロ、Bメロ、サビ、間奏、Aメロ、Bメロ、サビ。これが『ガンダーラ』の曲構成だ。「メロ」は「メロディー」の略で、Aメロは曲の歌い出しの部分、Bメロはその後の展開部で、サビへ向けて盛り上がる場所だ。

2回目もだいたいうまくいった。間奏の部分でシンセの簡単なソロがあって、そこで音を切り替えるときにちよつとだけ操作が遅れてしまったけど、誰かが気づくようなミスではない。

【フェードアウト】

問題は終わり方だった。『ガンダーラ』は曲の最後でボリュームが少しずつ落ちていく「フェードアウト」で終わる曲だ。CDの場合はいいけど、ライブでは困る。何か終わり方を考えなければいけない。

「こういう場合はどうするん？」何か知っていそうなヨシヒコに向かって僕は尋ねた。

「強引にスローダウンして終わるか、最初に戻るのがいいんじゃないかねえか？ 前奏ってどんな感じだったか？ えっと――」

僕もそのつながりを思い浮かべてみた。曲の最後はサビのメロディーの繰り返しでヴォーカルもずっと歌っているから、それをどこかで前奏につなげるのだ。

「いけるよな、それで」とヨシヒコ。

「おう、いけると思うで。1番のサビの終わりってそれと同じ状態やん。な？」

「ん？ ――おおお、そうだそうだ」

「待って待って、どういうこと？」と平尾が口を挟む。

「やけん、最後のサビがあるやろ、あれを繰り返したあと、前奏に戻るん」

「えっと――」平尾はスコアを見て考えている。

「1番と2番の間とおんなしやで」と僕は付け加える。

「あーあー、わかった。なるほどねー。ほんで、繰り返しは何回？」

「えっと――」今度は僕が考え込んだ。「4回か6回ちやうかなあ？」

「なんと4回？」

「なんがってなんが？」

「ほなけん、『ガンダールア』が4回？ それともサビ全体が4回？」

「サビ全体でなんや？」

「1番のサビのこと」

「いや、それは長いで。1番のサビと同じのが2回か3回かってことや。てことは『ガンダールア』は——あれ、何回や？」

「8回か12回」

「ええー？ ちやうやろ。そんなようけたくさんないやろ」

「ちやうわ、10回か15回や。やって1回のサビに『ガンダールア』が5回出てくるで」

「嘘やん」

「ほんまやってー。いくで。イン ガンダールア ガンダールア ゼイセートウワズインインディア ガンダールア ガンダールア あいのーくにーガンダールア。ほら、5回やん」

「ほんまや、5回やった」

僕と平尾が喋っている間、ヨシヒコと敬ちゃんがぼかんと口を開けてこっちを見ていた。もうええやん、というときの顔だ。

「ほんで何回なん？」

「1番のサビが3回や」と僕は言った。「ヨシヒコ、それでかまん？」

「オーケー。そしたらもう1回いこうか」

【ナタデココ】

曲の終わり方が決まったあと、僕たちは『ガンダールア』を何度か続けて演奏した。最後のサビの繰り返し回数を全員が間違えないようになると、誰からともなく休憩のコールが入った。僕はずっと椅子に座っているからいいものの、ドラムはどう見ても肉体労働だし、ギターとベースは立ちっぱなしで、しかもヨシヒコはずっと歌い続けているのだから疲れていて当然だった。僕はジュースを買ってくることを申し出て、3人から110円ずつもらって近くの自動販売機へ向かった。ヨシヒコはアイスコーヒー、敬ちゃんと平尾はお茶のリクエストだ。

買ってきたジュースをみんなに渡すときに、目ざとい敬ちゃんが僕の持っていたジュースを見て言った。

「あ、ナタデココのジュースやろ、それ」

「知ったった？ これめっちゃうまいんやで」

「知っとるよー」

どういうわけか、数年前からいくつかの舶来デザートが代わる代わる流行した。ティラミス、ナタデココ、パンナコッタ。スーパーのデザートコーナーにはそれらの名を冠した様々な見た目の商品が並び、どれでもいいからとりあえず1回ずつは食してみないと直ちに流行遅れの烙印

印を押されるまでになった。僕もいくつか食べてみたけど、特においしくてたまらないと思うほどのものはひとつもなかった。ただし、そのナタデココのジュースだけは、誰かにすすめられて飲み始めて以来、自動販売機で見かけると買わずにはいられなくなった。

「ミーハーちゃうよ」と僕が弁解をすると「そんなん言うたらますます怪しいやんか」と敬ちやんにもつともなことを言われた。

でも僕はナタデココというデザートを食べたことがない。ティラミスとパナコッタもだ。何となくイタリアかフランスのデザートだというのは知っていたけど、果たして本物がどういう見た目をしていて、僕が食べたことのあるものとはどのくらい違うのか、そのあたりのことは全然わからなかった。

「なあなあ」とその会話を聞いていた平尾が言った。「俺にも飲ませてや、それ。ナタデココってどんなん？」

「平尾君知らんのか？」

「知らん。なんなんそれ」

「ふうん——平尾君って、そんなんばかり食べよんかと思とった」

敬ちゃんは平尾家の金持ちイメーজのことを言っているのだ。その言葉を適当に受け流して、平尾は僕のジュースを一口飲んでから言った。

「カルピスみたいやな」

庶民のコメント。

「底のほうに四角いんが沈んだるやろ、それがナタデココや」と僕が言うと、平尾は軽く缶を揺らしてからまた一口飲んだ。そして口に入ってきたものをゆっくりと咀嚼して飲み込んでから、一言だけ感想を述べた。

「めっちゃめっちゃまい」

平尾があんまり真顔で言うので、僕は思わず笑いながら「全部飲んでしもてええよ」と言ってしまった。半分は残ってたのにもつたないことした、とあとになって後悔した。

【スプリット】

練習の後半は『ホーリー・アンド・ブライト』だ。個人練習の段階からわかっていたのは、『ガンダーラ』より遥かに難しいということだった。シンセに関して言えば、とにかく音の種類が多いせいで、演奏以外に音色を切り替えるという作業に気を配らないといけないのが大変だ。しかも常に2つ以上の違う音が鳴っているからスプリットを多用しなければならず、集中していないと弾いているうちにわけがわからなくなる。

スプリットとは、鍵盤の左右で違う音が鳴るようにする機能だ。曲中で同時に2つの音が鳴っている場合、普通ならシンセを2台用意してそれぞれに違う音色が出るようにしておき、右手で1台のシンセを、左手でもう1台のシンセを弾くことで対応する。でもシンセを1台しか

持っていないこの状況の場合はそうはいかず、スプリットを使うことになる。

スプリットの仕組みはこうだ。まず2つの音を同時に鳴るようにしておき、片方の音を鍵盤の真ん中あたりから右の部分が出ないようにする。こういうことはシンセのお家芸だから簡単にできる。これで音の出る左半分の鍵盤が左手用になる。もうひとつの音は、さっきとは逆に左半分の鍵盤が鳴らないようにして右手用にする。もちろん2つの音が真ん中で重ならないように、音が出なくなる境界の音を半音だけずらしておく。

このままでは左手の音がやたらと低く、右は高いというアンバランスが生じるので、左手の音は2オクターブほどチューニングを上げて、右手部分は逆に下げる設定にする。これで左はピアノ、右はフルート、なんていうオリジナルの音色ができあがるわけだ。どっちを右にしても構わないけど、当然右手の方が難しいフレーズを弾けるので、演奏のややこしい方は右手、簡単な方は左手のパートに振り分ける。「スプリット」は英語で「区切る」の意味だから、鍵盤を区切って使うことからこの名前がついたんだと思う。

『ホーリー・アンド・ブライト』には、基本になるピアノの音の他に、前奏や間奏部分で鳴っている「ポワワーン」という電子音や、Aメロで「ぺポぺポ」と鳴っているおもちゃのオルガンみたいな音、Bメロの「ふわーっ」とした柔らかな音、Bメロの最後に「チャラララ」と4音しか出番のないチェンバロっぽい音などがある。厳密に言えばオリジナルの曲中に登場するシンセの音はもつとあると思うけど、細かくやっているとときりがないので、他で代用できるものはちよつと音が違っても我慢する。

検討の結果、「ぺポぺポ」は「ポワワーン」で代用し、「ふわーっ」と「チャラララ」は個別に用意することに決定。僕は音色を全部で3つ作り、左手部分は3つとも共通でピアノ、右手はそれぞれの特殊な音が鳴るように設定した。

スプリットを使うときに注意しないといけないのは、鍵盤をどこで区切っているかをちゃんと覚えておくことだ。そうしないと、ピアノの領域を威勢よく弾いていた左手がうつかり右のフルートの領域に踏み込んでしまつて、小指はピアノ、親指はフルート、なんていう非現実的なことが起こる。音程がずれているわけではないから注意して聴いていないとわからないとは思うけど、キーボーディストとしてはやりたくないミスのひとつだ。

シンセの音を切り替えながらボリュームの調整をしていると、平尾がさっきと同じように「最初は1番のサビの終わりまでにせん？」と言った。誰も反対はしなかった。

スティックを空振りしながら敬ちゃんがテンポを取っている。さっきよりはかなり速いはずだ。敬ちゃんのカウントが入る。

カッカッカッカッ

トウルトウトウ——ターツタツチャツチャラ

トウルトウトウ——ターツタツ

「やめやめえー！」

ヨシヒコがマイクに向かって叫んだ。音が一瞬で止む。

「なんか違うぜ！」

僕もそう思う。なんかちやう。

「ちやうよね」と敬ちゃん。

「ごめん、まち^間ごうた」と平尾が気まずそうに告白。「フレットまち^間ごうた。半音上やった」

「おいおい——頼むぜ平尾」

「ごめん」

「まあまあ、もう1回いこうで」僕が仲裁に入る。

「この曲めんどいよね、けっこう」と敬ちゃん。

「あんさー、しばらく前奏だけやってもええ？ 最初が難しいんや」

ヨシヒコが平尾の案をしぶしぶ了承し、前奏だけの練習を開始。

カツカツカツカツ

トウルトウトウ——ターツタツチャツチャラ

トウルトウトウ——ターツタツチャツチャラ

柔らかい電子音「ポワワーン」が耳に残るイントロのフレーズを奏で、最後にもう一度はじめの「トウルトウトウ——」に戻って前奏が終わり、バラバラと音が止む。ヨシヒコはとても歌いたそうな顔をしている。

「なあなあ」と僕は言った。「前奏ってヨシヒコなんも弾かんの？」

「ん？ ギターは弾くところないぜ」

「そうやつけ？ なんか鳴つとったと思ったけどなあ」

「そうか？」

「1回CD聴いてもええ？」そう言っ僕はカバンからゴダイゴのCDを取り出す。

「あれ、マイキーCD買ったん？」

「おう、これから何回も聴くけん、持っといった方がええと思って。欲しかったしな」

「私も買ったよー」と敬ちゃん。

「なんや、そんなんやったらカセットいらんかったな」と平尾がまたケチくさいことを言っている。

僕はミキサーにつないでおいたプレイヤーに自分のCDをセットし、5曲目を再生。

「ほら、ターツタツチャツチャラの部分、ピアノとかぶって鳴つとんギターの音ちやう？」

「まじで？ もう1回頼む」

トウルトウトウ——ターツタツチャツチャラ

「ほんまや、鳴つとる」と平尾。

「俺わかんねえ」

「ほんならヘッドフォンしてみ。右の方から聞こえるで、アコギの単音や」と僕。
ヨシヒコはヘッドフォンの左右を確認してから耳に当て、再生ボタンを押した。今度はヨシヒコにしかCDの音は聞こえていない。

スタジオの中がしばらくしんとした後、ヨシヒコがヘッドフォンをつけたまま「おおー、確かに鳴ってるな」と呟いた。僕と平尾は目を合わせてニヤリと笑う。

ヨシヒコはヘッドフォンを外し、ギターの弦を何度か弾いてそのイントロの音を探した。音はすぐに見つかったらしく、ギターパートの「ターツタツチャツチャラ」のフレーズができあがった。

「よっしゃ、じゃあもう1回いくぜ」

「あー、ちよつと待ってちよつと待って」

「なんだよ平尾」

「イントロのベースさー、変とちやう？ 大丈夫かの？」

「大丈夫やと思うけど」と僕が返事をする、敬ちゃんが「そんな感じやと思う」と言った。

「そーかなあ、なんかちよつとちやう気がするんやけど」

「まあええやん、細かいところは後回しや。とりあえず歌まで行かんと」

「そやね」

「次は歌まで行くぜ、いいよな。じゃあカウントよろしく」

「はーい」

カッカッカッ——

物足りなかった前奏にヨシヒコのギターが加わる。

Aメロ、Bメロ、そしてサビ。音がバラバラになって合わないところもあったけど、何とか1番のサビ終わりまで到達。でも『ガンダーラ』のときのような「やった！」という感じがない。僕だけでなく他の3人もそんな顔をしていた。

「どうやろ？」と僕はヨシヒコに聞いてみた。

「おう、まあ何とか歌えるけどな、あんまりかつこよくねえな」

「なんがいかなのやろ」

「なあ敬ちゃん、テンポもう少し速くねえか？」

「うん、そうかもしれん」

「もっかいCD聴いてみよか」

「うん」

CDを聴きながら敬ちゃんがステイックを空振りしてテンポを取っている。

「わかった、ありがと。もうちょっと速いねえ」

「じゃあそれでもう1回いこう。平尾、大丈夫か？」

「うん、いけると思う」

「ちよっと速めでいきまーす」

カッカッカッカッ――

思ったよりテンポが速く、はじめの部分をほんの少し弾き遅れる。前奏が終わるところになってようやく指が新しいテンポに慣れる。さつきより随分速いような気がした。

Aメロを弾いている間、次の音に切り替えるタイミングのことが気になる。鍵盤を弾き続けているわけだから、パネルの操作は一瞬で済まさなければいけない。考えているうちにすぐその場所まで来る。イメージしていたとおりのタイミングでボタンを押す。

そしてBメロ。曲調が少しマイナーに変わり、音数が減って静かになる。4音しか出番のない「チャララ」を弾き終えた後、すぐにサビ用の音色に切り替える。サビの直前で曲が盛り上がり、音が明るくなる。

ホーリー　ホーリエンブライ

アスターイズシャーニエン　ホーリエンブライ――

同じコーラスを2回繰り返してサビが終わり、音が止む。

「どう？」

「おう、さつきよりいいぜ。歌いやすくなった」

「敬ちゃん、どんな感じ？」

「忙しいけど、さつきより叩いてて気持ちええよ。この曲、アップテンポな方がええんやねきつと。CDより速^{はや}うなつてもたけど」

「でも絶対こっちのほうがええわ、なあ平尾」

「うん。速いけど何とかかなりそうや」

その調子で『ホーリー・アンド・ブライト』の1番だけを繰り返して練習しているうちに、あつという間に日が暮れてしまった。時計を見ると、スタジオに入ってからすでに3時間が経っている。最初は元気だったヨシヒコも、曲の合間に床に座りこむようになった。平尾は随分前から床にあぐらをかいてベースを弾いている。いくらやりたくても、限度があるんだなと僕は

思った。

時計を見ながら「そろそろ終わりにしよか」と僕が言うと、ヨシヒコが「じゃあ『ガンダーラ』を1回だけやって終わりにしようぜ」と言ってギターをジャーンと派手に鳴らしてみせる。平尾は立ち上がりながら『ガンダーラ』弾けるかなー」とのんきなことを言っている。

初日最後の練習。

「敬ちゃんカウトオ！」僕はずっと言ってみたかった台詞をヨシヒコに代わって言う。いい気分だ。敬ちゃんが頭の中でテンポを調整し、スティックを顔の前に構える。

「いきまーす」

カツ、カツ、カツ、カツ――

一九九五年七月一日 文化祭当日 二ヶ月後

バンドの練習日が毎週日曜日に決まった。敬ちゃんは平日はほとんど部活があるし、土曜日には僕と平尾は塾がある。いくら隣の家が離れているとはいえ、夜遅くにあんな大音量で練習することはできない。4人のスケジュールをつきあわせてみると、日曜日しか集まれる日がなかった。本番直前なら部活を休むのはやむを得ないと敬ちゃんは言ってくれたけど、吹奏楽部も音楽発表会に出場するのだからそうはいかないだろう。ただ一人これといった予定のないヨシヒコはもっと練習したそうなことを言っていたが、全員が集まらないと意味がないことはちゃんとわかっていたようで、ぶつぶつ文句を言いながらも週に1度の練習を受け入れた。そして、固めて練習ができるチャンスは夏休みだということ全員がわかっていた。

夏休みまでの間、僕はポータブルプレイヤーを肌身離さず持ち歩き、学校の休み時間や通学時間を使ってゴダイゴの2曲を嫌というほど繰り返し聴いた。コード進行をある程度覚えてしまうと、今度はCDを聴かずに全体の流れをシミュレーションするイメージトレーニングに移る。コード進行はもちろん、テンポや音色の切り替えのタイミングなどを何度も何度も頭の中でイメージする。今はまだできないけど、コーラスをするためには歌詞も覚えなければいけない。ヨシヒコと違う歌詞を歌ってしまうとすぐに間違いがばれてしまうから、いい加減にはできないのだ。

7月に入って1学期の期末試験が始まると、家で練習する時間がぐっと減る。3年の内申点は高校受験に大きく影響するので、試験勉強は疎かにはできない。バンド練習にかまけてテストの点が悪かったりしたら親に何を言われるかはよくわかっていたから、なおさら手を抜けない。

かった。

バンドのメンバー4人は全員進学を希望していた。一番成績が良かった平尾は高松市内にある県内一の進学校を希望していて、僕は市内の別の高校、敬ちゃんの家業の関係で隣の工業高校を受験する予定でいた。ヨシヒコについては本人が語りたがらなかったせいで確かではないのだが、みんなが滑り止めで受ける私立の高校を受験するという噂だった。いずれにしても志望校についてはデリケートな話題なので、いくらバンドのメンバー同士でも軽々しく口にはできなかった。

期末試験が終わると、クラスの雰囲気は一気に文化祭モードに切り替わる。夏休みまでのわずかな時間を使ってクラスの出し物を決め、夏休み中の登校日を使った準備のスケジュールを練る。夏休みが明けると文化祭はもうすぐ目の前なのだ。

【ダンスパーティー】

中学校の文化祭の出し物といえば、焼きそば、かき氷、迷路、お化け屋敷などが定番だ。さらにその定番出し物をめぐって重複を避けるための熾烈な抽選が行われ、運よくその定番出し物をつかんだクラスは企画を捻り出すという面倒な作業から解放される、というのがどこにもある文化祭風景だ。抽選に敗れたクラスが苦し紛れに中途半端な研究発表をやって見向きもされなかったり、合唱コンテストに命を賭けている一部の女子がクラスの出し物には妙に消極的だったり、文化祭自体にまったく興味を示さない男子がいたり、文化祭へ向けて足並みを揃えるのはなかなか大変だ。

我が満中では、「クラスの出し物は最小努力で」というのが常識だった。それは文化祭の準備を夏休み明けの1ヶ月間しかできないという日程的な理由もあったが、実はそれよりも、あるイベントがあつて2日目の日曜日はクラスの出し物どころではなくなるといふ事情があつた。

そのイベントとは「ダンスパーティー」のことだ。ダンスパーティーと聞くとフォークダンスを思い浮かべてしまうが、それとは桁違いの内容だ。もともとは社交ダンス狂だった初代校長が独断で始めたもので、それが長年かけて完成し、今や満中文化祭におけるビッグイベントとなった。中身はというと、ずばりその名のとおりのダンスパーティーだ。ただし、中学生がやるものだと思つてはいけない。音響設備も装飾も、大人顔負けのダンスパーティーなのだ。

場所は体育館。でもその日一日は、卒業生が代々寄付し続けてきたダンスパーティーのための装飾品の数々によって、体育館が体育館ではなくなる。古びた床材は深紅のじゅうたんを埋め尽くされ、くすんだガラス窓は高級カーテンで覆われ、10を超える業務用スピーカーが館内を取り囲み、高い天井からは精巧に作られた贋物シャンデリアと本物のミラーボールが吊り下がる。壁際にはカウンターテーブルが並び、ノンアルコールのシャンパンをはじめとする十数

種類のドリンクとフードが用意される。そして体育館の入り口には40年前から伝わるという赤銅の「鹿鳴館」の巨大な看板が高々と掲げられる。こうして年に一度、「満中体育館」はシンデレラよろしく「鹿鳴館」に成り上がるのだ。

鹿鳴館で踊ることを許されるのは3年生だけだ。1、2年生は会場設営には駆り出されるものの当日フロアで踊ることはできず、体育館の2階部分に作られた観客席から見学することしかできない。心身ともに成熟した者だけが（という意味かどうかは知らないけど）赤じゅうたんの上で踊り、それを後輩たちは羨望の眼差しで見つめるというわけだ。

そこまで真剣に準備をするわけだから、もちろん事前にダンスのレッスンがある。数十年前の卒業生だというし、わくちやのおばちゃんが社交ダンスの何たるかを手取り足取り指導してくれる。しかもレッスンには体育の授業時間を使う。文化祭実行委員の労力の半分が費やされると言われるこのダンスパーティーは、学校を挙げてのイベントでもあるわけだ。

ダンスにルールはない。あるのは1時間という制限時間だけ。相手はもちろんフリー。誰と何回踊ってもいい。ただし、相手は自分で見つけなければならない。フォークダンスのように、全員にある程度平等に機会が与えられるわけではない。だから相手がいないければ踊れない。へらへら笑ってもごまかしは効かず、逆に惨めになるだけ。カウンターテーブルに肘をついてドリンクを飲みながらライバルの出方を探り、意中の相手の手をとるチャンス伺う。狙いは曲の切れ目。ずっと近寄ってさっと手を取る。首尾よくダンスにたどり着けたときは、ここぞとばかりに練習の成果を見せつける。弱肉強食。みんな必死。もちろん最終目標はチークダンス。さらにその場でこっそり告白してOKまでもらえればアメリカンドリーム。それが「満中鹿鳴館ダンスパーティー」なのだ。

実はこの歴史あるイベントにも、風当たりの強い時期があったという。7、8年前の話らしいが、当時は「服装自由」のルールがあった。服装自由だとどうなるか。簡単な話、女子を中心に衣装戦争が勃発するのだ。娘を持つ母親たちは「衣装もちやんとせなふうが悪い」とばかり、争うようにダンスパーティー用の衣装を新調する。当然そこには貧富の差、センスの差、容姿の差、スタイルの差、意気込みの差が容赦なく現出し、その結果誰かが勝ち、誰かが負ける。そして勝ち組に属する母親たちは、往々にしてPTA内でも強い発言権を持っているから、負け組の「ダンスパーティー反対」の声はほとんど響かない。

いま考えてみれば、そんなことが何十年にも渡って野放しにされていたことのほうが驚きだが、順位、競争、優劣という言葉に敏感になってきたご時勢のおかげか、現在では「服装は制服」という単純明快で平等なルールが適用されている。

そしてこのダンスパーティー、実は参加は自由なのだ。参加したくなければしなくていいのだ。ところが、不思議なことに参加率は毎年9割を軽く超える。残りの1割は講堂での音楽発表会のリハーサルに迫られる吹奏楽部と合唱部の部員、それにバンド演奏の参加者だから、有効参加率はほぼ100パーセントということになる。恐るべし鹿鳴館の求心力。

さて、そういうわけで、音楽発表会のリハーサルがあるから僕はダンスパーティーに参加できない。大義名分を得た形だ。とは言え、満中生である限り、ダンスパーティーに興味がないと言えば嘘になる。「マイキーええよなあ、ダンス行かんでええんやろー」と誰かに言われるたびに「へへっ」と照れたふりをして役得をアピールこそするものの、もしかしたら一生に一度の体験になるかもしれないと思うと、正直言って少し残念ではある。でもやっぱり僕にとってダンスパーティーは小っ恥ずかしいイベントだ。女の子に声を掛けて踊るなんて、考えただけでも耳が熱くなる。2階の観客席からこっそり覗き見るくらいがちょうどいい。

平尾はバンドを組んですぐに「これでダンスせんでええなあ」と漏らしていたから、僕と同じような考えだったんだと思う。敬ちゃんも1年のときに吹奏楽部に入部した時点で決まっていたことだから、今さらこれといった感想はないようだった。

それではヨシヒコはどうだったか。

【秘密】

それは夏休みに入る2日前の出来事だった。

平尾を井上さんの写真で脅迫したことからわかるとおり、人の恋愛話を持ち上げてからかうのはヨシヒコの得意とするところだった。ところがそういう奴は大抵の場合、自分が恋愛がらみでからかわれるのを恐れているものだ。からかわれないようにからかい続ける。まるで自分が自分に課せられた使命であるかの如く。

僕が見たところ、ヨシヒコはまさにその手合いだった。ヨシヒコが誰かを好きだなんていう噂は聞いたことがなかったし、本人は絶対にそんな話をしなかった。でもヨシヒコだって僕と同じ中3なのだから、何もないはずはなかった。

ある日の昼休みのことだ。さっさと給食を食べ終わった僕のところに、ヨシヒコがやってきた。

「ちよっとマイキー」

いつもと少し様子が違った。「いい話があるんだけどよ、ちよっと寄ってかねえか」と言わんばかりの不遜な感じがしない。

僕が連れて行かれたのは体育館の裏にある教師用の駐車場だった。

「なあマイキー、秘密にして欲しいんだけどよお」

ヨシヒコはいきなりそう切り出した。

「なんや？」

ヨシヒコは腰をかがめ、声を潜めて言った。

「実は俺な、バンドに誘ってた子がいるんだよ」

「ええ？」

「その子にな、ヴォーカルやつてもらおうと思ってたんだ」

「子って——女の子ってことか？」

「そう」

「そんなんゴダイゴやのに無理やん、男ちやうといかんやん」

「いやいや、もうそれはいいんだ。その子には断られたからよ」

「どういうことや？」

「あのな、マイキーに頼みがある」

ヨシヒコが今まで見たこともないくらい真剣な顔をしている。ヨシヒコはさらに腰をかがめる。

「その子にな、俺とダンス踊ってくれるかどうか聞いて欲しいんだよ」

「はあ？」

「いやわかってるわかってる」ヨシヒコはえらく大袈裟な手振りで僕が喋ろうとしたのを遮った。「バンドのリハがあるから無理ってんだろ、それはわかってる。でもな、噂じゃちよとくらい抜け出しても大丈夫だって話なんだよ、だからよ、その間に5分でもいいから体育館に行きてえんだよ、な、頼む」

「いや、頼むて言われてもなあ——そら勝手にしたらええんとちゃうん？　ちゃんとリハーサルさえできればええんやし」

「おつ、さすがマイキー、柔軟な考え。それでな、頼みってのはな、その子にな、俺がダンスに誘ってもオーケーかどうかをリサーチしときてえんだよ」

「リサーチ？」

「な、頼む、マイキーにしか頼めねえんだよ、な、この通りっ！」そう言ってヨシヒコは両手をパチンと合わせて僕に向かって頭を下げた。

「ちよっ——やめえやヨシヒコ」

ヨシヒコがあんまり頭を下げるので、僕の方がぼつが悪くなってきた。僕はヨシヒコの方をぽんぽんと叩いて頭を上げさせた。

「そらわかったけど、俺、そういうのうまいことできるかわからんで」

「ほんとか！　やってくれるか！」

「まーなあ、しゃあないやん。ほんで？　誰やその子って」

「あ、あのな、これ絶対秘密だぜ」

「わかったって」

「あのな——」

ヨシヒコが僕の方に近づきながら顔を寄せてくるのが気持ち悪かった。

「なんや、はよ言えって」

「絶対秘密にしてくれや」

なぜかちよつと関西弁。
間。

「実は、井上さんなんだよ」

「ええっ！ ファルコン？」

「バカヤロ！ ちげえよ！ 美人なほうに決まってんだろ！」

ヨシヒコが突然大きい声を出したので僕は思わずのけぞった。

「なんや、びっくりした」

「勘弁してくれよマイキー」

「ふうー」僕は深呼吸した。心臓がばくばくしている。「なんやヨシヒコ、井上さんのこと好きやったん？」

「声がでかいっ、頼むから秘密にしといてくれよ」

「わかったって、言わんってそんなん」僕はあまりにしつこいヨシヒコの口止めにうんざりしてきた。「ほんで？ どなんしたらええん？ 言うとくけど俺、井上さんと喋ったことほとんどないで」

「大丈夫。俺の作戦通りにやれば大丈夫。いいか——」

それからしばらく、その場所で僕はヨシヒコの「作戦」を享受した。

作戦の中身はこうだ。まず話しかけるきっかけは「井上さん、ヨシヒコからバンドに誘われたんやって？」の質問。それから「結局、ヨシヒコがギター弾きながら歌うことになったんやで」と経過報告。そして「ヨシヒコ強引やけん、無茶なこと言わんかった？」と優しくケア。さらに「あいついっつもあんなやから、許してやってな」と軽いい人ぶりをアピール。ここで話題を転換して「そういえば井上さん、ダンスパーティー出るん？」と探りを入れ、「俺らリハーサルがあるけんダンスパーティー行けんのやわ」と前置いておいてから、「ヨシヒコが井上さんと踊りたかったあつてばやいてたで」と核心に触れ、最後に「井上さん、もしヨシヒコに誘われたらどうする？」と質問。これで目標達成。

「そら無理やろ！」僕はヨシヒコのあまりにも能天気な作戦に思わずつつこんだ。「そんなうまいこといくわけないやんか」

「大丈夫だ」

「大丈夫とちゃうわ！ そんな俺がむっちゃ変な奴やと思われるやん」

「なんでだよ」

「ほんなて、どう考えても探り入れよるって感じやし」

「そうか？」

「無理、そんな絶対無理」

僕が断固拒絶したのが予定外だったのか、ヨシヒコは急に元気がなくなった。しかしながら

これは井上さんの僕に対するイメージを決定づける会話でもあり、何でもかんでもOKするわけにはいかない。

ヨシヒコは口をとがらせて不満そうな顔をしている。

「じゃあどうしたらいいんだよ」

「そんな言われてもなあ――」

「じゃあ電話はどうだ？ 電話して聞く」

「いかんって。余計やりにくいわ」

「んー」

僕は駐車場の輪留めに腰掛けた。「なんでそんなことこいつのために考えんといかんのや」と心の中で毒づきつつも、井上さんに話しかけて少しは仲良くなれるならこれは決して悪い話ではないとも思っていた。僕だって井上さんには興味がある。それにしてもテーマが悪い。ダンスパーティーで踊れるかどうかなんて、そんなことを聞き出すのに作戦も何もあつたもんじゃない。ストレートな質問はストレートに聞けばいいのだ。

「なあヨシヒコ」

「ん？」

「思い切ってストレートに聞いたらえんちゃう？」

「ちょ、直球勝負か」

「そうや。宗山君がキミと踊りたいってよおるけどって」

「イエスカノーってことか？」

「そう」

「じゃあノーだったらどうすんだよ」

「知らんわそんなん」

意外と潔くない奴だと思った。まるで恋愛相談に乗っているみたいだ。誰かの悩みを聞くなんて、あまり経験のないことだった。そして相手はあのヨシヒコなのだ。僕は何となく自分が優位に立っているようないい気分になってきた。

「一発本番で勝負するんは？」

「ダメだ。振られたらかつこわりい」

「井上さんの友達に聞いてもらうとか」

「ダメ。人に知られたくねえからダメ」

「手紙書くとか」

「俺、字きたねえからダメ」

「そんなん言うたらもう無理やで」

「マイキー、そう言うなって――」

で、結局、話をまとめたのは僕だった。

「ほんなら俺のアドリブに任せるつてのでええか？」

「——わかった。マイキー頼む」

万策尽きた感のあるヨシヒコがそう言つて頷いた瞬間、午後の授業のチャイムが鳴った。

【決戦は金曜日】

作戦の決行は終業式の日が決まった。7月21日の金曜日だ。その日は弓道部の練習が休みだということがわかっていた。夏の大会が終わったばかりで臨時休みを取るようになっていたことを、ヨシヒコがあらかじめ調べていたのだ。さらにヨシヒコは井上さんの住所まで調べてあった。学校からの帰り道に話しかけるポイントを決めるためだ。

ヨシヒコの計画では、先に下校していた僕が神社でジュースを飲んでいて、そこに井上さんが通りかかったところで声を掛けることになっていた。ジュースはナタデココ。流行アイテムを使うことで、話題に困ったときの逃げ道を確保しておくというわけだ。会話の本身は約束どおり僕のアドリブに一任することになっていたけど、「実はヨシヒコに頼まれて」とタネを明かすのは絶対にタブーだと何度も念を押された。

当日。

僕は帰りのホームルームが終わると、チャイムが鳴り終わるより先に教室を出た。目的地の神社は学校から10分ほど離れた場所で、井上さんの家と学校のちょうど中間点だった。神社に向かう途中の自動販売機でナタデココのジュースを買い、僕は予定通りの時間に神社に着いた。神社にひと気はなかった。昔はここでも年に2回は賑やかなお祭りがあったらしいが、いまはもう使われていない。境内は一応誰かが手入れをしているみたいだけど、鳥居の朱色は褪せ、手水舎の水はいつも濁っている。おまけに神木まで枯れてしまっている始末で、そもそも神社として成り立っているのかどうか疑わしいような神社だ。あまり一人で来たいと思う場所ではない。僕はそんな薄ら寒い神社の鳥居の前に立って、井上さんが歩いてくるであろう神社の前の道の先を、右手にナタデココを持って眺めている。

この作戦にはいくつかの大前提があった。ひとつは井上さんが学校が終わって真っ直ぐに家に帰ること、二つ目はこの神社の前を通ることだ。どちらもまったくの不確定要素ではあったが、人目につくから学校は嫌だという点で僕とヨシヒコの意見が一致し、これ以外にいい方法を思いつかなかったのだから仕方がない。古典的ではあるが、ある程度の確率で成功するだろうと踏んでいた。

30分くらいは待ただろうか。僕はふとジュースが空になっていることに気がついた。緊張しているせいだろう、無意識のうちに全部飲んでしまっていたのだ。全部飲んでいて悪いことは何もなかったが、空き缶を持ったまま鳥居の下で女の子を待ち伏せするというのは何となく

格好が悪いような気がした。自動販売機まではそう遠くないが、井上さんと途中で鉢合わせる可能性もある。別にそれでもよかったが、僕は「鳥居の下に立っている自分」が井上さんに話しかけるところを何度もシミュレーションしているから、それ以外の場所ではどうもうまくいかない予感がした。さっと走って行ってジュースを買って、さっと走って戻ってくる。まるで陣取り合戦で鳥居の下を守っているみたいだけど、そのときはそれが最善策である気がした

僕は意を決すると、猛ダッシュで自動販売機まで走った。時間にしておよそ1分。ぜえぜえと肩で息をしなければいけないくらいハードワークだ。自動販売機にたどり着き、喉が渇いてちょうどいいやと思って財布に手を伸ばした瞬間、視界の隅で不吉な赤いランプが点灯していることに気づく。

売り切れ。

「ジーザス！」

ヨシヒコの口癖を思わず真似してしまう。

——やばい。予定外だ。

と、思ったところに右前方から誰かが歩いてくる気配。

僕は顔を右に向ける。

角を曲がってきたのは——井上さん。

最悪。

僕の脳細胞が一瞬にして活性化する。

——やばいやばいやばい。考えろ考えろ考えろ。考えるんだマイキー！

しかし時すでに遅し。僕はナタデココの空き缶を手は何故か息を切らしている。どう見てもおかしい。不審者マイキー。ナタデココ城崎。守るべき陣地から離れて浮き足立った足軽のようには僕はうろたえる。井上さんまでの距離は10メートル。時間にして——

「こんにちは——」

——え？

何と、先に声を掛けてくれたのは井上さんだった。その一言が、予定外の行動を起こして窮地に立たされた僕を救ってくれた。

「こんにちは」

僕はあせらないように、そしてどもらないように気をつけながら挨拶を返した。その一言を発することで、僕は一気にリラックスした。

「井上さん、今日は部活休み？」

予定していた一撃。

「うん、大会終わったから臨時休み」

予定通りの答えが返ってくる。

「大会どうやったん？」

「うん、初戦は勝ったんやけどね、2回戦で負けた」

「そうなんや。でもすごいな、一勝するだけでもすごいと思うで」
「そうかなあ」

ここまでは出来レース。気持ちに乗ってくる。

「城崎君、どうしたん？　こんなところで」

「うん、ナタデココのジュース買おうと思ったら、売り切れやったん」

「ナタデココのジュース？」

「うん。めっちゃうまいんやで。飲んだことない？」

「飲んだことない」

「いっぺん飲んでみてん、ほんまにうまいで」

「うん、わかった、今度飲んでみる」

考えてみれば、鳥居の前でジュースを飲んでいるより、自動販売機の前で空き缶を持っているほうが自然だ。

——空き缶？

「でも城崎君、そのジュース持つとるやん」

「え？」

——しまった。先に捨てておくべきだった。

「あ、あーいや。さっき1本飲んでな、まだ喉渴いとするけんもう1本飲もうと思たら売り切れとったんや」

ちよつと苦しいが何とかセーフ。

「そなんおいしいん？」

「何本でも飲めるで」

僕がそう言うのと、井上さんがクスクス笑い出した。

「なんがおもしろいん？」と僕が聞くと、井上さんは「ごめんごめん」と笑いながら謝った。僕の苦し紛れな答えが功を奏したみたいだった。その瞬間、僕はここが本題に移るチャンスだと悟り、ぱつと頭を切り替える。

「そういうやさ」と僕はクールに言う。「井上さん、ヨシヒコからバンドに誘われたんやって？」

「え？　ああ、うん、だいぶ前やけどね」

「部活忙しいけん無理やんね」

「まあそれもあるし、私、人前で歌うんとか絶対無理やけん」

「そうなん？」

「やって恥ずかしいやろ。城崎君平気？」

「平気ってわけちゃうけど、まあ別に」

「すごいね」

「すごいくないって」そう言いながら、僕は照れていた。まさか井上さんにこんな形で褒められるとは思ってもみなかったからだ。

「宗山君、私にジュディマリを歌って欲しかったんやって。私ジュディマリなんか聴いたことないし、他にも色々理由言うて断ったら残念そうやった」

——なるほど。ヨシヒコはジュディマリをやりたかったのか。

「怒つとらんかった？」

「いやいや全然。結局な、他のバンドの曲をヨシヒコがギター弾きながら歌うことになったんや。歌いたかったみたいやし、本人はめっちゃやる気やで」

「ほんまに？」

「うん。それより、ヨシヒコ無茶なこと言わんかった？」

井上さんは首を横に振って言う。

「そんなことないよ、すごい丁寧やったよ」

「ほんならええんやけど。あいついつつもあんなんやから、許してやってな」

「全然そんなことないで、おもっし^面い人やんね、宗山君って」

「そうか？　いつも一緒にいると嫌^白んなるで」

ここで作戦は最終段階へ突入する。

「そういえば井上さん、ダンスパーティー出るん？」

「え？　文化祭の？」

「そう」

「そら出るよ。出んとあとでなん言われるかわからんけん。あ、そうやん、城崎君たちは出んでもええんやね、バンドがあるけん」

「そうそう。ヨシヒコは出たいみたいやけどな」

「そうなん？」

「あいつ井上さんと踊りてえっていつもぼやいとるで」

「ほんまに？」

「井上さん、もしヨシヒコに誘われたらどうする？」

「どうするって——断ったりはせんと思うけど」

「まじで？　そらヨシヒコ喜ぶわ」

「あっ、いかんよー、そんなん言うたら。変な風に思われるやん。絶対言うたらいかんよ、城崎君」

井上さんは真剣だった。僕が「わかつとる、わかつとるってー」とふざけながら言うと、井上さんは真顔で「いかんよー」を繰り返す。

青空の下にいと、1秒単位で肌が焼けていく感触がする。でも井上さんは毎日部活をしている割には肌が白い。この時期のテニス部の女子はみんな顔が真っ黒だから、それと比べると運動をしているようには全然見えない。

「城崎君、お茶飲む？　おごったげる」

「なんで？」

「口止め料。絶対宗山君に言うたらいかんよ」

「わかつとるって」

井上さんはカバンの中から小銭入れを取り出し、同じお茶を2本買った。

「はい」

「サンキュー」

僕はその場でお茶をほとんど一気飲みして、もう一度井上さんにお礼を言った。別れ際に僕が「今度は俺がナタデココおごるけん」と言うと、井上さんは「うん」と言ってから手を振って、神社の方角へ向けて歩いていった。僕は井上さんの後ろ姿をしばらく見送った後、ヨシヒコに事の顛末を報告すべく、再び学校に向かった。

【愛は勝つ】

「わからねえ？」

何度も聞き返すヨシヒコの大きな声が、体育館の裏手に響く。

「やけん、『さあ、わからんけど』って言うたんやって」僕も負けじと言い返す。

「それじゃあイエスカノーかわかんねえじゃねえか」

「そんなん言われても、井上さんがそう言うたんやけんしゃあないやん」

僕はヨシヒコに嘘の報告をしていた。簡単な話、男の友情より女の友情を取ったわけだ。井上さんとの約束を破るというのは、はじめから僕の選択肢の中にはなかった。

「ほんでもええやん、ノーってはっきり言われたんとちゃうんやけん」

「そりゃあそうだけだよお——」

「一発本番に賭けるしかないって。これ以上聞き出すのは不自然やで」

ヨシヒコは不満そうだったが、僕の言ったことはあながち嘘ではない。井上さんは「断ったりはせんと思うけど」と言っただけだ。イエスでもノーでもないという点において、僕は嘘はついていない。微妙なニュアンスが違うくらいのものだ。

その他に僕が井上さんとどんなやり取りをしたかは、覚えている限り正確に報告した。鳥居の前で待っていてジュースがなくなったこと、自動販売機の前で井上さんに会ったこと、向こうから話しかけてきたこと、お茶をおごってもらったこと。それを聞いてヨシヒコは「なんだよ、俺が行けばよかったぜ。俺の作戦通りじゃねえかよ」と未練がましいことを言っていたが、そんなことを言ってももう遅い。あとの祭りだ。

僕は「一発本番に賭けるしかない」と何度も言っただけで話を終わらせようとしたが、ヨシヒコはなかなかあきらめなかった。実際、ヨシヒコが立てた作戦はものの見事に成功し、会話も怖いくらいに作戦通りだったわけで、たった一つ、予定していた結末を迎えなかったという点をヨシヒコがくやしがるのも納得できる話だった。僕は何度か本当のことを言っただけでやりたくなかったが、そのたびに井上さんとの約束を思い出して踏み留まった。

日が暮れてきて、部活を終えた生徒が長い影を連れて校門から出て行く姿がちらほら見えるようになった。夕陽の色が校舎の窓ガラスに映り、ぬるい風がその前を右から左へと流れていく。僕とヨシヒコは薄くなった校舎の影の中にしゃがみこんだまま、さつきから何も喋っていない。体育館の中でバスケットボールがドンドンと跳ねる音が変わりリズムで聞こえてくる。誰かが大きな声で何かを繰り返して叫んでいる。

「帰るか今日は。しょうがねえな」

そのヨシヒコのため息混じりの声を聞いたとき、僕は「ごめん」と心の中で呟き、同時に井上さんとの約束を守り通した自分が誇らしくもあった。

「腹減ったな」とヨシヒコが呟く。

「おう、腹減った」

「なあマイキー、最後に愛は勝つよな」

そのヨシヒコの大袈裟な一言に、僕はうまく言葉が返せなかった。

【あー夏休み！】

バンドの練習はまあまあ好調だったけど、暑さのせいで練習時間を短くせざるを得なかった。スタジオ15畳には音響設備は完備されていたが、空調設備は皆無だった。扇風機を2つ持ち込んで少しはましになったけど、とても2時間ぶっ続けで練習できるような環境ではなかった。

夏休みの間はシンセをスタジオにおきっ放しにすることにした。いつもは10キロ以上あるシンセを専用のソフトケースに入れて肩から提げて運んでいたのだが、この暑さではそれは拷問に近かった。かと言って毎回親に頼んで車で運んでもらうのも気がひけた。曲の仕上がり自体はバンド練習をどれだけやれるかにかかっていたし、ほとんどやり尽くしていた個人練習のためにはわざわざ持つて帰る必要はないという判断もあった。家にピアノがあるから、最悪の場合それで少しは練習ができる。

夏休み中の練習は、水曜日と日曜日の週2回に決まった。塾の補習や吹奏楽部の練習が思ったよりも多く、それ以上時間が取れなかったのだ。

8月の最初の日曜日、平尾が夏風邪をひいて練習を休んだ。連絡を受けたのは僕だったが、練習を中止することはないと思って他の2人には言わなかった。

スタジオに着いて平尾が休むことを伝えると、ヨシヒコも敬ちゃんも「まあ3人でもやれるやろう」ということになり、ベース抜きの練習を始めた。

練習を始めてすぐにあることがわかった。それはベース抜きではとてもじゃないけど様にならないということだった。床が抜けてしまった感じ、と表現したらいいのだろうか、とにかく何か落ち着かない。ベースの音がないせいでヨシヒコの歌がいつもより大きく聞こえたが、と

でも歌いにくそうだった。音程をうまく取れないのか、リズムが合わないのか、何度も顔をしかめていた。

『ガンダーラ』を1度だけ合わせたところで、みんなが同じ気持ちでいることが判明。真っ先に敬ちゃんがこう言った。

「私、いつもベースを聴つきよるけん、ベースがないと気持ち悪いわ」
意外な言葉だった。

「敬ちゃんって、ベース聴つきよん？」

「うん、ベースだけとちゃうけど一番耳に入るけんね。宗山君のギターが悪いとか、そういうんとちゃうんよ。たぶんバスドラとベースがいつも一緒に鳴つりよるせいやと思うけど」
「ふうん」

新鮮な内容だった。それを聞いていたヨシヒコが言った。

「俺は基本的にドラムを聴いてるぜ」

「え、そうなん？ 俺、ヨシヒコは自分のギター聴つきよんかと思てた」

「バカ、そりやギターは聴いてらあ。でもあてにしてんのはドラムのテンポだな、やつぱり」
バカの一言は余計だったけど、僕は「ふうん」という感じでヨシヒコの言葉を聞いていた。そして「俺はいつも歌聴つきよるけどなあ」と、とりあえずのコメントをしておいた。

しばらくそうやって誰がどのパートを聴いているかという話が続いた。みんな聴いているものはバラバラだったが、僕は自分があまりドラムを聴いていないことを発見した。どうしてだろう、という話になり、敬ちゃんがある提案をした。

「ほんならさあ、今日はもう合わせるんやめて、それぞれのパートをひと通り聴くっていうんのはどうやろ。ほんならちよつとは人の演奏を聴くようになるかもしれんよ」

「なるほどお」

「それ、いいアイデアだな」とヨシヒコも乗り気だ。

敬ちゃんによると、そうやって人の練習を聴くのは吹奏楽部ではよくやっていることらしいが、そのときの僕にはまさに目からウロコの練習方法だった。

早速練習を再開。まずは『ガンダーラ』で、ヨシヒコから。純粹にギターの音だけを聴くために、歌はなしということになった。僕と敬ちゃんは畳に腰を下ろしてヨシヒコのギターを聴く。

「敬ちゃん、カウントだけ頼む」

「はい、じゃあいきまーす」

ヨシヒコが弾くギターのフレーズは、全部聞き覚えのあるものばかりだった。無理もない、一番目立って印象に残るパートなのだ。

ヨシヒコはコードもパターンもまったく間違えずに1曲を弾ききった。最後の音が止むと、

僕と敬ちゃんは拍手をする。

「完璧やね」と敬ちゃん。

「まあな」とさすがのヨシヒコも嬉しそうだ。

「ほんなら次は？」

「私が先にやる」そう言って敬ちゃんがドラムのセットの前に座る。一応カウントを入れてテンポを取る。

・ ・ チャ ・ ・ チャ ・ ・
・ ・ チャ ・ ・ チャ ・ ・

これが前奏のドラムだ。鳴っている音は全部ハイハット。2枚のシンバルがぴたりくついていた「クローズ」の硬い音だ。前奏の終わりにハイハットの「オープン」の「シャン」という音がひとつだけ入り、間を空けずに「スタッ」とスネアが入ってAメロへ。

Aメロは、バスドラ、スネア、ハイハットの3点セットを中心に、よくある4ビートを刻む。8小節ごとの区切れの部分でタムやシンバルなどの装飾音が入り、Bメロに入るとシンバルの数が増えて賑やかになる。Bメロの終わりにまた「スタッ」と決めのスネアが鳴ってサビに入。

サビに入ると、さっきまで左手と交差してハイハットを叩いていた右手のスティックが、右前方のライドシンバルを叩き始める。しかもリズムは8ビート。Bメロの倍の速さでスティックが動く。右手は速くなっても、バスドラとスネアの叩き方はほとんど変わらないから、体の左右が全然違うリズムを刻んでいるように見える。

サビが終わるとまた前奏に戻り、8ビートが4ビートにダウン。ドラムのパターンはワンコーラス目とほとんど同じように思えた。

サビが終わると間奏。間奏はサビと同じ8ビートで、賑やかなまままたサビに入り、最後に前奏に戻って曲が終了。僕とヨシヒコが拍手をする。

「すごいね敬ちゃん」僕は素直に感想を言った。

「テンポめちやくちややったかなあ」

「そんなことねえぜ」

テンポについては僕はまったくわからない。

「そう？　なんしてもサビが速くなるんよねえ」

「サビだけ8ビートやったんやね、知らなかった」と僕は言う。

「え？　ああ、そうやね」と、あまり気にしていなかった様子の敬ちゃんは「感覚でやっとなるけんなあ」とあつけらかと付け加える。

「今度は城崎君ね」

「よっしゃ」

僕は立ち上がり、シンセの前に座ってボリュームを上げる。

「敬ちゃん、カウントお願い」

「はーい」

【ストリングス】

『ガンダーラ』で使う音はひとつだけだ。スプリットを使い、しかも3つも音色を切り替える『ホーリー・アンド・ブライト』に比べれば、音も演奏も質素だ。『ガンダーラ』で使うその音は、「エレピ（エレクトリック・ピアノ）」と「ストリングス」を混ぜた僕のオリジナル音色だ。

ストリングスは英語で弦楽器のことだけど、シンセの音色のことを言う場合には、バイオリンやビオラなどの特定の楽器ではなく、それらが何中にも重なって荘厳に広がるシンセ特有の音色のことを指す。弦楽器のアンサンブルのように聞こえるが実はひとつの音程しか鳴っていないで、それなのにまるで広い聖堂の中にいるかのごとくやたらと響く。ストリングスというのはそんなちよつと胡散臭い音だ。でも効果は抜群。それが入るだけで、曲に厚みが増す。何人も弦楽器演奏者を集めなくても、音色ひとつで事足りる。そういうシンセの便利な面をこれでもかと発揮するのがストリングスだ。

そのストリングスの音がエレピと一緒に鳴るようにすることで、弾いた瞬間はピアノっぽい硬い音、そのあとのふわーとした余韻をストリングスが担当するというシンセの王道音色ができあがる。シンセにはじめから入っているプリセット音の中にもこの音の仲間がいくつも入っているから、活躍の場は多いのだろう。

『ガンダーラ』の場合、弾く音の数が少ないせいで、キーボードだけを聴いていると退屈する。正直言つて、弾いていてもそんなに楽しい曲ではない。でもストリングスの音がたださえ荘厳なせいで、弾き間違えると音がぐちゃぐちゃに響いてものすごく目立つ。だから数は少なくてもコードチェンジは慎重にやらなければいけない。

最後まで何とか間違えずに弾き終えると、ヨシヒコと敬ちゃんが拍手をしてくれた。

「なあマイキー、リクエストしていいか？」

「なに？」

「イントロのギターの部分、手伝ってくれねえか？」

「シンセでつてこと？」

「そう。イントロな、ギターが4本も鳴ってんだよ」

「4本も？」

「おう。その中で一番聴こえる音を弾いてんだけどよ、マイキー余裕ありそうだから、前奏だけでもギターに回れねえかと思って」

もちろんできない話ではない。僕は本当にそんなにギターが鳴っているのかどうかを確認するために、CDを聴いてみることにした。

ヘッドフォンをつけて注意深く聴いてみると、確かに複数のギターが鳴っている。今までは漠然と「ようけ鳴^{たぐ}つとるのー」と思っていたが、CDを聴きながらヨシヒコに解説してもらうと、ギターは確かに4本鳴っている。左の方から簡単なコードプレイをやっているアコギ、センターでメインのフレーズを弾いている2本のアコギ、そして意外と大きなボリュウムで鳴っているクリーントーンのエレキ。

僕は音の正体がわかった瞬間、「ほんまや」と言って驚いた。

「な、だからこれを1本でやると、ちよつとさみしいんだよ」

「確かにそうやな。わかった、ほんならどなんしよ。ヨシヒコが弾いとらん音を俺が弾くってことやな」

「そういうことだ。ちよつと待てよ、1回弾くから」ヨシヒコはそう言ってイントロのギターフレーズを少しゆっくり目に弾いた。

僕は目を閉じてその音を聴く。確かにCDに比べて音が不足している。とはいっても、1回や2回聴いただけではどの音が足りないのかなんてわかるはずがない。

「こらちよつときついなあ。録音して何回も聴いてみたらわかると思うけど、今すぐは無理や」「そうだよな。じゃあ次の練習のときにテープに録ってみるか」

「それがええ」

夕方が近づいてきて、スタジオの中も少しは涼しくなってきたが、それでもまだまだ暑い。僕はハンカチで額の汗をぬぐいながら扇風機の前に座ってひと休みする。

【リバーブ】

練習は『ホーリー・アンド・ブライト』に移る。演奏の順番はさつきと同じで、歌なしのヨシヒコのギター、敬ちゃんのドラム、最後が僕の番だ。

2人の演奏はさつきと同じような感じだった。ギターの音が若干ガンダラーよりも派手に聞こえた。ヨシヒコの解説によれば「こっちの方が賑やかに聞こえないといけないからリバーブを長めにしている」ということだった。

リバーブは日本語で残響のこと。お風呂の中で歌うと声が響くのは誰もが体験したことがあると思うけど、この「音が鳴った後にしばらく残って響く音」が残響だ。残響はもともと自然現象だが、それを機械を使って人工的に作り出して楽器の音の効果として与えたものを、音楽用語で特に「リバーブ」と呼んでいる。

ギターのエフェクターやシンセは必ずリバーブを調整できる機能を持っている。ヨシヒコが言った「リバーブを長めにしている」というのは、例えば大きなホールや教会の中で弾いたみたい聞こえるように音を調整している、ということだ。

リバーブには適正値がある。長すぎると音が不明瞭になり、かつ耳障りで、短すぎると「生音」が目立ってゲームの音みたいにならずに感じさせる。カラオケに行くとき必ずマイクのボリウムの隣にエコーのツマミがあるけど、エコーをゼロにすると途端に歌が下手に聞こえ、あまりエコーをかけすぎると何を歌っているのかわからなくなる、というのがと全く同じことだ。ただし、エコーとリバーブは厳密には違う。エコーは本来「山彦効果」のことを指し、「音が少し遅れて鳴る」現象のことだから、「しばらく残って響く」リバーブとは若干ニュアンスが違う。エコーが何重にも積み重なってできたのがリバーブという風に考えることもできるが、音楽用語ではエコーのことを「デレイ」と言い、リバーブとは明確に区別している。だからカラオケのエコーは本当ならリバーブと呼ぶべきだけど、馴染みがないからエコーと呼んでいるのだろう。日本人のいい加減な英語センスはこうやって培われているのだ。

【カウベル】

『ホーリー・アンド・ブライト』はドラムも賑やかだ。曲は全体を通して8ビートで、タムやシンバルなどの装飾音（これを「おかず」と呼ぶことが敬ちゃんの解説により判明）が多く、敬ちゃんの手があっちこっち動き回って忙しそうだった。演奏が終わると、敬ちゃんが言った。「この曲ねえ、カウベルとトライアングルが鳴りよんよ。学校のカウベルを内山先生に借りるか交渉してみるけんね」

「カウベルってなに？」と僕が質問。

「コンコンって鳴るやつよ。金属の木魚みたいな音って言うんかなあ」

「金属の木魚？ 見た目も木魚なん？」

「ちやうよ。カウのベルっていうくらいやけん、牛の首輪にくっついてる鈴みたいなやつやん。形は銅鐸に似とる」

「銅鐸ってなんやつけ？」

「え、えつとお——」

敬ちゃんはちよつと難しい単語を出す。

「はに丸王子の頭じゃん」嫌いな音楽教師の名前が出て少々機嫌を悪くしていたヨシヒコが口を挟む。

「——ああ！ わかった！ 丸いブツブツがついとるやつや！」

「おおお、それぞれ」

「なに？ はに丸王子って」と今度は敬ちゃんが質問する。

「ええつ、知らんのか？ えつとなあ、はに丸王子はお馬のひんべえと一緒に——」

西遊記といい、同い歳でも性別が違ふところも違ふもんかと僕は思った。

「ほんで？ カウベルをどうやって鳴らすん？」

「ハイハットのスタンドにくっつけてもええし、別に1本スタンドを立ててそれにくっつけて

もええんよ。ちゃんとそういう風になつとるドラム用のやつがあるけん」

「へえー」ドラムって色々あつて楽しそうだな、と僕は思った。

そして僕の番が回ってきた。今度はさつきみたいに悠々とは弾けない。演奏も面倒だし、パネルの操作もある。

僕は敬ちゃんにカウントを頼む。

カッカッカッカッ

トゥルトウトウ――

前奏は右が「ポワワーン」の音で、左がピアノ。左手のピアノのフレーズが結構難しいうえに右手の速いフレーズとは全然リズムが違うから、つられて間違えないようにするのが大変だ。前奏がこの曲の中で一番難しい箇所だと思う。

Aメロはそのままの音色でいく。右手の「ペポペポ」はスタッカート気味に跳ねるように弾く。Bメロに入る瞬間に音色を切り替え、すぐに右手が「ふわーっ」を弾けるようにしなければならぬ。Bメロ後半の「君にだって見えるよ」の部分だけまた最初の「ポワワーン」を使い、「きらめくその星がー」の終わりの部分で「チャラララ」を一瞬だけ使う。そしてすかさずまた「ポワワーン」に戻ってサビに向かう。とまあ、とにかくこの曲はやるのがたくさんあるのだ。

演奏が終わるとヨシヒコと敬ちゃんの喝采を浴びる。

「すげえ、マイキーよくそんなに手が動くなあ」

「すごい城崎君」敬ちゃんは拍手つきだ。

たった2人でも、観客から褒められるのはとても嬉しい。僕は得意げに「まあもう」と言つて笑つて見せた。『ガンダーラ』の後に、暇そうだからという理由でヨシヒコの手伝いを命じられたのとはえらい違いだ。

その日は練習が終わったあと、3人でうどんを食べに行つた。

暑くてもうどんは食える。さすがに「釜あげ」よりは「冷やし」を食べたくなるが、暑いときに食べる熱いうどんは格別うまいのもよく知っている。僕は「冷やし大」、敬ちゃんは「冷やし小」を食べ、ヨシヒコは「ぶっかけ大」とおでんを2本。肉とタマゴのいつもの組み合わせだ。これだけ食べて3人で1000円払ってお釣りがくる。「うどんは家計の味方」とは母の言葉だ。恐るべし讃岐うどん。

【レコーディング】

次の水曜日。平尾の風邪も何とか治り、ちゃんと4人で練習できることになった。スタジオに現れた病み上がりの平尾は、白いマスクをしてちよつと怪しげな風貌だった。

「平尾、大丈夫か？」

「うん」と平尾は答えたが、マスクと鼻声のせいで別人のように変わってしまった。

「平尾、歌うか？」ヨシヒコが面白がって平尾をからかう。平尾は言い返す元気がないのか怒っているのか、首をぶるぶるつと振って無言で断る。

「実はな平尾、こないだの日曜日、ベース抜きで練習しようとしたんやけど全然できんかったんや。ほんでそれぞれのパートを一人ずつ弾いて発表会したん。おもしろかったで」

「発表会？」

「いや、ちゃうな。発表会やのうて、個人練習の見学会やな」

「ふうん」

あまりにも平尾が元気がないので、僕は「そやけん平尾もみんなの前で弾いてくれ」とは言えなかった。ヨシヒコは平尾をいじるのを諦めたらしく、レコーディングの準備を始めていた。

レコーディングというとえらく大層なもののように聞こえるが、何のことはない、ただの録音のことだ。しかもカセット録音。

数年前に登場した「MD」なるものが世界を席卷しているらしい、という噂は聞いていた。CD並みの音質で録音ができ、一発で頭出しができ、何度聴いても音質が劣化しないそうだし。しかしながら、その新製品は満濃町の巷にはまだ出現していない。音楽に慣れ親しんでいる一部の町民でさえその大半はいまだカセットテープに依存しており、CDへの移行を成し遂げた新人類はまだわずかだ。ロック・バンドという未知の領域に片足を突っ込んでいる僕たちでさえ、レコーディングにはカセットなのだ。CDを「シーデー」としか発音できない人々が「エムデー」をそう簡単に受け入れるわけがない。いつの時代も新しい土地を求めてやってきた新参加者が根付くには時間がかかるのだ。

今日の目的は、『ガンダーラ』のイントロのシンセのフレーズを決めるために、ヨシヒコのギターを録音することだ。録音する機械は、ヨシヒコが自宅から持ってきた大きなラジカセだ。接続は簡単で、ラジカセのマイク入力端子とミキサの出力端子をつなぐだけ。これでいつもスピーカーから出ているマイクやシンセの音を、ラジカセで録音することができる。

ヨシヒコは僕の前に置いてあるコーラス用のマイクをギターアンプの前にセットし、ギターの音を出しながらミキサーを操作して入力レベルを調整している。入力レベルは大きすぎてもダメだし小さすぎてもダメだ。大きすぎると音が歪み、小さいとノイズが乗って聴きにくくなる。ヨシヒコは自宅でもよく自分のギターを録音しているらしいから、録音については僕よりも詳しいはずだった。

セッティングが終わると、ヨシヒコはラジカセの録音ボタンを押し、ひとつ咳をした。そしていつもよりアンプから遠い場所に立ち、『ガンダーラ』のイントロを弾き始めた。もちろん歌はなし。みんなは黙ってその演奏を聴いている。ヨシヒコはイントロを半分弾いたところで演奏をやめ、ラジカセの停止ボタンを押してすぐに巻き戻す。テープがすぐにガチャツと音を立って止まる。続いて再生ボタンを押す。

音はラジカセの小さなスピーカーから出てくる。さっきのヨシヒコの咳もちゃんと録音されていて、そのあとすぐにギターのイントロが始まる。

「さすが、よく録れてるぜ」

音量は小さいが、ヨシヒコが弾いたギターの音そのままだ。

「なんしょん？」

カセットが止まると同時にそう言ったのは平尾だ。そういえば平尾に説明をしていなかった。僕がギターのイントロをシンセがサポートすることになったことを伝えると、平尾は「便利やねえシンセって」と、もごもごマスクを動かしながら喋った。

「マイキー、これでいけるか？ 今週の日曜日までにできるか？」

「おう、やってみる」

僕はそう言っただけで録音したばかりのテープを受け取った。その様子を見ていた敬ちゃんが言う。

「ねえねえ、それってさあ、みんなで合っつしょんのも全部録れるん？」

僕はヨシヒコの方を見る。

「できるぜ。ちようどいいから1回録ってみるか？」

「録りたい録りたい！」 敬ちゃんはなぜか嬉しそうだ。

僕はサンレコや他の雑誌に「スタジオ練習は録音すべし」との記事がよく載っていることを思い出す。細かい内容は忘れたけど、上達するためには自分の演奏を録音して聴くのが大事だというような内容だったことは何となく覚えている。実際に弾きながら聴いているのとテープに録ったものを聴くのでは全然違うらしいのだ。

「マイクはどうすん？」

「部屋の真ん中に1本立てればそれでオーケー」

「そんなにええん？」

「小細工はしねえ方がいいんだ」

「1曲ずつ？」

「2曲まとめて」

「ほんならいつもの順番で」

このように成り行きで決まったレコーディングが、そのわずか10分後に何とも恐ろしい結果を生むことになるのは、そのとき誰も知らなかった。

演奏が終わるとヨシヒコがテープを止め、すぐに巻き戻す。4人がラジカセの前に集まってくる。あまり近寄ると暑いので適度にお互いの距離をとって床に座り、扇風機をこちらに向ける。

テープ再生。ガヤガヤとしたスタジオの音が聞こえてくる。敬ちゃんがドラムをばらばらと叩く音。ヨシヒコの咳の音。シンセの音チェック。そういう音が全部録音されている。ヨシヒコが「じゃあいくぜ」と言う声に続いてカウントが入る。「カツ、カツ、カツ、カツ」

前奏。

――前奏？

――これ、前奏？

ちやう。

ちやうぞ。ガンダーラこんなとちやう。

下手や。めっちゃ下手や。

や、やばっ！ やばいやばいやばい！ めっちゃ下手やー！ めちゃくちややー！

カセットの中のヨシヒコがAメロを揚々と歌い出す。

そこーにゆーけばあー

ガチャッ！

僕は反射的にラジカセに手を伸ばし、叩くようにして停止ボタンを押す。臭いものには蓋をする。これって本能。そして誰も僕を咎めない。4人が顔を見合わせる。

「やばいな、これ」とヨシヒコ。

「やばい」と僕。

「下手やね」と敬ちゃん。

「どうしようもないじょんならんでこれ」と平尾。

意気投合。

それはチェスター・コパーポットが迎えたはじめての緊急事態だった。

しばらくの沈黙のあと、やはり最後まで聴いてみようということになった。

これは勇気ある行動だ。すべてを封印してしまうことも可能だった。テープを破棄し、スタジオから撤退し、バンドを解散し、楽器を手放し、一部の記憶を抹消し、何くわぬ顔でダンスパーティーに出る。そういう選択肢もあるにはあった。でも僕たちは勇気を出して再び再生ボタンを押した。

たった2曲なのに、その時間はものすごく長かった。とくに『ホーリー・アンド・ブライト』

はひどかった。とにかく楽器がバラバラで全然合っていない。誰がどのくらい悪いのかは僕にはわからない。でも間違いないと言えるのは、みんなそれなりにひどかった、ということだ。そして「これでは文化祭に出れん」と、みんなが思っていた。たったひとつの救いは、ヨシヒコの歌がそれほど悪くなかったことだ。むしろ「ようこんなんで歌^うとるなあ」とみんなが感心したほどだった。

2曲を聴き終わったあと、ヨシヒコだけが建設的な意見を言った。

「このラジカセが悪いんじゃないか？ ミキサーにつないでちゃんとスピーカーで聴いてみようぜ」

そうかもしれない、と僕も思った。ヨシヒコが立ち上がり、音声ケーブルを使ってラジカセとミキサーを接続した。

しかし結果は同じくNG。いいスピーカーで聴いたからといって、演奏がうまくなるわけではないことを僕たちは学習した。むしろそれぞれの演奏がはつきりと聴こえるせいで、悪いところが余計に目立ち、聞き苦しかった。

「ジーザス！」とヨシヒコは神に助けを求めたが、僕が「Help! I need somebody Help!」と助けを求めたのは兄だった。

その悪夢のレコーディングの日の夜、僕は神戸の兄に電話をした。

「Help me if you can I'm feeling down」と讃岐弁で懇願すると、兄は「なるほどなあ」と僕の話聞いてくれた。

兄の言うところによると、「それは当然や」ということだった。初心者が集まったバンドの初録音がじつと聴ける代物でないことは兄も体験済みだったし、さして驚くようなことではないという。僕は「完全な初心者とちゃうで」と言い訳したが、兄に言わせてみれば、楽器演奏の経験はあってもバンド経験がないとそれはただの素人なのだそうだ。

「どういうこと？」僕は説明を求める。

「バンドで一番大事なのは他のメンバーと合わせることや。バンドには指揮者はおらんしメトロノームもないから、みんなでテンポやリズムを作らなあかん。全員が勝手に弾いとったらめちゃくちゃになるんや。そうならへんためには、とにかく人の演奏を聴く余裕がないとあかん。ってことは、自分の演奏だけをなんぼ上手にやってもダメってことや。自分のパートを弾くやなくて、みんなの演奏に合わせるっちゅう意識やな」

なるほど。できるかできないかは別にして、僕にもわかる部分がある。兄の言葉がしつかりと関西弁に変わっているのにも驚いた。

「ほんならさあ、どなんしたらええと思う？」

「さあ——そのテープを聴かなわからへんけど、まずはベースとドラムが合^あうてるかどうかのポイントやな」

「なんで？」

「その2つはバンドの中で一番大事やからや。ベースとドラムのことをリズム隊っていうけど、とにかくそこがこけたら絶対うまいかへん。手始めにリズム隊の2人だけで合わせる練習とかしてみたらえんとちゃうか？ ドラムがメトロノームを聞きながらやるつてのもええし、ヴォーカルがおつてもええし」

「そういやこないだベースが休んでしもて、ベース抜きで練習したけどわややったわ」無茶苦茶

「そうやろ、ベースがおらんとバンドにならへんからな」

「ほんまやな」

そんな調子で、僕は兄からいくつかのアドバイスをもらった。

兄は今年のお盆には帰れないそうだが、文化祭の日には帰るようにすると伝えてくれた。兄が本番のステージを観に来ると思うと、それだけで緊張してしまう。

最後に僕はスタジオ録音のテープを送ることを約束して電話を切った。

【メトロノーム】

クラシック・ピアノで使うメトロノームの形は細長の等脚台形で、大体どれも同じような形をしている。振り子が振れるたびにコチコチと音がして、振り子についての錘の位置を変えることでテンポが変わる。

ピアノの練習で最後にメトロノームを使ったのはもう随分前だ。たぶん小学校の頃だと思う。練習が進んで曲全体を通してある程度弾けるようになったら、必ず先生が「じゃあ次はメトロノーム使って」と言ってメトロノームを動かす。僕はその練習方法が嫌いだった。テンポに合わせるのに必死になってしまって、思うように弾けなくなるからだ。それに曲の中にはリタルダンド（だんだん遅く）をはじめとする曲中での速度変化を指示する演奏記号もしばしば登場するから、始めから終わりまで一定のテンポで弾くというのはあまり現実的ではない。もちろん「一定のテンポで弾くこと」がどんな楽器演奏にも求められる基本技術なのはわかるが、テンポを強要されているように感じるあのコチコチという独特の音が、僕には生理的に受け入れ難かった。

しかし兄が言ったように、バンド練習でメトロノームを使うのは有効だろう。バンド演奏は、ピアノや他のクラシック音楽に比べればテンポが一定だ。曲の最後にスローダウンして終わることはあるけど、曲の真ん中でテンポが変わることはほとんどない。

兄は「ドラムがメトロノームを聞きながら」と言った。つまり全員が聞かなくてもいいということだ。考えてみれば、あれだけの大音量で演奏している中で全員がひとつのメトロノームの音を聞くのはほとんど不可能だ。メトロノームのクリック音をマイクで拾って、それをスピーカーから出すという方法を思いついたけど、その音量はとてつもなく大きくなければいけない。何しろすべての楽器の音に打ち勝たなければいけないのだから。

それではドラマーだけがメトロノームの音を聞くにはどうしたらいいか。それにはギター用のチューナーが活躍することになる。

【チューナー】

ギターとベースにはチューニングが欠かせない。厳密には、弦を1回弾くたびにチューニングはずれていく。そのずれはわずかだが、何曲も弾いているうちに聴いてわかるほど音程がずれる。持ち運べばずれ、弾けばずれる。いや、じつと置いてあっても時間が経てばチューニングはずれるらしい。それは弦楽器の宿命なのだ。

チューニングとは調律のことだから、ピアノの調律士のことをもしかしたらチューナーと言うのかもしれないが、ここでいうチューナーとは、チューニングに使う小型の機械のことだ。シンセには必要ないから僕は持っていないが、ヨシヒコと平尾は当然持っていて、練習のときには必ず何度か使う。

チューナーはひとつでギターとベースの両方に使えるものがほとんどだそう。見た目は小型のラジオか電気テスターに似ていて、薄いプラスチックの直方体。表のパネルに針や目盛りやボタンなどが並んでいる。

使い方は簡単だ。ギターとチューナーをシールドでつなぎ、チューナーの電源を入れる。弦を弾くと針が振れ、それが合わせたい音程にぴたり合っていればそれでOK。ずれていればギターのチューニングを調整する。それをすべての弦についてやればチューニング完了だ。

チューナーには針のあるアナログタイプと、針の代わりに小さいランプ(LED)がついたデジタルタイプがある。平尾が持っているのがアナログで、ヨシヒコが持っているのがデジタルだ。ヨシヒコのチューナーにはメトロノーム機能がついていて、「チツチツチツ」というクリック音が鳴るようになっていて。敬ちゃんが使うことになったのは、このチューナーのおまけ機能の電子メトロノームだ。小さいし、ヘッドフォンを接続できるから、狭い場所で使うにはもってこいだ。ピアノ用のメトロノームの音をマイクで拾って、それをミキサーにつないで、それをヘッドフォンで聞いて——というまどろっこしいことをしなくて済む。

日曜日のスタジオ。前回の練習でノックダウンされたせい、みんな元気がない。暑さもいよいよ本番に突入し、晴天続きの讃岐の空の青さが追い討ちをかけるように僕たちのモチベーションを下げる。ジュース代がバカにならないことを悟って、いつからか各自が家から麦茶の入った水筒を持ってくるようになったが、練習の途中で必ずなくなる。飲んでも飲んでも体のどこから染み出していくのだ。

「あつちいなああ」

ヨシヒコがうちわで顔を扇ぎながら悪態をつく。音が漏れるから扉も窓も閉めきっていて、扇風機が巻き起こすぬるい風が行き場をなくして淀む。せめてクーラーがあれば、とみんなが

思っているが、それは叶わぬ願いだ。少しでも涼しくなってから、と夕方を選んではいるが、日が出ている間は何時でも暑さは大して変わらないように思える。

その日、僕は練習が始まる前に、兄の言葉をみんなに伝えた。

「他の楽器と合わすのが大事なんやで」

「そうやんね」

「そりゃあそうだ」

もちろん反論はない。みんなわかっていることだ。僕は兄の提案した練習方法について説明する。ドラムとベースだけの練習。まずはそこから始めてみよう。

ヨシヒコが自分のチューナーにヘッドフォンをつなぎ、ドラムの椅子の足元に置く。敬ちゃんは腕の動きの邪魔にならないように、ヘッドフォンのケーブルを体の後ろに回す。

「なんか氣いつけることある？」平尾が質問する。

「キックとベースを合わす。それを意識せえって兄貴が言うとった」

「キックてなに？」

「バスドラのことなんやて。そっちのほうがかつこええけん、俺も使うことにした」

「マイキーマーハー」

「ええやろそんなくらい」

「わかった。キックを意識するんやな。ほんで？」

「そんだけ」

「ええー、そんなんでうまくいかなあ」

「まあとにかくやってみいて。いきなりできんでもええんやし」

何となく平尾は不安げだ。

「ほんなら『ガンダーラ』な。敬ちゃんカウントお願い」

カッ、カッ、カッ、カッ――

ベースとキックだけを聴くという初めての体験。シンセの音のイメージが重なり合い、僕の頭の中では完全なバンド演奏ができあがっているが、実際に鳴っているのはたった2つの楽器の音だ。音が足りないという感触はもちろんあるが、なぜか安心して聴ける音。浮ついていない、落ち着いた響き。大音量なのに聴きながら寝れるような気のする重低音。みぞおちのあたりにグツとくるズン、ズンという音圧。

じっと集中して聴いているうちに、Aメロの終わりあたりで気づいたことがあった。それはキックが鳴るときには、ほとんど例外なく一緒にベースが鳴っていることだ。ベースのほうが音数は多いからベースだけが鳴っているところは多いけど、キックのあるところでは必ずと言っていいほどベースが鳴る。サビになってリズムが8ビートに変わると同時に、ベースの音数

が倍以上増える。それでもベースはちゃんとキックに合わせて鳴っている。

【シンコペーション】

演奏が終了すると、ヨシヒコが真っ先に言った。

「平尾、スコアもう覚えてたろ」

「いや——まだちよつと」

「スコア見てるからずれるんじゃないかねえか？　もう見なくても指が覚えてると思うぜ」

「そうかなあ」

平尾は自信がなさそうだ。

「敬ちゃんどうやった？」と僕は聞いてみる。

「メトロノームがあるけん楽やった。テンポの心配せんでええけん」

「なあ平尾、平尾はいつも誰の演奏を聴つきよる？」

「えつと——歌かなあ」

「ヴォーカル？」

「うん」

「ドラムは聴つきよらんの？」

「さあ、わからんけど、あんまり聴つきよらんかったなあ。でも今は聴いたで。それしかないけんな。ほなけど、いつもより弾きやすかった気もするなあ」

「ねえねえ平尾君」と敬ちゃん。「小節の頭は合うとんやけどね、Bメロのシンコペーションのところがバラバラな気がする」

「シンコペーションってなに？」

「えつとね、例えばBメロのね——」

そう言つて敬ちゃんはリズムをひとつ叩く。

ズン、¹チャズ²——³チャ⁴

「このリズム。これがシンコペーション。3拍目の少し前に2個目のバスドラが入って、3拍目になんも音がないやろ。ズン、チャ、ズン、チャ、っていうストレートな4ビートをちよつと前倒しにした感じ。シンコペーションにするとメロディーが伸びた感じっていうか、スピード感よく次につながるっていうか、なんかようわからんけどええ感じになるんよ」

「ええと、ちよつと待ってや。Bメロやろ、弾いてみるけん」平尾はそう言つてBメロのベースを弾き始めた。

ボ——、ボ————ン

「これ？」

「そうそう。まさにシンコペーションやねえ」

「これが合うとらんの？」

「うん、ちよつとね、決まらんっていうか。その3拍目の前がね」

「あ、2拍目のウラっていうんやろ、これ」

「そうそう！　よう知つとるねえ」

「ビデオで何回も聞いたで。ウラが大事やとかウラを感じろとか。ウラばかりや」

「うん、まさにそのこと。そのウラがきっちり合うたら気持ちえんよ」

「——わかった。やってみる。もう1回な」

「Bメロだけやるか？」

「そうやね」

カツ、カツ、カツ、カツ——

僕とヨシヒコが口を挟む余地がないくらい、2人が熱心に話をしていた。さすが吹奏楽部。理論的だから話に説得力がある。

そして問題のシンコペーション。さつきと違って音がぴたり合っている。敬ちゃんの指摘は的確だった。平尾が意識しすぎてボリュームが大きくなっている気もしたけど、それが逆がいい感じだ。合わせてるっていう気持ち伝わってくる。

「おお、いいじゃん」

「ほんまに？」と平尾。

「ええよええよ、さつきより全然ええわ」敬ちゃんが嬉しそうだ。「でもそれはBメロだけやけんね。Aメロとサビは普通に3拍目ジャストでええんよ」

「うん、わかつとる。3拍目オモテやろ」

「そうそう」

「ああ——なるほどね、なんかわかった気がするわ」

「Bメロだけ他とちゃうけん、迷うとったんかもしれんねえ」

「そうかもしれん」と平尾が納得した顔つきで言う。「ほんならもう1回、最初からやってみようよ」

「ええよ、いくで」

その演奏は聴いていてとても気持ちよかった。キックとベースが呼吸を合わせているみたいと同時に鳴り、他のところではベースが伸び伸びと動く。気づくと平尾はスコアを見ずに敬ちゃんの方を見て弾いている。要所要所で2人が確認しあうように目を合わせ、「せえのっ！」と

いう感じで次の音を待ち構える。バンドの中で一番低音の部分を担当するバスドラムとベース。僕はその2つの楽器の重要さを肌で感じていた。

その日の練習の終わりには、みんなの表情がすかつとしていた。今までで一番練習らしい練習だったと言えると思う。

楽器の片付けが終わったところで平尾がこんなことを言い出した。

「チェスター・コパーポットって、長いよね」

「あ、私も思ってた」と敬ちゃんがすぐさま反応し、バンド名をどう略したらいいかという話し合いムードに変わる。

「チェスコ」

「ジャスコみたいや」

「チェコパー」

「頭悪いみたいや」

「チェコ」

「短くしすぎや」

「頭文字を取ってCC」

「CCレモン？」

「いや、CCガールズ？」

「チコポン」

「は？」

こういう会話をしているときに一番勢いがある。敬ちゃんは参加しないけど、横でずっと笑っている。「無理に略さんでもええやん」と名付け親の僕ははじめから思っていたが、どうも言い出しにくい雰囲気だった。しまいにはヨシヒコが「バンド名変えるか？」なんていうことを言い出す始末。僕は断固反対するが、「曲がゴダイゴやけん、ゴダイゴズとかでもええよねえ」と平尾がいい加減なことを言い始め、ヨシヒコが調子に乗る。

『『筋斗雲バンド』とか、どうだ？』

「ほんなら『三蔵法師御一行様バンド』は？」

「おおっ！ 平尾おもしれえっ！」

『『シルクロード』とか『東方見聞録』とか『チーム・ブツダ』とか――』

その平尾のネーミングがツボにはまったらしく、ヨシヒコがゲラゲラ笑いながら床に倒れてのたうち回る。

「チーム・ブツダって！ すげえっ！ すげえっ！」

「ほんならこれは？ 『ルート天竺』」

「ギャハハハハハ！」

「アホちゃうか」僕は畳の上で転がっているヨシヒコを冷たい目で見ながらも、平尾の頭の回

転の速さには脱帽だった。

一九九五・ハヤシ(礼) あいさす

僕の両親は、一切の宗教行事と一切の伝統行事とほとんどの文化的行事に興味を示さない。城崎家には豆まきもないし、鯉のぼりもないし、七夕もない。サンタクロースは6年ほど前までは来てくれていたが、クリスマスツリーを我が家で見たことは一度もない。だからお盆だからといって特別に何もしない。盆踊りもしないし精霊流しもしないし墓参りもしない。ここは讃岐だから、もちろん阿波踊りなんてしない。そんなわけで、僕は昔からお盆というものが何のためにあつて、みんなどうしてこの時期だけは仕事を休むのかがわからなかった。だから、「お盆やけん練習は休み」と3人に言われたとき、僕はちよつと驚いた。

「マイキーんとこ、墓参りせんのか？」

「せんよ。墓なんかどこにあるんか知らんし」

「ほんまに？ ええなあ、楽で。俺、お盆嫌いや」

そう言ったのは平尾だ。僕が「うちには仏壇もないで」と言うと、目を丸くして驚いていた。

平尾は「三蔵法師におつかれるで」と冗談を言ったが、そう言えば平尾はどっちかと言うとカッパの沙悟浄に似ているなとふと思った。

何もすることがなくて家で退屈していると、タイミングよく兄から電話がかかってきた。おととい送ったテープが届いたのだ。

この前の練習の終わりに、僕たちは果敢にももう一度レコーディングに挑戦した。『ホーリー・アンド・ブライト』はまだまだ悲惨だったけど、『ガンダーラ』はかなりよくなった。ヨシヒコが「音が締まった」という表現を使っていたけど、その通りだと思う。それは何を隠そうベースとドラムの意識改革のおかげであり、それを助言した兄のおかげだった。

兄は開口一番に言った。

「思たよりええやん。これだけ弾けてたら十分やろ」

「ほんまに！　ほんまに！」僕は電話口で大声で叫んだ。

『ホーリー・アンド・ブライト』はまだもうちよつとやれると思うけど、テンポが速いからごまかしが効くし、大丈夫やと思うで。それにしても懐かしい曲選んだなあ、『西遊記』めっちゃ思い出すわ」

「ほんまはミスチルやる予定やったんやけど、他にやるバンドがあるけんやめたん」

「ミスチルか。そらやめて正解やぞ、結構難しいから」

「ほんまに？」

「どうせ『アトミックハート』をやるんやろ」

「うん」

「たぶんきつついことになんて」

「そなん難しいん？」

「簡単そうに見えて意外にな。そもそもシンセとギターが足りんやろ」

「うん」

「ほんならやめて正解や」

兄に言われると、本当にそんな気がしてくる。どう考えてもミスチルより簡単なゴダイゴにこれだけ手こずっているのだから、もしあのままミスチルで進めていたらどうなったか。考えただけでもぞつとする。

兄は電話の最後に「ベース初心者って言うてたやんな。にしては結構うまいこと弾いとる」と平尾のことを褒めた。

「めっちゃや真面目な奴とちやうか？」

「うん。めっちゃや真面目」

「ベースにはそれが一番やからな。ええベース見つけたな」

なぜか僕が褒められたみたいな気がして嬉しかった。

電話を切ると、僕は誰もいない家の中でミスチルのCDを大音量で鳴らしながら大声で歌った。爽快な気分だった。

次の練習日。『ガンダーラ』のイントロでギターとシンセがうまく合うかどうかを確認する作業にはじめの1時間を使った。僕はヨシヒコのギターだけを録音したテープを家で何度も聴いて、ピアノを弾きながら自分のパートを決めてきた。とは言っても、もともとギターが4本あるところを2人でやるわけだから、まったく同じようにはいかない。一番よく聞こえる音を優先して弾くのが大前提で、何よりも「それっぽく聞こえるかどうか」が最大のポイントだ。

楽譜というのはそもそもいい加減なものだ。そのことを僕はよくわかっていて。ヒットソングを集めたピアノ用スコアなんて、譜面に書いてある通りに弾いても大抵ろくな演奏にならない。色々な音が鳴っている原曲を無理やりピアノひとつで弾こうというのだから、無理があるのは当たり前だ。それにしても、ピアノ譜のまま弾くとなぜか格好が悪い。肝心な音が抜けていたり、余計な音が入っていたり、リズムが間違っていたり、やたらと弾きにくかったり。難易度の調整に苦心しているのもわかるけど、ちよつと弾いてすぐにやめたくなくなるようなセンスの悪いスコアが多すぎる。

その点、バンドスコアは本物の演奏にかなり忠実だ。僕はボツになったミスチルのバンドスコアをCDと聴き比べながらじっくりと眺めてみたけど、どの曲もとても細かく、そして正確に原曲を再現している。便利を追求したせいでダメになるピアノ譜よりは、細かくて見にくくても、忠実なバンドスコアの方が僕は好きだ。

しかしゴダイゴの曲にはバンドスコアがない。あるのはコード進行がヒントになるピアノ譜

だけ。そのヒントとCDを元にして、全パートの演奏を引き出さなければならぬ。まるで謎解きのような作業。頼りになるのは自分の耳だけなのだ。

スタジオでの作業は難航した。最初のうちは、僕が「これでいこう」と決めてきたピアノのフレーズがヨシヒコのギターとうまく噛み合わなかった。ベースは必要だから平尾には弾いてもらって、敬ちゃんにはドラムを叩かずに3人の演奏を聴いてもらっていた。

敬ちゃんは遠慮なく厳しい意見を言う。

「音がまだ薄いと思う」「もつとふわーっと広い感じがするで」「ギターとシンセが合うとらん」「音がかぶつとる。もったいない」

僕はヨシヒコのギターのフレーズより下の音程を弾き、ハーモニーを作るような演奏をする。シンセは両手を使えるから、音を増やそうと思えばまだまだ増やせる。でもあんまり不用意にやると、音がぐちゃぐちゃになってせつかくのギターの音をかき消してしまう。もちろんベースはこれ以上増やすことができない。

何度か試したところで、敬ちゃんがこんな提案をした。

「宗山君さあ、上のメロディ弾かんと、ジャーンってコード弾きたらどう？　ほんで、城崎君が上のメロディを両手で弾けるだけ弾くん」

【ストローク】

敬ちゃんの言った「ジャーンってコード弾き」することをストロークと言う。正確には「ギターのストローク奏法」だ。ストロークは、最も特徴的なギターサウンドを生み出す奏法だと言っているだろう。ギターの6本の弦を上から下へ向けてストローク（ダウン・ストローク）すると、太い弦から細い弦へ向けて順番に音が鳴る。音程でいえば低い方から高いほうだ。逆に、弦を下から上へ向けてストローク（アップ・ストローク）すると、音は高いほうから低いほうへ下りるように鳴る。つまり、左手がまったく同じポジションで弦を押さええていても、右手の動かし方で音が違って聴こえるのだ。ピアノでいうと「ドミソシ」と弾くのと「シソミド」と弾くのでは、鳴っている音は違っても聞こえ方は全然違う。それと同じことだ。

その違いは、とくにストロークが遅い場合に顕著だ。音がわずかにずれて聞こえ、まさに「ジャーン」と鳴るのがよくわかる。いくらシンセがギターの音を人工的に模倣しても、この音の鳴り方はなかなか真似できない。逆に、単音でばらばらと鳴っているギターの音は、ピアノを弾くのと同じ要領でシンセのギター音色を弾けば、ある程度ギターっぽく聞こえるのだ。

そのとき僕がやっていたのは、それらしい音でそれらしくギターのメロディをサポートする、という演奏だった。敬ちゃんはそれをやめて、ギターはストローク、シンセがメインのギターのフレーズを弾いてはどうかと言ったのだ。

「なるほどねえ」僕はすぐにその案に乗った。どうせやるならシンセは徹底的にギターのふり

をすればいい。そういう思い切った作戦をとるというわけだ。

でもヨシヒコはあまり納得していないみたいだった。「せっかく練習したのに」と言わんばかりの表情。まあ無理もないだろう。でも僕と敬ちゃんがしつこく「まあやってみようや」と言い続けると、最後には諦めたらしく、コード弾きの練習を始めた。コード進行はわかっているから、あつという間にギターパートの路線変更が完了。

「さ、やってみよ」

「カウントいきまーす」

結果は良好だった。敬ちゃんが「うわあ、絶対この方がええよ。本物っぽい！」と絶賛するくらい良かった。乗り気でなかったヨシヒコも良さがわかったのだろう、何も文句は言わなかった。僕はヨシヒコの見せ場を奪ったようであつと気分がよかった。「ギターに負けてたまるか」というのは僕の密かなスローガンなのだ。

【合宿】

その日、敬ちゃんが用事があるからと言って先に帰り、残った3人で片付けをしているところでヨシヒコが言った。

「なあ、最後の日に合宿やろうぜ」

「どこでやるん？」

「ここに決まってんだろ」

「スタジオ合宿ってこと？」

「そういうこと」

僕はすぐに「敬ちゃんは泊まるんは無理ちゃうか？」と現実的な意見を言ったが、ヨシヒコは「それはしょうがねえな」と意に介さない。

「そんなん全員揃わんかったら意味ないんとちゃうん？」と言ったのは平尾。

「いいんだよ、3人いれば」

「ほんでもそれやったら――」

どうやらヨシヒコはスタジオで夜を過ごす、というのを体験しただけみたいだった。それならそうと早く言えば反対なんかしなかったのに、合宿なんて大袈裟な言葉を使うから話がややこしくなる。

「夜のスタジオか。ええなあそれ」と僕は言う。平尾も「楽しそうや」と同調する。ヨシヒコはどうして僕と平尾が急に乗り気になったのかよくわからないようだった。

話はすぐにまとまった。次の日に敬ちゃんに連絡すると、「私は無理やけど、できるだけ遅くまでおれるように親に頼んでみるわ」という予想通りの返事が返ってきた。

日程は8月30日水曜日からの1泊2日。近所のスタジオ泊。合宿と呼べるかどうか、甚だ疑問ではある。しかも合宿とは言っても、一晚中練習するわけではない。すぐ隣に家がないとはいえ、夜8時くらいが音を出せる限界だ。それでもこれはすでに決定事項だった。

こうして僕たちは、夏休みの練習の締めくくりとして、最終日にスタジオ合宿をすることになった。

合宿当日は朝から天気が悪かった。雨は降らなかったけど、いつ降ってもよさそうな空模様だった。

集合は午前11時。ひと練習して昼ごはんを食べ、それからまた練習。休憩を挟んでまた練習。夜になってもまた練習。そういう過密スケジュールだった。「合宿なんだからそのくらいやって当然」と言っただけで聞かなかったのはヨシヒコだが、偉そうに言いながら真っ先に音上げるのはヨシヒコだろうと僕は予想していた。

ほぼ時間通りに全員が集合。午前中から楽器を弾いたことなんてなかったから、ちよつと違和感がある。平尾はどう見ても寝起きのままで、頭のてっぺんがカッパみたいにぺちゃんこで、メイクなしで沙悟浄に見えた。とっさに本番の衣装を『西遊記』に見立てて用意してはどうかというアイデアが浮かんだけど、冷静に考えてみたら、敬ちゃんや三蔵法師、ヨシヒコが孫悟空なのはほぼ決定だ。てことは、残るは――俺、ブタ？　ということでのアイデアは僕の心の中だけに留めておくことにした。

午前中は、案の定たいした練習にならなかった。気合が入ってないというか、だるいノリとというか、やる気がないというか、眠たい演奏という言葉があるかどうかは知らないけど、例えるならそんな感じだった。

【竹の宮うどん】

練習に身が入らないせいか、1時を待たずして昼食タイム。僕たちは近所にあるうどん屋へ向かう。

「竹の宮うどん」という名前のそのうどん屋は、この辺りではちよつと名の知れたうどん屋だ。讃岐において、「流行るうどん屋」というのは大きく分けて2つのタイプがある。ひとつは地元の讃岐っ子が手放しでうまいと認めたうどん屋で、もうひとつは観光客が本や雑誌の評判をもとに集まるうどん屋だ。

大雑把に言って、両者は相容れない。観光客のよく来るうどん屋には地元民はあまり行かない。そういう店は曜日や時間帯によつてものすごく混み、長い間待たされることがあるからだ。讃岐っ子にとって、うどんはファーストフードだ。早く出てきて、早く食べて、早く会計ができて、早く店を出られる店ほど評価が高い。もちろん安ければ言うことはない。逆に、地元民だけが行くようなうどん屋にはあまり観光客が来ない。地元民が通ううどん屋は総じて店の中

が汚く、何となく入りにくい店構えをしているからだ。

ただし、その2タイプのうどん屋の話は単なる客層の問題であり、どちらがうまいうどんを出すかということではない。あえて言えば、値段の違いはあるだろう。当然観光客の行くうどん屋は平均的に値段が高めだ。

ちなみに観光客がよく行くうどん屋にはいくつかの特徴がある。まずひとつは広い駐車場があることだ。観光客の多くは、バスに乗って団体でやってくる。だからバスが停まれるような広い駐車場がないと観光客相手には流行らないのだ。それから、団体で来るということは店が広くなければいけない。店内にテーブルが4つしかないような狭いうどん屋は都合が悪い。それから、従業員に若い女の子がいる。その理由は僕にはわからない。忙しいから雇っているだけなのか、給料が安くてすむからなのか、客引きのためなのか、そのところはよくわからない。でも観光客の来るうどん屋には必ず若い女の子がいる。どうしてなんだろう？

さて、竹の宮うどんは明らかに観光客が寄り付くタイプのうどん屋だ。田んぼを1反近く埋めて作った立派な駐車場があるし（バス専用のスペースでもある）、テーブルの数も多く、20人近く座れる座敷がある。そして若い女の子が働いている。典型的とはまさにこのことだ。

実は僕たちは4人とも竹の宮うどんに入ったことがなかった。店が大きくなったとか、駐車場が広くなったとか、雑誌に紹介されたとか、そういう噂はよく耳にしたが、わざわざ食べに行こうという気にならなかったのだ。でも今日は「せっかく近くにおるんやけん、ちよつと寄ってみようか」という雰囲気になり、みんなで行くことになった。

平日だというのに店は混んでいた。座敷にはいかにもツアー客らしい出で立ちをした年寄りがわんさか座っていた。テーブル席も満席。それを見た瞬間、僕は踵を返して店を出ようとしたが、腹も減っていたし、まあちよつとくらい待つのもいいだろうという話になって踏み留まった。

カウンターのところに大きなメニューが貼ってあった。しょうゆ小200円、かけ小230円、湯だめ小230円、きつね小340円、てんぷらひとつ100円。僕は久しぶりにきつねうどんを食べたくなったので、きつね大460円を頼むことにする。値段はまあまあ良心的だ。厨房では4人のおばさんと大将らしきおじさんが働いていて、レジのところに若い女の子が立っている。女の子は「休め」の姿勢で窓の外を見ている。

厨房からは絶え間なく湯気が上がり、大将がバチバチとうどんを打つ音が響く。店内にいる約40人の人間がうどんをすする音が交替で聞こえてくる。あっちでズズッ、こっちでズズッ。5分くらい待ったところで店の奥のテーブルの4人家族が立ち上がり、会計担当のお母さんがレジのところにやってくる。

「よっし！ なん食べたか言うてつか！」
下さい

そう叫んだのはうどんを打っていた大将だ。うどんを打ち続けているので、お母さんの方は全然見ない。

「ええっと」お母さんはテーブルの方を振り返って、何を食べたかを思い出している。「きつねの小が2つと、湯だめがひとつと――」

「湯だめは大！ 小！」

「ええと――大です」

「それから！」

「し、しょうゆです」

「大！ 小！」

「だ、っだ、大」

「てんぷら！」

「え？」

「てんぷら食べたん！」

「いいえっ！ 食べてませんっ！」

「いちさんさんまる！ ありがとう！」

「1330円になります」

「はい――」

財布を握り締めているお母さんは、完全に大将の喋りに圧倒されている。

「びびってんじゃねえか？」とヨシヒコが呟く。確かにそんな気もする。

最後に金額を言ったのはレジの若い女の子だ。大将が瞬時に計算した金額を客に伝える、それが彼女の役目なのだ。

「ハハッ、いちさんさんまるって」と平尾が下を向いてウケている。

「これがこの店の売りなんか？」

「変なの」と敬ちゃん。

その4人家族が追われるようにして店を出ると、今度は座敷の御一行様がぞろぞろと立ち上がる。次はどうなるんや？ とつい期待してしまう。

「よっし！ なん食べたか言うてつか！」とまた大将。

『『よっし！』じゃねえつつうの』とヨシヒコが一言。

団体客のリーダーらしき人が代表で答える。手に小さな紙を持っていて、それを読み上げる。
なかなか準備がいい。

「しょうゆ小3つ、しょうゆ大3つ、かけ大5つ、湯だめ大1つ、きつね小3つ、てんぷらが18です」

「えー、えーつとつと――ろくよんにーまる！ ありがとう！」

「6420円です」

チャリーン！ と音が聞こえてきそうな勢いと金額だ。僕はうどん屋で1万円を出している客を今まで見たことがなかった。

今度は僕たちが食べる番だ。平尾が特大を頼み、残りの3人は大。僕はてんぷらを1つ。てんぷらはセルフなので自分で勝手に取りに行く。

混んでいる割には注文したうどんが出てくるのは早かった。味はどうかというと、「まあまあ」だ。もう一度食べに来ようと思うような味ではないし、二度と来たくないという味でもない。まあそういうことだ。

うどんの味に厳しかったのは意外にもヨシヒコだった。食べ終わるなり「まずい」と一言。まずいと言った割には全部食べていた。

食べるのが一番早かった平尾は「あー、お腹おきたー」と椅子にふんぞり返っていたから、そこそこ満足していたのだろう。讃岐では「うどんは喉で噛め」とよく言うが、本当にうどんを味わうには歯で噛まずに飲み込むようにして食べるという意味だ。それは早くたくさん食べる方法でもあるのだが、どうやら平尾もその極意を極めつつあるようだった。

讃岐っ子はうどんの味に厳しいと思われる。博多や札幌のラーメン通のように。でも実際はそうではない。讃岐で食べるうどんに、そう大きなハズレはないからだ。まずいうどん屋があったとしてもすぐに潰れるから、逆にあまりお目にかからないのだ。だから讃岐っ子はうどんとあればいつでもどこでも何でも食べる。セルフの安いうどん屋でも食べるし、リッチな料亭まがいのうどん屋でも食べる。自分の家でも食べるし、他人の家でも食べる。朝でも昼でも夜でも食べる。ぶっかけも湯だめも釜上げもきつねもてんぷらも冷やしもみんな食べる。だから、こだわりの店にしか行かないラーメン通と同じだと思うと、それは大きな間違いだ。何でもいいわけだ、うどんなら。

ただし、讃岐っ子は讃岐以外の場所ですうどんを食べない。果敢に挑戦して打ち破れた同志の話は耳にタコができるほど聞いて育っているからだ。

「他所ではうどんを食うたらいかん」

それは讃岐っ子の誇りでもあるのだ。

【ドラマの練習】

満腹でスタジオに戻ると、まずは休憩タイム。スタジオの真ん中にあぐらをかいて座り、敬ちゃんが持ってきた溶けかけのチョコレートとポテトチップスをかじりながら水筒の麦茶を飲む。少し天気がよくなってきたせいか、部屋の中は午前中よりも蒸し暑い。縁側から庭へ出るガラス戸は開けているが、高い垣根のせいか風はほとんど入ってこない。網戸の網の隙間から高温多湿な空気がじわっと部屋の中に染み込んでくるのが見えるような気さえする。

「やる気せんねえ」と平尾がぼそと呟く。誰も返事をしない。

近くでスズメがさえずっている。ここからは見えないけど、たぶん家の前の電線の上だ。少し耳を澄ませば、どこかでツクツクボウシが固まって鳴いているのも聞こえる。近くの神社か、

田んぼを2枚はさんだ隣家の柿の木か。

「眠いなあ」と思ったところで、誰かがカチャカチャと音を立て始めた。座ったまま振り向くと、平尾がドラムの椅子の高さを調整していた。

「ねえねえ敬ちゃん、ドラム教えて」

「ええよ」

平尾は2本のスティックを持って、嬉しそうに敬ちゃんの指導を受けている。「——そう、右腕が上でハイハットね。ほんで左足はとりあえずペダルを踏んどく。右足はべたつとつけずに、かかとを浮かした方がやりやすいで」

「こう？」

「そーそー。最初はキックとスネアだけでやってみてん」

「えっと——」

ズン、チャ、ズ、ズカチャツ！

「あれっ」

「難しいやろ」

「ほんまやなあ。敬ちゃんようこんな叩けるなあ」

「そら長いことやとるけんねえ」

「よっしゃ、もう1回な。せえのっ」

ズン、チャ、ズツ——チツ

「くそー」

「はじめから全部やるけんいかんのよ。最初はキックだけやって、何小節かやってからスネア入れて、最後にハイハットは付け加えるって感じやね」

「なるほどお」

はじめは全然様になっていなかったけど、次第に音の粒が揃ってくる。何度か繰り返しているうちに平尾は簡単な4ビートを叩けるようになった。

「ほんならね、次は8ビート。ハイハットを倍にするん」

「よし」

コツを掴んだらしく、8ビートはすぐできるようになった。ただし、リズムは無茶苦茶で、聞いている方が酔っ払いそうだった。いかにも自信なさそうな叩き方が、ひとつひとつの音のバランスを悪くしている感じがする。

「むつかしいなあ、ドラムって。両手両足使うんやもんなあ」平尾はしばらくしてようやく満足したらしく、ドラムを叩くのをやめた。「敬ちゃん、ドラムの練習って家でどうやってやるん？まさかドラムセットなんかないやんね」

「そらないよ、欲しいけど。家で練習するときは、その辺にあるもんを集めてきて並べて、スティックで叩くん」

「その辺にあるもんって？」

「枕とか座布団とかダンボール箱とか」

「え、そんなにええん」

「うん。椅子に座ってそれを回りにうまいこと並べて——あ、高さを調整するんが一番めんど
いんやけどね、ほんで叩くん」

「ふうん」

「練習用のパッドとかドラムセットとかもあるんやけどね、私は学校で叩けるけんあんまり家
ではやらのよ」

意外と貧乏くさい自宅練習。スタジオでは一番場所を取って目立つドラムのなのに、裏では
そんな地味なことが行われていたとは。

「さーて、ほんならそろそろ練習しようや」と勝手に一人でドラムを叩き始めた平尾が偉そう
なことを言った。寝転がったままポテトチップスを食べ続けていたヨシヒコがむくつと立ち上
がった。袋が空になったみたいだ。

「よしっ、やるか」僕も自分で気合を入れてみる。シンセの電源を入れ、ミキサーの電源を入
れる。「なあヨシヒコ、今日はコーラスやってみるけん」

「ようし、じゃあボリューム合わせとくか。マイキー、そっちで喋ってみてくれ」

僕はシンセのところに戻り、マイクが自分の口のあたりにくるように調整する。

「あ、あ、あ」

「あ、あ、あ——こんなもんか？」ヨシヒコはマイクを持って喋りながらミキサーのフェーダ
ーをいじっている。2人の声の大きさのバランスを取っているのだ。もちろんヨシヒコの方が
少し大きいくらいがいいだろう。

「そんなくらいでえんとちやうかな」

そしてようやく午後の練習が始まった。

【コーラス】

休憩になったときには5時を過ぎていた。何十回と曲を聴きながらひたすらコーラスの練習
をしていたおかげで、ヨシヒコとの「ハモリ」もうまくいった。「ハモる」の原形は「ハーモニ
ーを作る」、つまり「コーラスをする」ということだ。

コーラスと一口に言っても色々ある。メイン・ヴォーカルの後ろで活躍するコーラスはバッ
クグラウンド・コーラスとも呼ばれ、メインの歌とハーモニーを作るような旋律を歌う。この
コーラスがあることでメロディが強調され、またドラマチックに聴こえる。また、メイン・ヴ
ォーカルと重なるように歌うのではなく、まったく別の旋律を歌ったり、合いの手を入れる形
で参加する形のコーラスもある。ゴダイゴの2曲の場合、『ガンダーラ』のサビの部分で複数の
女性が歌っているのが前者で、『ホーリー・アンド・ブライト』のBメロで「闇を照らしている
よ」のすぐ後に「Shining holy and bright——」と歌っているのが後者の合いの手コーラスだ。

サビの部分でもメインヴォーカルの背後にずっとコーラスがあるが、何と歌っているのかは聴き取れないので僕は適当な英語を歌っている。ちなみにカタカナではこうだ。

オースーファー、スタラビンダー、アーアー、ホリエンブライー

もちろん意味は、わからない。

コーラスといえばコーラス部Ⅱ合唱部を浮かべる人も多いだろう。その場合のコーラスには、誰がメインで誰がサポートという概念はない。ソプラノもアルトもテナーもバスも、みんな平等にコーラスだ。僕は合唱についてはよく知らないけど、もしかしたらその中には序列があるのかもしれない。「ベースはギターのしもべだ」と言ったヨシヒコのように、何となく自分のほうが主役だと思っているパートがあるのかもしれない。例えばアルトよりソプラノのほうが偉い、とか。

【ビール】

まだ外は明るかったけど、太陽の色が変わり始めていた。網戸の向こうに見える垣根の稜線がぼんやり赤く光っている。

僕はジュースを買いに外に出た。いつものようにみんなからリクエストを聞き、お金を預かる。もちろん僕はナタデココだ。平尾もはじめてナタデココのジュースを飲んだときに気に入ったらしく、それ以来いつも飲んでいる。

今日の晩御飯のメニューは寿司だ。合宿といえばカレーだけど、平尾の親から「ガスは使うたらいかん」と言われているのでしょうがない。庭で飯盒炊爨をやるわけにもいかないし、そうなるらとピザか寿司の出前を取るしかない。そういえば、うどんの出前というものは僕が知る限り讃岐には存在しない。ゆでたてのうどんにこだわっているからというのかもしれないが、うどん玉とだしを買ってくれば、家でも店と同じ味のうどんがすぐに作れるという事情のせいもある。

ピザと寿司の多数決は、4対0で寿司の勝ちだった。町役場の近くにできた新しい寿司屋の寿司を食べてみたいとみんなが思っていたようだ。新しい寿司といってもただのチェーン店だ。でも満濃町にそういう大手チェーン店が進出したこと自体がニュースであり、試さないわけにはいかなかった。現在、満濃町には24時間営業のコンビニは1軒もない。

ジュースを飲んでひと休みして、練習を再開。8時に寿司が届くことになっていたから、練習はそれまでということになった。

さすがにみんな疲れてきたみたいで、曲と曲の間が妙に長い。1曲が終わるたびにひと息ついて、回復したらまた1曲、という具合だ。ヨシヒコの声がかれ始めていて、歌が聞こえないところがあるときどきある。声が小さくなったのかもしれないし、歌うのをさぼっていたのかもしれない。

れない。やけん無茶やって言うたのに。

練習は8時前で終了。晩御飯を食べると敬ちゃんが帰ってしまうから、一応ここで合宿は終わりだ。「お疲れさまでしたー」とヨシヒコが音頭を取り、みんなも「おつかれさまー」と口を揃える。ちよつと大人になったような気のする台詞だ。

満濃町の夜は暗い。店はたいてい8時に閉まるし、みんな早寝早起きだ。街灯も最小限しかないし、オフィスビルなんてひとつもない。だから天気の良い日は星がよく見える。ガラス戸を開けると、網戸に小さな虫がたくさんくっついていた。あちこちでカエルが鳴いているのが聞こえる。

家の前に寿司屋のバイクが止まった。僕は玄関を出て、寿司を受け取りに行く。ずつしりと重い盆ではなく、持つとビラビラと音のするプラスチックの大きな容器がひとつと、緑茶のペットボトルがひとつ。代金は僕の母親が払ってくれていたみたいだ。

「うちのおかんの差し入れやで」

「まじでえ、やったあ」

「ええの？」

僕が「かまなかまん」と言ってスタジオの真ん中で寿司を広げようとする、敬ちゃんが丸いテーブルを持ってきたのでその上に載せる。割り箸を配り、台所からコップを借りてきて、即「いただきます」。寿司は4つずつちゃんとあるから、もめることはない。誰も好き嫌いを言わないから全部均等に行き渡った。

寿司を頬張りながら、楽器に囲まれているっていうのは何て幸せなんだろうと思った。ドラム、ギター、ベース、シンセ、スピーカー、アンプ、ミキサー、マイク。僕たちは他のクラスメイトが触ったことのないような楽器に触り、演奏し、音を出し、曲にする。コードを押さえ、音を聴き、リズムを取り、歌を重ねる。すべてはこのスタジオという特別な場所で行われる、特別な行為。

もつとここに居たいと僕は思う。もつとここで演奏したいと思う。自分の音がみんなの体に響く。その快感を、もつと長い間味わいたいと思う。

文化祭まであと1ヶ月もない。それが終わったら本格的に受験勉強を始めて、高校生になったら4人はバラバラだ。一緒にバンドをやることはもうないだろう。このメンバーでバンドをやるのはこれが最後なのだ。そう考えると、今のこの時間がとても貴重に思えてくる。無駄にしたくない。そして思いっきり練習して、本番では思いっきりいい演奏をしたい。ミスチルに負けたくない。担任を驚かせたい。内山をぎゃふんと言わせたい。みんなに羨ましがりたい。井上さんに「すごいよかった」と言われたい。兄に褒められたい。

「マイキーどしたん？」

「ん？ いや、なんでもない。考え事」

「ワサビが効いたんかと思た」

「ちやうわ」そう言い返した僕の目には、少しだけ涙が浮かんでいた。

敬ちゃんの両親が車で迎えに来たとき、おばさんが「差し入れやけん食べてね」とおにぎりと稲荷寿司を置いていった。「また寿司やねえ」と敬ちゃんは笑って言った。

「ヨシヒコ君、今からどうするん？」と平尾。

「風呂入って、ビール飲みながら歌の練習だ」

「ビール？ 買うてきたん？」

「冷蔵庫で冷やしてるぜ」

「準備ええなあ」

ヨシヒコのやりそうなことだと僕は思った。案外これが合宿の一番の目的だったのかもしれない。僕は平尾が「ビールなんか苦くて飲めん」と言うかと思ったが、何やら乗り気だった。

実を言うと「苦くて飲めん」と思っていたのは何を隠そう僕の方だった。でもくやしいので僕は黙っていた。

「風呂の順番どうする？」

「ヨシヒコ君からでええよ」

「そうか？」

「俺、風呂入れてくるけん」

「おう、サンキュー」

平尾の両親から風呂を使う許可は下りていた。石鹸やシャンプーがちゃんと揃つとらんかもしれんけんそれは自分たちで用意しなさい、ということだった。

「歌の練習ってなんするん？」と僕はヨシヒコに尋ねた。

「山ほどスコア持ってきたぜ」

「嘘やん、見せてや」

ヨシヒコは持ってきていたスコアを畳の上に並べた。バンドスコアではなく、ギター用の弾き語りスコアだった。バンド別になっているものもあつたし、ヒットソングばかりを集めたものもあつた。そこに風呂の準備をした平尾が戻ってきて、スコアを見て言った。

「ようけあるなあ。全部ヨシヒコ君の？」

「イエス」

「これ全部弾けるん？」

「んん、どうだろうな。弾いたことねえのもあるからなあ。まあ半分はすぐに弾けると思うぜ、コード弾くだけなら」

「ふうん、すごいねえ」

「ところでよお、マイキーってコード見てどのくらい弾けるんだ？」

「え？ コード弾きってやつ？ さあ、Cメジャーの曲やったらたいがい大丈夫やと思うで」

「やっぱりそうなんだな、白鍵が多いからってことか」

「そう」

「なあなあCメジャーてなに？」と質問したのはもちろん平尾だ。

【Cメジャー】

ハニホヘト、ドレミファソ、C D E F Gはそれぞれ対応している。したがってCメジャーとは「ハ長調」のことである。と説明しても、何の答えにもなっていないだろう。

コード進行のところに書いたように、Cというコードは「ドミソ」という3つの音の和音のことを指すわけだが、ここでいうCメジャーとは、その曲の「調」を表す言葉だ。

調には大きく分けて「長調」と「短調」の2種類がある。長調は明るい曲、短調は暗い曲、というのはいかなる所で習っているはずだけど、これを英語で「メジャー」と「マイナー」と表現する。それではそのメジャーの前についている「C」が何かというと、これは「曲の音階の中心となる音」を表している。教科書的な単語を使うとそれは「主音」であり、教科書的な説明をすると「帰着しようとする力が働く音」ということになる。

主音とは何かということについて説明するのはとても難しいが、こんな実験をするとすぐわかる。

まず、誰かにピアノの前に座ってもらう。そして一番左の白鍵から、一番右の白鍵まで、白鍵だけを順番に弾いてもらう。何の音から始まるかはピアノによつて変わるが、それは構わない。白鍵と黒鍵があるものなら、オルガンでもおもちゃのピアノでも何でもいい。とにかく左から右へ白鍵だけを弾く。間は空けずに続けて弾くほうがいい。そしてそれを目隠しをして聴いてみる。すると、白鍵は1オクターブに7つしかないから7回に1回「ド」が規則的に出てくるのだが、楽器ができない人でも、どんなに音痴な人でも、どの音が「ド」かがちゃんとわかるのだ。ピアノの鍵盤を見ても「ド」がどこかわからない人は多いが、なぜか聴くとわかる。

この「ドから始まる白鍵7音」のことを、「ハ長調の音階」（英語ではCメジャー・スケール）という。

さらに今度は「ファ」を弾く代わりに「ファ」の右隣の黒鍵「ファ#（シャープ）」を弾いてもらってさっきと同じことをやる。すると今度は「それがドだ！」と答えた音は「ソ」になるはずだ。もちろんこれは間違っているのではない。合っているのだ。なぜなら、白鍵のうち「ファ」だけを「ファ#」にした7つの音で構成される音階は「Gメジャー（ト長調）」であり、その主音は「ド」ではなく「ソ（＝G）」になるからだ。つまり、はじめの音階が「ドで始まってドに向かう」ように聞こえていたのが、7音の中の「ファ」だけが「ファ#」に変わることによって始まってソに向かう」ように聞こえるようになったということだ。要するに「音階には中心になる音『主音』があり、それはどの7音を選ぶかで変わる」ということだ。そして主音を嗅ぎ分けるのは誰もが持っている本能的な音感なのだ。

前に「僕たちは12音の中に生きている」と書いたけど、実はそれをもっと突き詰めていくと、

「僕たちは12音の中の、主に7音の中に生きている」と言うことができるだろう。ただし、その7音は何を選んでもいいというわけではない。長調、あるいは短調になるための7音の選び方というのがある。それぞれのルールにのっとった7音だけが音階を構成することができるとだ。

ここでちょっと余談。

「冒険」という単語を何度も続けて言ってみる。冒険冒険冒険冒険。いつまでたっても冒険は冒険のままだ。ここで冒険の「ぼ」を「ぽ」に変えて、同じことをやってみる。「ぽうけんぽうけんぽうけんぽうけん」するといったの間にか「憲法」に変わってしまう。ひと文字変わっただけで、そう区切りたくなるのだ。これはファ#のせいで「ソで始まってソに向かう」ように聞こえるようになったのと同じ感覚だ。

Cメジャーの説明の締めくくりとして、簡単な例を2つ挙げてみよう。

まず童謡の『ぶんぶんぶん』を思い浮かべてみる。曲の出だしの「ぶんぶんぶん、はちがとぶ」のところを「ソファミ、レミファレド」とピアノで弾くとする。するとこの曲は最後にまた「ぶんぶんぶん、はちがとぶ」に戻るから、最後の音は「ド」だ。

もうひとつは「ぽっぽっぽ、はとぽっぽ」の『はと』だ。曲の頭の部分を「ドレミ、ソミドーレ」と弾くとする。すると曲の終わりの「みんな 仲良く 食べにこい」の最後の「い」の音は「ソソソミ ラララソ ミミミレド」でまた「ド」だ。

2曲とも白鍵のみを使い、しかも「ド(＝C)」で終わっている。だからこの2曲はCメジャーだ。「ド」で終わるのは必須条件ではないが、Cメジャーの曲のひとつの傾向だ。そしてこの2曲にコードをつけるとすると、コード進行のすべてが白鍵のみで完結する。「ファ#」や「シ・フラット」がどこにも出てこないのは何となく想像できると思う。

数ある調の中でもCメジャーは特殊で、鍵盤の白鍵だけを使ってできるというとてもわかりやすい特徴を持っている。僕がヨシヒコに向かって「Cメジャーの曲ならコード弾きができる」と言ったのは、まさのこの理由による。Cメジャーの曲には、Cメジャー・スケール（つまり白鍵）の音がかなりの確率で登場するから、ピアノのおかげで白鍵に慣れている僕にとっては弾きやすい曲ということになるわけだ。

ただし、途中で「主に、7音の中に生きている」と断ったように、Cメジャーの曲だからと言って、絶対に黒鍵を弾いてはいけないわけではない。音楽とはそんなに不自由なものではない。前に「コードがCであっても構成音ドミソ以外の音を弾いてもいい」と説明したのと同じニュアンスだ。Cメジャーの曲はCメジャー・スケールの7音が中心となつて構成されている、という風に解釈すればいいと思う。

こんな説明を平尾にすると、平尾は「ふうん、なるほどなー」と随分感心して聞いていた。

シンセを使って音を出しながら説明したからわかりやすかったのだろう。

「ほんならさあ」と平尾。「ギターの場合も弾きやすいとか弾きにくいとかがあるん？」

「イエス」とヨシヒコ。今日は英語率が高い。「ベースだってそうだよ。開放弦は楽だよ、弦押さえなくていいから」

「そういやそうやね」

「てことは、開放弦の多い曲は弾くのが楽ってことだよ。だからEが一番楽なんだよ、ベースの場合は」

「なるほどねー」

平尾は今度はヨシヒコから弦楽器の講義を受けている。こういう話を音楽の授業でしてくれたらみんな楽器に興味持つのになあと僕は思った。

「あつ！」

突然平尾が大きな声を出して立ち上がった。

「どしたん？」

「風呂！ 風呂忘れてた！」

そう言って平尾は風呂場に猛ダッシュしたが、お湯はとつくの昔に溢れ返っていたようだ。

「しもた！ もったいないことしたー！」と風呂場で叫ぶ声が聞こえてくる。

「ええやん風呂の湯ぐらい」

僕とヨシヒコは平尾の慌てぶりをバカにしながら、最後に残っていた寿司を全部平らげた。

【瓦せんべい】

僕が最後に風呂から上がると、ヨシヒコと平尾がスタジオの真ん中であぐらをかいて、手に持った缶ビールを開けようと今か今かと待ち構えていた。

「マイキー、早う来てえー」
はよ

「わかったけんそんなせかすなって」

僕が座るとヨシヒコが乾杯の音頭を取る。

「ゴホン。それでは、チェスター・コパーポットの第1回合宿が無事終了しましたので乾杯をしたいと思います。カンパーイ！」

「乾杯！」

「乾杯！」

僕の両親はほとんど毎日ビールを飲んでいる。僕は中学校に上がるころから2人につき合わされているから、15歳にしてはビールを飲んでいる方だと思う。でも好きか嫌いかというところではない。酔っ払ったり頭が痛くなったりするほど飲んだことはないけど、どちらかというと梅酒みたいに甘い方がいい。

3人の中で一番飲みっぷりがよかったのは平尾だった。ヨシヒコが買ってきた6本のビール

の半分を平尾が一人で飲んだ。

「うちはみんな酒飲みやけんねえ」ということだったが、同じ中3とは思えない飲みっぷりだった。ヨシヒコは半分飲んだところでもう顔が真っ赤だった。「俺、顔は赤くなるけど酔ってねえから」と何度も主張したが、この場に誰かがやってきて怒られるとしたらまずヨシヒコだろうなと僕は思った。

しばらくして平尾が「あ、忘れとった、瓦せんべい持ってきたんや」と言って立ち上がった。

瓦せんべいは香川特産の砂糖を使用した堅焼きのせんべいで、讃岐を代表する銘菓だ。この甘い瓦せんべいをビールのつまみとして食べるなんていう話は聞いたことがないが、平尾の家では「瓦せんべいは何にでも合う」ということで、万能のおつまみとして常備されているらしい。奇特ではあるが、平尾の家庭ならあり得るなと僕は思った。以前の僕なら「平尾家では毎日キャビアを食す」と思っただろうが、今や「瓦せんべいばかり食べている家庭」の方がしつくりくる。僕の平尾家に対するイメージは大きく変わりつつあったのだ。

瓦せんべいを全部食べてしまうと、顔の赤いヨシヒコがギターを弾き始めた。アンプには通せないから、エレキの生音だ。それでもちゃんと音は聞こえる。

最初の曲はビートルズの『イン・マイ・ライフ』。ヨシヒコは下に置いたスコアを見ながら歌い、自分でページをめくる。僕はあまりよく知らない曲だけど、聞いたことはある。曲が終わると僕と平尾は拍手。平尾の拍手がバチバチとやたらと大きい。

「あっちいなあ」歌い終わったヨシヒコがうちわでせわしなく顔を扇ぐ。

「網戸んところ行ってやろか。どうせ聞こえんやろ」

僕たちはスコアとビールを持って縁側へ移動した。木の床がひんやりと冷たくて気持ちいい。

「マイキー、一緒に歌えるやつないか？」とヨシヒコ。

「サイモン・アンド・ガーファンクルのスコアあったやろ」

「おお、『サウンド・オブ・サイレンス』いけるか？」

「いけるで。コーラスやれる」

「よっしゃあ」

僕とヨシヒコは横に並び、網戸に向かって歌を歌った。ヨシヒコが上のパート、僕が下。背中から当たる扇風機の風が、歌声とギターの音を乗せて暗い庭へ向かって飛んでいくような気がする。網戸を開けたらもっと気分がいいだろうなと思ったが、蚊が入ってくるのが嫌なのでそれだけは我慢する。

ヨシヒコはスコアを適当に広げ、目に留まった曲を片っ端から弾いて歌った。僕も知っている曲は一緒になって歌った。平尾もときどき参加した。

「外で歌いてえなあ」とヨシヒコが言う。同感だった。僕は少しぬるくなったビールをちよつとだけ飲む。

月は出ていなかったが、星の明るい夜だった。昼間から夕方にかけて、どんどんと天気が悪くなったのだ。

「なあなあ、『こんぴら舟々』はどう？」

そう言い出したのは平尾だった。

【こんぴら舟々】

『こんぴら舟々』は香川県の民謡だ。もちろん歌の舞台はこんぴらさんのあるこのあたりの地域だ。県内どこでも歌われているとは思わないが、この近辺に住んでいて知らない人はまずいない。『ガンダーラ』よりは絶対有名だ。歌詞の内容はよくわからないけど、こんぴらさんを讃える歌だと何となく僕は思っていた。

そのときなぜ平尾が『こんぴら舟々』を歌いたがったのかはわからない。でも平尾は「そんなもの知るかよ」と一蹴したヨシヒコを無視して立ち上がり、網戸のほうへ向いて大きく息を吸い込むと、いきなり『こんぴら舟々』を歌い出した。

こんぴらふねふね おいてに帆かけて シュラシュシユシユ

まわれば四国は さんしゅう なつかのごおり

ぞずさん こんぴら だいごんげん 一度まわれば

こんぴらみやまの 青葉のかげから キラララ——

「ち、ちょっと待てー！」僕は思わず歌を止めてしまった。「キララララ？ なんやそれ」

「2番の歌詞やん」平尾は歌を止められてふてくされている。

「嘘や、そんなあるん？」

「知らんの？」ちよつと赤い目をした平尾が僕を見下ろしている。

「いや、知つとるほうがおかしいやろ。聞いたことないで」

「俺5番まで歌えるで」

「まじでー！ 平尾、歌^うて」

「ええで」

調子に乗った平尾が今度はマイクスタンドの前に立って歌い始める。ミキサーの電源を切っていないかったので、平尾の声がスピーカーから流れ出る。

こんぴらふねふね——

たいしたボリュームではなかったし、この時間に歌っても差し支えなさそうな歌だったので、僕はそのままにしておいた。寝床についた年寄りが聞いても「おお、どこぞで歌うとるのおー」

と許してくれそうな気がする。

僕とヨシヒコは手を叩いて拍子を取りながら、えらく上機嫌で『こんぴら舟々』を歌う平尾を見守った。スタジオが老人会の忘年会みたいな雰囲気になってしまった。

驚くことに、平尾は本当に5番まで歌いきった。歌詞はよくわからなかったけど、ちゃんとメロディーと合っていた。これをこの場の思いつきで歌うのはさすがの平尾にも無理だろうか、本当に覚えていたのだ。

「すっげえ平尾、どこで覚えたんやそんなん」

「小学校」

「嘘や、ぜったい嘘や」

僕は『こんぴら舟々』を小学校で習った覚えはなかった。習ったとしても、こんなややこしい歌詞をここまで覚えてるのはちよつと異常だ。

「なあなあ平尾、俺さあ、1番でさえ適当に歌うとんやけど、なんて言いよん？」

「1番の歌詞？ 歌おか？」

「頼むわ。『お池に帆かけてー』の部分と、最後のところはわかるんやけど」

「ええ？ マイキー、最初のとこ、『お池』とちゃうで。『追風』やで」

「ええっ」

「追風っていうたら追い風のことや」

「えー！ 俺ずっと『お池』やと思てた。平尾なんで知つとんそんなん」

「小学校で習た」

平尾はそれを繰り返す。平尾が通っていたのは僕と違う小学校だが、同じ満濃町内だ。教育方針の違いなのか？ カリキュラムが違うのか？

平尾はマイクを通して、少しゆっくり目に1番だけを歌った。歌詞は聴き取れたが、意味はわからないままだ。それでも僕は「すっげえ平尾」と改めて感心した。

「なあ平尾、『まわれれば四国はー』まではええわ。そのあとの『さんしゅう』ってなに？」

「讃岐の州で讃州や」

「ほんなら『なつかのごおり』は？」

「那珂郡のことや。いまの仲多度郡が、むかし那珂郡と多度郡に分かれてた名残らしいで」
初耳だ。

「『ぞずさん』てなに？」

「象頭山。こんぴらさんのある山のことやん。そっから見えるやんか」

「へえー」

またまた僕は平尾に脱帽。まるで歴史研究家みたいな口ぶりだった。

「すっげえ平尾」

今日、僕はその台詞を何回言ったことか。

平尾が縁側に戻ってきたところで、今までずっと蚊帳の外だったヨシヒコが言った。

「俺さあ、『ぞずさん』のど」『コチュジャン』だと思ってたぜ」

「なんやそれ。わけわからんやん」

「おう、わけはわかんねえけどよお、みんなそう歌ってるぜ」

「みんなってことはないやろ。『コチュジャンこんぴらだいごんげん』ってなんや？」

てんでめちやくちやな歌詞だ。すると平尾が質問。

「コチュジャンってなに？」

「知らんの？ 韓国の味噌や。めっちゃ辛いやつ」

「ふうん、知らなかった」

三人寄れば文殊の知恵。何でも解決できるもんだ、と僕は思った。

『こんぴら舟々』を歌い終わると、平尾はふらふらとスタジオの真ん中にしゃがみ込み、横になったかと思うとすぐにいびきをかき始めた。

「のび太か、こいつマジで」とヨシヒコが呟いた。

僕は押入れからタオルケットを3枚出してきて、平尾に1枚かけてやった。

縁側に戻ってきた僕に向かってヨシヒコが言った。

「なあマイキー、もう1曲だけ歌っていいか？」

「ええよ。なに？」

「クラブトン」

ヨシヒコはそう言って立ち上がると、ギターアンプのところに行ってアンプの電源を入れた。ボリュームのツマミをいつもの3分の1くらいに絞ってから少しだけ音を出す。それからマイクの前に立ち、おもむろにギターを弾き始める。

Would you know my name

If I saw you in heaven——

エリック・クラブトンの『ティアーズ・イン・ヘヴン』。

ピンと張りつめた弦の振動が、透き通った音に変わってアンプから流れ出る。ヨシヒコは声を抑えるようにして歌っている。歌声はスピーカーから聞こえてくる。

ギターの音がひとつひとつはつきりと聞こえる。僕のほうがたじろいでしまうほどクリアな音だ。弦の振動がそのまま音になっているような感覚。余分なものを全部そぎ落としたような音。そしてピックを握る指の力がそのままアンプまで伝わっているような直接的な響き。金属のわずかな震えが空気を伝わってくる。

ゴダイゴを歌っているときのヨシヒコとは明らかに違っていた。感情を抑えつけているような表情だ。視線の先には右手がある。ときどき左手をちらっと見て、すぐにまた右手に戻る。ときどき目をつぶるような仕草も見せる。でも音が外れることはない。

I must be strong and carry on
'cause I know I don't belong here in heaven——

僕は身動きができなかった。

曲が静かに終わると、僕は少しだけ拍手をした。それさえもはばかれるような雰囲気だった。

「今日はこのくらいにしとくか」とヨシヒコは言って、アンプの電源を落とした。

僕はミキサーとシンセの電源を順番に落としてから、隣の部屋から座布団を2枚持ってきた。マイクスタンドを横にどけて、そこに座布団を置く。

「これ枕代わりやけん」僕はそう言って平尾の横に寝転がり、タオルケットをかぶる。ヨシヒコが電気を消すと、部屋の中は真っ暗になった。

眠りにつくまでの間、ずっとカエルの声が聞こえていた。

一九九五・九一(金) ずっと通関川い

夏休みが終わると、残された時間は本当にわずかだった。クラスの出し物の準備で毎日帰るのが遅く、文化祭直前には平日も練習をやるという当初の計画は丸潰れだった。敬ちゃんも吹奏楽部の練習が佳境に入り、とても平日にバンドの練習をできる状態ではなかった。トランペットなら何人もいるから一人くらい休んでもいいが、ドラムは一人しかいないから敬ちゃんが休むわけにはいかないのだ。

僕のクラスの出し物は、定番中の定番・焼きそばに決まった。クラスの文化祭実行委員が見事抽選で当たりを引いたのだった。2学期の始業式あと、焼きうどんに変えてはどうかという意見が一部の女子から上がったが、あつさりと却下された。

讃岐っ子は「純粋なうどん」以外のうどんメニューを好まない傾向がある。焼きうどん然り、煮込みうどん然り、カレーうどん然り。そしてこれは意外に知られていないらしいが、讃岐には「たぬきうどん」というメニューは存在しない。僕が思うに理由はひとつ。天かすがネギや生姜と同じく無料であるところが多いからだ。とは言え、数あるうどん屋の中には「たぬきうどん」を出す店もあるらしい。そういう店には大抵「カレーうどん」も置いてある。僕に言わせれば邪道の一言だ。

【ストラップ】

9月最初の日曜日。この日を含めて、本番までに日曜日はあと3回しかない。

スタジオに着くと平尾がもうすでにスタンバイをしていて、熱心にベースを弾いていた。僕が椅子に座って大きなあくびをしていると、ヨシヒコがやってきた。新しいストラップを買ったらしく、それを平尾に見せている。「ええなあ、俺も新しいん買おうかな」「お前もつと派手なの買えよ」そんな会話をしている2人の後ろで、少し遅れて来た敬ちゃんがあわてて準備を始める。

ストラップはギターやベースを肩から提げるための紐だ。スーツケースのバンドくらいの太さがあるから、紐というよりは帯に近い。楽器本体以外でちよつとお洒落のできるアクセサリだ。

「ねえねえ、私もコーラスしようと思うんやけど」とドラムのセッティングを終えた敬ちゃんが言った。

「そんなんできるん？」と僕。

「うん、『ガンダーラ』だけやけどね。サビのとこのコーラス、やっぱ一人やと寂しいやろ」

「そやなあ」

「前からドラムのコーラスってやってみたかったけん、できるかどうかからんけどちよつと試してみてええ？」

マイクは2つしかないから、僕が使っているマイクをドラム用に使うことにする。ドラムの周りはただでさえごちゃごちゃしているので、マイクスタンドは敬ちゃんの斜め後ろに立てて、そこからアームを伸ばして敬ちゃんの顔の左の辺りにマイクがくるようにセットする。

「できんかったらゴメンね」

「かまんよ。まあとにかくやってみよ」

カウンターの前の、いつもの「いきまーす」の声がスピーカーから聞こえてくる。みんなが思わず笑う。カウンターを取るスティックの音までマイクが拾ってしまつて、スタジオ内にスティックの音がこだまする。

カッ、カッ、カッ、カッ――

いつもよりイントロのギターの音がクリアに聞こえる。リバーブを少し減らしたのかもしれない。

敬ちゃんのサビのコーラスはばっちりだった。敬ちゃんは顔をマイクの前から動かさず、体の他の部分はそれぞれのドラムに向いている。「器用やなあ」と僕は思った。オリジナルではコーラスは女性だから、僕がコーラスをやるよりはそれっぽく聞こえる。

演奏が終わった瞬間、平尾が驚いて言った。

「敬ちゃんすごい。ようやるねえ、そんなん」

「うまいことできた」と敬ちゃん。「でもあんまし気を取られるとドラムを間違うんよねー」

「マイクが2つしかねえのが残念だな。リハーサルまでお預けつてことだな」

「そういや本番ってちゃんとマイクの数あるんかな」

「おお、そうだった。マイキーいいこと言うぜ。来週中にセッティング表を提出しろって言われてんだった」

「セッティング表てなに？」と平尾が質問したので、僕が答える。

「使う楽器とかマイクの数とか、演奏者の立ち位置とか、曲順とか、そういうのを書く紙のことや。当日はそういうのを見ながらP Aさんが準備してくれるんや」

「ピーエーサンてなに？」

「あ、平尾にそれ教えとかないかなあ」

【P A】

P Aとは「Public Address」のこと。意味あいとしては「音声拡張」のことだ。具体的に言えば、「観客に向けて音を出すための一連の装置」のことを指す。

僕たちがいつもスタジオで聴いている音は、アンプやスピーカーから出たそのままの音だ。ドラムに至っては完全な生音だ。多少の違いはあれ、練習している間は全員がほぼ同じ環境で同じ音を聴いている。スタジオが狭く、お互いの距離が近いからだ。でもライブハウスやコンサートホールみたいに広い場所で演奏をするときには、そういうわけにはいかない。いくら大きいアンプがあっても東京ドームの隅々まで音を届けるのは無理だし、どんなに強くドラムを叩いたとしても生音の大きさには限界がある。

そこで登場するのがP Aだ。身近な例でいくと、全校集会のときに使うマイクの音がスピーカーから出るが、あれがP Aだ。スタジオ練習でマイクとシンセの音をミキサーに集めてそれをスピーカーから出していたが、バンドにおけるP Aとは、そのさらに規模が大きいものだと思えばいい。

満中の音楽発表会では、P Aを放送部が担当する。僕はこれまで2回の満中文化祭を体験してきたが、文化祭2日目の放送部員は輝いている。ステージの上と下を行ったりきたりしながらマイクの位置を動かしてみたり、機材の調整をしたり、専門用語を駆使して大声で話し合ったりしている姿は、はつきり言って格好いい。まるでプロの様相だ。

「ほんならP Aしよる人がP Aさんってこと？」

「イエス」

「放送部の人ってこと？」

「イエス」

僕はヨシヒコが持っていたセッティング表を見せてもらった。簡単なステージの見取り図と、曲名を書き込む表。なぜか10曲まで書けるようになっていた。見取り図にははじめからドラムとベースアンプとギターアンプの絵が描いてある。これは動かせませんという意味だろう。

「マイクの数3本、シンセが1台、と――」

ベーアンはステージに向かって左。ギターアンプは右、ドラムは真ん中だ。

「これさあ、ヨシヒコ真ん中やん、アンプはどうすん？ 右にあるけど」

「少しくらいは動かせると思うぜ。その位置で真ん中向ければいいんじゃないか？」

「ほんならシンセは右やな。そういやギターが2つあったらどうすんやろ」僕の素朴な疑問。

「去年確かギターが2人いたバンドがあったけどよ、アンプはちゃんと2つあったぜ。学校のものだと思うけどな」

「え、機材って学校にあるん？」と平尾が驚いている。

「当たり前やん。どうやってライブするんや」と僕。

「このスタジオのやつ持っていくかと思った」

「そんなわけないやろ。これはうどん屋さんに借りとりやつやろが」

「確かにそうやな。てっきり本番もこれ使うんかと思とった」

「こんなん持って行ったら他のバンドにも使われてしまうで」

どこに置いてあるのかは知らないが、満中にはちゃんとバンド用の機材がある。文化祭以外では使わないようにどこかに隠してあるのだろう。

「曲順はどうするん？」と敬ちゃん。

「いつものでえんとちゃうん？」

ということで『ガンダーラ』が1曲目にあっさり決定。

「じゃあこれで出しとくぜ」

その日、丸1ヶ月以上スタジオに置きっぱなしだったシンセを家に持って帰った。久しぶりにかついたシンセは重かった。肩にかけて楽々自転車に乗れるギターやベースがうらやましかった。

【黄金の月】

9月9日土曜日の放課後。文化祭の準備が終わり、「帰ってよし」の号令がかかったのは7時前だった。

校門を出て歩いていると、後ろから僕の名前を呼ぶ声がする。立ち止まって振り向くと、誰かが早足でこっちへ歩いてくる。

「城崎くん」

手を振っているのは井上さんだった。

「おっす」「久しぶりやね」「そやね。夏休み前やったっけ?」「そうそう」

僕は神社の前でナタデココを飲みながら待ち伏せした自分の姿を思い出した。もちろん待ち伏せをしていたことは井上さんは知らないわけだから、僕が相当なナタデココ好きだという情報だけが井上さんの頭にはインプットされているはずだ。お茶のお礼にナタデココを奢るという約束も覚えてくれているだろう。

「中秋の名月やね」

「そやね。朝からおかんが団子団子うるさかったけん、帰ったら団子が待つとる」

「うちもや」そう言つて井上さんは笑った。「ねえねえ知っとった? 今年は来月の満月も中秋の名月なんやつて」

「どういうこと?」

「秋分の日が一番近い満月が中秋の名月っていう決まりがあるらしいんやけど、今年は暦の関係で9月と10月が両方ともそうなんやつて」

「へえー、1年に1回しかないもんや思とった」

「私もや。昨日おばあちゃんが教えてくれたん」

「なんか得した気分やなあ」

「ほんまやね」

日は暮れていたけど、まだ空には明るさが残っていた。もうすぐ見事な形の満月が東の空から昇ってくるだろう。今日は晴れているからよく見えるはずだ。

「城崎君、夏休みはどうやったん?」

「まあまあやったかな。バンドの練習ばかりやってた気がするけど。井上さんは?」

「私も部活ばかり。夏の練習で最悪やで。胴着が暑いけん」

「そやろね。こっちも大変やったで、クーラーなしやったけん」

「練習って、いつつもどこでしよん?」

「平尾のばあちゃん家を借りとん」

「家?」

僕が簡単にスタジオのことを説明すると、意外にも井上さんはスタジオという言葉に興味を示したようだった。

「へえー、すごいねえ、私スタジオなんか見たことないよ」

「見たい?」

「うそお、見れるん?」

「ええよ。みんなには内緒やで」

「うんうん、見たい見たい」

「逆方向やし、20分はかかるけどええ?」

「ええよ、歩くん好きやけん。帰りはいつも遅いし」

勢い半分だったが、そんないきさつで井上さんをスタジオ15畳に案内することになった。

川沿いの道を歩いている間、僕はバンドのメンバーや機材やスタジオのことを話した。前に聞いたように井上さんは歌は苦手だし楽器をやったこともないが、音楽には興味があるようだった。僕は演奏曲をばらさないように気をつけながら、スタジオに着くまでの間、ここぞとばかりにバンドの話をした。20分という時間はあつという間に過ぎた。

「ほら、ここ」

「えー、こんなところで練習しよったん？　ただの家やんか」

「そうやで。ほんでも中はすごいで」

僕は植木鉢の下から鍵を出して扉を開け、玄関の明かりをつけた。

「お邪魔します」と井上さんは声をひそめて言った。

ふすまをすつと開けると隙間から玄関の明かりが射し込み、細い光の帯が巨大なベースアンプに落ちた。障子を通り抜けてきた満月の光がスタジオの中を照らし、ドラムセットがぼうつと浮かび上がっている。

「うわあ、すごい！」

僕は部屋の明かりをつけようと電気のスイッチを手探りで探していたが、その井上さんの声を聞いて、暗いままでいいやと思い直した。スタンバイ状態のアンプの電源ランプが赤く光っているのが、この場所に慣れた僕の目にさえ不気味に映った。

「すごいやろ」

「うん。なんか別世界っていう感じがする」井上さんはきよろくとスタジオの中を見渡した。「スピーカーがいっぱいあるね。全部使うん？」

「もちろんや。その2つは正確にはスピーカーじゃなくて、アンプっていうんや。こつちが平尾で、そつちがヨシヒコ。ベースとギターでひとつずつ使うんや。歌とキーボードの音はあつちのスピーカーから出るんやで」

「へえー、すごいね、プロみたいやね」

「機材は借りとんやけど、かなり高いもんらしいで。こんな俺らが使うてえんかって思いながら練習しよる」

「ねえねえ、ドラムのとこ座ってもかまん？」

「かまんよ」

僕は井上さんにドラムを叩いてみせたかった。簡単な4ビートでも「すごい」と言ってくれらだろう。でも音を出すには時間が遅いし、何よりスティックがない。

「敬ちゃんがスティック持つて帰つとるけん叩けんけどな」

「城崎君、ドラムできるん？」

「ちゃんとはできんけど、ちよつとなら叩けるで」

「ほんまに？　すごいね。なんでもできるんやね」

井上さんはドラムの椅子に座ってスネアのヘッドをぺちぺちと叩いている。

「井上さん、その右足んところにあるペダル、そっと踏んでみ」

「え、これ？」

——トッ。

「うわっ」

「それを思いっきり踏んだらな、ドンってすごい音が鳴るんや。ドラム叩っきよる敬ちゃんほめっちゃかつこええで。両手両足が全部同時に動くんや。そらすごいで、ほんまに」

僕はここにシンセがないのが少し残念だった。シンセならボリュウムを絞って音を出すことができるのに。

——シンセがあつたら何か弾いたげるんやけどなあ。

本当はそう言いたかったけど、言えなかった。実際にシンセがあつたとしても弾けたかどうかはわからない。こんな場所で、井上さんと2人きりで、しかも井上さんだけに楽器を弾くなんて——ロマンチック過ぎて僕には無理だ。

機材をひと通り見てまわると、それ以上話すことが思いつかなくなってしまった。こんなところで文化祭の話をするのもなあとあれこれ考えている間、沈黙が続き、最後に井上さんが「そろそろ帰らないかんね」と言った。

スタジオを出ると、僕たちはまた一緒に学校の近くまで戻った。農協の前の信号のところでは井上さんが「ここからは一人で帰れるけん大丈夫」と言ったが、僕はこの間の神社の近くまで送っていくことにした。

神社の前に着いたとき、僕はまっ先に言った。

「ライブ、絶対見に来てや」

「うん、絶対行く。楽しみにしよるけん」

「今度ナタデココ奢るけんね」

「うん。それまで飲まんようにする」

「氣いつけてな」

「うん、ありがとう。じゃあね、また来週」

「バイバイ」

空を見上げると、丸い中秋の名月が空の中ほどまで昇っていた。

神様仏様ヨシヒコ様ナタデココ様スタジオ様お月様。みんなに感謝したい気分だった。

「た・ま・め・の・ひ・な・の・つ・き・の・な・ま・づ・き・の・ま・い・に」

9月23日土曜日、秋分の日。土日が潰れるのに代休は月曜日だけという理不尽な制度も許してしまうくらい、僕の心は浮かれている。

起きたのは朝7時だった。昨日の夜は色々考え事をしていて寝つきが悪かったのに、目覚ましが鳴るよりも早く目が覚めてしまった。

朝食をすっかり食べ、念入りに歯を磨き、何度も鏡を見る。そして今まで出したことがないくらい明るい声で「行ってきたーす！」と言って、何も持たずに家を出る。手ぶらで学校に行くのは偉くなったみたいでいい気分だ。

学校に着く随分手前から、校門の横に「満中文化祭」という巨大な5文字が踊る看板がたてかけてあるのが見えた。

右腕に緑の腕章をつけた文化祭実行委員が、校内をばたばたと走り回っている。体育館の前に何人かの先生が集まって、例の「鹿鳴館」の看板を慎重に取り付けている。よほど高価なものなのだろう、それだけは絶対に生徒にやらせないのだ。

教室に入ると、何人かの女子が備品のチェックをしていた。女子は10人以上来ていたが、男子は僕と平尾とあとひとりだけ。男子がさらに3人来たところで、屋台を運び出す作業を開始。教室の中で組み上げた屋台を中庭に運び出すのが朝一番の仕事だった。狭い廊下を抜け、急な階段をゆっくりと下りる。昨日から中庭に張ってあるテントの中に屋台を運び込んで終了。それが終わってしまったら、あとは焼きそばを焼くだけだった。材料は全部揃っているし、電気系統のことは学校の指示通りにやればいい。文化祭が始まったら、決められた店番をちゃんとこなせばいいだけだ。

【プログラム】

教室に戻ったところで、文化祭のプログラムが配られる。薄紫色の紙にぎっしりと文字が印刷されている。僕は音楽発表会の欄を探す。

「あった！」

音楽発表会のスケジュールは裏面に書いてあった。吹奏楽部と合唱部の部員の名前の下に、バンド名とバンドの紹介文が載っている。

ギターだけのフォーク・バンドが2つと、ロック・バンドが4つ。チェスター・コパーポットの演奏順は6バンド中5番目で、ミスチルバンドが2番目だった。演奏順は1週間前にくじ引きで決まった。リーダーのヨシヒコがまあまあいい順番を引き当てた。

僕は各バンドの紹介文を上から順番に読んでいく。

サウンズ……イノセントなワールド。そして続くロードはクロスする。僕らのハートはチルチルミチル。どうぞ最後までお聴きください！

「やぶる」

ひどい文章だ。

「うちのバンドはヨシヒコが考えたんかなあ——」僕は下の方へ視線を走らせる。

チェスター・コパーポット……海賊ウィリーの宝を求めてチェスター・コパーポットが行く！ 目指せ天竺、西遊記！ そうさ今こそアドベンチャー！

「なんやこれっ！」

どう見ても平尾の仕業だった。ヨシヒコが平尾に書かせたのだろう。ある意味サウンズと同レベルだった。

「もつとましなん書こうや——」なんて今さらばやいても遅い。ちゃんと監督しとくんだったと僕は後悔する。プログラムを読んでいると、ヨシヒコと平尾がやってきた。

「おはよーマイキー」

「おはよーちやうわ！ なんやこれ！」僕はプログラムを指差して怒鳴る。

「なかなかいけるやろ？」

「2人で考えたんだぜ」

「冒険つながりやで、わかる？」

「ついでに孫悟空つながり。わかったか？」

——はあ。

僕はため息をついた。それ以上言う気になれなかった。

プログラムの表面には、2日間のスケジュールと各クラスの出し物の紹介、それに校内の見取り図が書いてある。初日は各クラスの出し物を回るのがメインだから、特にこれといった大きなイベントはない。一部の運動部の出し物が体育館とグラウンドを使って発表されるくらいのものだ。運動部の出し物の名物は体操部の「アクロバット組体操」とバスケットボール部の「フリースロー大会」だ。でも今年は体操部の人数が少ないせいでたいしたものはず、人気のフリースロー大会は景品にかける予算が少なかったから盛り上がりがないだろうというのがもっぱらの前評判だった（初日が終わってみると事実その通りになった）。

2日目のメインイベントは、何と言ってもダンスパーティーと音楽発表会だ。午前11時から12時までがダンスパーティーで、みんながダンスに気を取られている間に講堂でこっそり音楽発表会のリハーサル。音楽発表会は昼食後の午後2時から5時までで、終了と同時に全体の片付け開始。そういうスケジュールだ。2日目にもクラスの出し物はあるが、その2つのビッグイベントのせいではほとんど人が集まらない。クラスによつては出し物自体を初日だけでやめてしまふところもある。だから2日目に見ることができるのは、展示しつつ放して済む研究発表の類の出し物だけだ。僕のクラスも焼きそば屋を売るのはダンスパーティーの終わる12時から音楽発表会の始まる2時までの2時間だけだ。

【講堂】

講堂はグラウンドの隅にあり、校舎や体育館のある場所からは少し離れている。

広さは体育館の半分ほどで、ワックスの効いた木床と豪華なカーテンが学校の自慢だが、講堂と言う割には机も椅子も何もない。卒業式と入学式以外の全校集会のときに使われるが、全校生徒が入るとすし詰め状態になって息苦しくなるのが難点だ。独特のワックスのにおいと風通しの悪さのせいで、よく女子生徒が倒れる。

そんな講堂に生徒が自発的に集まる唯一の時間が、文化祭2日目の音楽発表会だ。吹奏楽部の演奏から始まり、合唱部の歌、そしてバンド演奏へと続く、それぞれに見所が満載のまさに目玉イベント。そして文化祭を締めくくる大取りのイベント、それが音楽発表会。

午前中に店番が回ってきて早々と仕事を終えると、僕はこっそり講堂に向かった。講堂に着くと、入り口の扉の前でヨシヒコが待っていた。

「本当に入れんのか？」

「大丈夫、話はつけとるけん。まだ始まっとらん？」

「まだだな。機材はもう入ってる。部員もちよつとは来てるみたいだ」

暗幕が引いてあつて講堂の中は見えないのだが、ほんのわずかな隙間からヨシヒコが中を覗いていた。

僕とヨシヒコが狙っていたのは、音楽発表会へ向けた機材の準備をこっそり見せてもらうことだった。もちろん準備は毎年やることだけど、その様子を見るにはそれなりの資格がないといけない。1、2年の間は問答無用で門前払いを食うところだが、今年は3年、しかも出演者。そして僕にはこれ以上ないコネがあつた。

【ワタさん】

ここで一人の人物を紹介したい。彼の名は渡辺。ワタさんという名でみんなに親しまれている。ワタさんは一部の男子から一目を置かれた存在だが、その他大勢から見れば、どこにでもいる平凡な男子中学生だ。特に勉強ができるわけでもなし、スポーツができるわけでもない。見た目もまあ——悪くはないが、平凡だ。しかし彼はある特定の分野について超・中学生級の知識と経験を持ち、それを如何なく発揮する。

その分野とは「メカ」だ。電気、電子、機械、機器、装置、そういうメカっぽいもので困ったら、まずはワタさんと呼べと言われるほどの知名度がある。

イベント会社を経営しているという父親のおかげらしいが、ワタさんのメカに関する知識は半端じゃない。車、バイクをはじめ、小さな電気製品から放送機器、パソコン、果ては無線機材まで、その守備範囲は驚くほど広い。もちろんP A機材についても、僕やヨシヒコよりもは

るかに膨大な知識を持っている。そしてワタさんは、何を隠そう放送部の部長なのだ。

ワタさんとの付き合いは2年のときに同じクラスになって以来だが、僕が彼から得た知識もまた兄やサンレコと並ぶほど多い。僕に会うまで楽器にはまったく興味がなかったというワタさんが僕からシンセの知識を得て、逆に僕がワタさんからP A関係の知識を得るというギブアンドテイクの関係が去年1年間続いた。おかげでワタさんとは、クラスが別になった今でも個人的な付き合いがある。だから講堂の非公開準備を見学したいという申し出にも、あっさりとOKが出た。

「あつ、来た！」

校舎のほうから浅黒く日焼けしたワタさんが歩いてくるのが見えた。肩に何やら大きな箱のようなものに乗せて、ゆっさゆっさと歩いてくる。水を汲んで帰る途中の原住民みたいだ。

「おーっす、マイキー」

「おっす」と僕は手を挙げる。「ワタさん、ヨシヒコもかまん？」

「おう、もちろんや」

「よろしく」ヨシヒコが軽く頭を下げる。

「さ、入ってくれ。すぐ始めるけんの」

講堂の重い扉がギリギリと開き、僕たちは暗幕で囲まれた異様な雰囲気の中に入っていく。

「うおお、すっげえでけえ！」

講堂のど真ん中に黒い巨大なミキサーが置いてあった。横幅は2メートル近くあるだろう。スタジオ15畳のミキサーがおもちゃに見えるくらいの大きさだ。ミキサーの横には透明のプラスチックのケースがあり、その中にはケーブルや小さな機材がぎっしりと詰まっている。

「いっつもは放送部の倉庫の奥に隠しとんや。トップシークレットやで」ワタさんはいつになく上機嫌だ。

ステージの上にはすでに機材が置いてあった。スタジオ15畳のものより大きなギターアンプが何と3つもある。ドラムセットもすでに組み立ててある。

「さあやるでー！ 全員集合！」

ワタさんが号令を掛けると、あちこちから放送部員が集まってくる。ワタさんを含めて3人が3年生、あとの5人が後輩だ。

「まずはマイクのチェックからな。シールドは長い順に使うてくれ。今年は足りんかもしれんけん、最悪延長しても構わんぞ。ミキサーはもう少し後ろに動かすから、先にマイク側からな。モニターはどっちか調子悪かったけん、ひとつにするかもしれん。とりあえず線は1本だけにしといてくれ。あとでチェックするけんな。ほんで、2年はここでミキサーの設定見とけよ、来年はお前らがやるんやけん——」

それはワタさんがカリスマに変わる瞬間だった。

ワタさんの話が終わると、1年生らしき3人が真っ先に講堂の中に散る。ひとりにはミキサー

の横に置いてあった10本のマイクスタンドを全部ステージの上に運び、マイクを順番にセットしていく。あとの2人はステージ横の準備室からケーブルの束をずるずると引きずってくる。3年生の2人が横について一緒に作業をしている。

「さーて、ほんならミキサーの説明をもう1回しとこかのう。ほんまはシールド全部差してからがええんやけど、待ってられんけん電源入れるけんの――」

僕とヨシヒコは2年生の後ろでワタさんの説明と一緒に聞く。はっきり言って文化祭なんてそっちのけだ。焼きそばなんて、もうどうでもよくなってくる。

【モニター】

ひと通り説明が終わると、みんながばらばらになって作業を始める。僕たちはミキサーを移動するのを手伝う。一番後ろの壁のすぐ手前に長机を2つ置き、その上にミキサーを担ぎ上げる。講堂の中が全部見渡せる位置だ。

「ワタさん、あんなん1回見ただけで来年できるん？ 俺ぜったい無理やで」と僕はワタさんに話しかける。

「そらちゃんとしたマニュアルがあるけんの。なんかわからんことがあったら顧問もおるしな」

「へえー、マニュアルなんかあるんや」

「おう、やけどめっちゃ古いで。間違いだらけやったけん俺がだいぶ直したしな」

「それにしてもすげえ機材だな」とヨシヒコ。

「いやあ、これでも足りんくらいや。全部騙し騙しやで、力づくでやりよるわ。今年はギターの多いバンドがおるけんシールドが足らんで困ってのう。しゃあないけんうちから私物持ってきたわ。マイクもメーカーがバラバラやし、エフェクターも最小装備やしな。なんとかならんかと思うけど、まあしゃあないわな」

「あの真ん中のやつがモニターやろ？」と僕。

「そうや。たぶん右のやつが壊れとるけん今年はひとつやな」

「モニターってあれだろ、ステージで音聴くやつだろ？」とヨシヒコ。

「そや」

「ひとつで大丈夫なのか？」

「ギリギリやけどな、メインの音もかなり聞こえるけん」

ヨシヒコが言うとおりに、モニターはステージ上で音を聴くための機材だ。観客はステージ横のメインスピーカーから出た音を聴くことができるが、演奏している本人たちはスピーカーの裏側にいるようなもので、観客と同じ音が聞こえるわけではない。ギターやベースはアンプから出た音をすぐ前で聴いているからいいが、ヴォーカルとキーボードにはそれがいいから、下手をするとも自分の声や弾いている音が全然聞こえないということもあり得る。それを補うのがモニターというわけだ。モニターは大抵ステージの一番手前の縁のところに置いてあって、

歌手がよくそこに足をかけて歌っているのを見る。あの黒い箱から、歌っている自分の声が聞こえてくるのだ。

マイクのセッティングが終わり、すべてのシールドがミキサーにつながると、いよいよ音出した。ワタさんは1年生をステージの上に立たせ、左の方にあるマイクから順番にマイクチェックをする。

「あ、あ、ツー、ツー、マイクチェック、マイクチェック——」

マイクの1本1本に、ミキサーのチャンネルが割り当てられている。スタジオ15畳のミキサーは8チャンネルだったが、このミキサーは何と32チャンネル。単純に32本のマイクを同時にコントロールできるということだ。

「モニター出とるかー」ワタさんは手元のマイクで喋っている。声はメインスピーカーから出ている。

「はい、出てまーす！」

「ほな次、ベースアンプんどこ。それもうちよつと正面にできるか？」

「はい！　ちよつと待ってくださいーい」

僕はその作業を見ていて気になったことを質問する。

「ワタさん、アンプの前に置いたマイクはなんするん？」

「アンプの音を拾うんや。アンプだけやと全然ボリューム足りんけんな」

「え？　そういうときマイク使うんや。ベースも？」

「そ」

講堂くらいの広さでも、ステージに置いたアンプの音だけではパワーが足りないし、いずれにしてもミキサー側でバランスを取るためには、ギターとベースの音もミキサーに入ってこなければいけない。それは知っていたが、アンプから出た音をマイクで一旦拾って、それをミキサーに届けるとは。僕はてっきりアンプに出力端子があつて、そこからシールドが伸びているのかと思っていた。ワタさんによれば「まあ他にもやり方はあるんやけど」ということだった。

最後に残ったのはドラムだった。2年生の放送部員がドラムのところに座り、スティックを持って構えている。今日はギターやベースがないから、本格的な音チェックは明日のリハーサルのときにやるそうだが、ドラムだけは実際に音を出してチェックするみたいだ。ドラム用のマイクは4つ。バスドラの正面にひとつと、スネアの近くにひとつ、そして左右のシンバルの上にひとつずつ。

「音出しまーす」

ズン、チャ、ズン、チャ——

かろうじて叩けている、といった感じの簡単な4ビートだ。ときどきタムやシンバルを叩きながら、ゆっくりと叩き続ける。ワタさんがミキサーのツマミをいじると、スピーカーから出る音のボリュームが変わる。狭いスタジオで聴くとあれだけうるさいと思っていたドラムもこの講堂では完全にボリューム不足で、絶対にマイクが必要なのだ。これがPAの威力なんだな

と僕は思った。

「よっしゃあ、ドラム終わりや」

マイクのチェックが全部終わると、今度はモニターのチェックをするべく、もうひとつのモニターに交換してみる。

「どうや？」

「えーと、出てませーん！」

「了解。戻しといてくれ」ワタさんがこっちを見て言う。「マイキー、やっぱりモニターひとつやけん、シンセはできるだけヴォーカルに近いところがええわ。離れると全然聞こえんかもしれん、リハのときにチェックしといてな」

「オーケー」

楽しい時間はあつという間に過ぎる。PAの準備が終わって外に出ると、もう日が暮れかかっていた。焼きそばはとうの昔に店じまいをして、みんなが帰ろうとしているところだった。平尾が僕を見つけて駆け寄ってくる。

「マイキーどこ行つとったん？」

「ヨシヒコと講堂におった」

「ああつ！ 放送部が準備しよん見よったんやろ」

「ようわかったなあ」

「せこいわー、俺ずっと焼きそば焼いとったのにー。抜け駆けや抜け駆けやー」

そのすぐあとで、ヨシヒコが屋台の番を平尾に無理やり押しつけていたことが判明。「すぐ戻るって言うたのに最後まで戻らんかった」と平尾が不満をぶちまけていた。他にもまだ何か弱みを握られているんじゃないかと僕は思った。

一九九五年・九月二十五日(日) 大阪府・枚方市 枚方市立第二中学校

日曜日は昨日より早く目が覚めた。寝返りを打って布団を深くかぶり直したけど、頭が冴えてしまって寝られそうもなかった。布団から出てカーテンを開けると、外はまだ薄暗かった。

朝一番でシンセを車で学校まで運んでもらうことになっていた。肩から提げて持って行けなくもないけど、本番前に何かあったら困ると思い、親に頼んだ。

「お母さんも観に行くけんね」と朝ご飯の仕度をしていた母親が言った。

「ええーっ、来んでええわあ」

「なん言うとの、今年に行くで絶対」

「講堂めっちゃ混むけん入れんで」

「かまん、外で聴くけん」

「そんな意味ないやんか」

「ほんならどつか入れてや。城崎の母や言うたら入れるんとちゃうん？」

「そんなわけないやろ！」

バンドをやっているとところを家族に見られたくない、と中学生バンドマンたちはみんな思っているんじゃないかと思う。それはバンドに限らず、ピアノの発表会でも弁論大会でも同じことなのかもしれない。でも兄だけは別だった。兄は今日のスペシャルゲストだ。

「兄ちゃん何時に来るって言うとった？」

「昼ごろ駅に着くけん、その足で行くってよおったで。お母さんも一緒に行くけんね」

「はいはい」

学校に着いたのは8時前だった。シンセを車から降ろすとすぐに講堂に運び、準備室の隅に置いておく。講堂には放送部の1年生が2人来ていて、ミキサーのところで雑談をしている。

2人が僕を見つけ、「おはようございます」と礼儀正しい挨拶をする。僕も「今日はよろしくな——」と声を掛ける。まるでアーティスト気分だ。

昨日のような準備が何もないというのに、教室の中はすでに賑やかだった。何となく女子の髪型に気合が入っているような気がする。言うまでもなくダンスパーティーのせいだ。考えてもみれば、3年間のうちでたった1日、しかもたった1時間のイベントだというだけで特別なのに、それが異性に急接近できるチャンスとあれば、興味がない振りをするのは逆に不自然かもしれない。たとえ否定的な態度を取るにしても、だ。僕はその教室の雰囲気を知った瞬間、「やっぱりダンスパーティーに参加したいかも」という素直な気持ちがあることに気がついた。そして「噂じゃちよっとくらい抜け出しても大丈夫だって話なんだよ」というヨシヒコの言葉を思い出す。

——俺もリハーサル抜けてこようかなあ。

【リハーサル】

担任から短い朝の挨拶があったあと、ついに文化祭2日目がスタート。

昨日と同じように各クラスの出し物を見て回る時間のはずだが、みんなの気持ちは完全にダンスパーティーにフォーカスしている。執行猶予のように感じられる11時までの2時間。「殺すなら殺せー！」と言わんばかりに虚ろな目をしている男子が廊下にたむろしている。文字通り命を賭けているのだ、鹿鳴館に。

リハーサルのある僕たちはすぐに講堂に移動。ヨシヒコと平尾は楽器をみんなに見せつけながら教室を出る。敬ちゃんはスティックの入った袋を持って、吹奏楽部の演奏で使うスコアを見ながら歩いている。

講堂にはすでにたくさんの人が集まっていた。もちろん全員関係者で、出演者と放送部員、

それに数名の文化祭実行委員。

リハは全体の最後の部分にあたるバンド演奏から始まり、プログラムを逆にたどる形で進む。プログラムの最初の吹奏楽部の演奏がリハの最後になり、そのまま本番を迎えるというわけだ。ステージの上は、昨日機材のチェックをしたバンド用のセッティングのままだ。

「おい、マイキー」ヨシヒコが小声で僕に話しかける。「これなら11時には俺たち終わるな。ダンス行けるぜ」

僕は小さく首を縦に振って答える。

「そしたら最初のバンドの人、準備お願いしまーす」と放送部の誰かが叫ぶ。2年生のフォーク・バンドのメンバー2人がギターを持ってステージに上がる。

リハで演奏するのは1曲だけ。全部演奏していたら本番と同じだけ時間がかかってしまうからだ。僕たちはあらかじめ『ガンダーラ』にしようと決めていた。普通に考えれば難しい方をやっておきたいと思うところだろうけど、それよりも本番まで秘密にしておきたいという思いの方が強い。出演者同士とはいえ、この場にいる50人にさえ演奏曲を知られたくないのだ。

でも聴く側に回ると、その気持ちが全く逆になる。少しでも早く他のバンドの演奏を聴いてみたいという気持ちが勝つ。だからリハなのに妙に真剣に聴いてしまう。

2人が演奏したのは藤井フミヤの『True Love』だった。ギターは2人ともそれなりに上手だったけど、コーラスがひどかった。メインヴォーカルがせっかくいい声なのに、もうひとりがそれをさっぱりダメにしていた。隣でヨシヒコも同じようなことを言っていた。

「ヨシヒコ、この曲Cメジャーやで。ワンコーラスの間に黒鍵が3回しか出てこんけん、めっちゃ簡単なんや」

「知ってるぜ。最初のコードはCアドナインス」

「お、さすが」

ミキサーのところに座っているワタさんが、演奏を聴きながらときどきボリュームや音質を調整する。リハーサルは、演奏だけでなく機材のテストも兼ねているのだ。

演奏が終わると、放送部員がステージからマイクスタンドを2本下げる。そしてサウンズのメンバー6人がステージに上がる。ドラム、ベース、キーボード、そしてギターが3人。うちひとりがギター・ヴォーカルだ。キーボードの女の子が使っているのはヤマハの新しいシンセだった。雑誌の広告で最近よく見かけるやつだ。

10分で準備が終わり、いよいよライバル・ミスチルの演奏。

「じゃあ『クロスロード』やります」とヴォーカルの男の子が言う。

「曲名言わなくていいつつうの」とヨシヒコが隣でぼやく。

ドラムのカウントが入る。

カッ、カッ、カッ、カッ――

イントロの途中で平尾が言う。

「ここんとこさ、『およげたいやきくん』のイントロに似とらん？」

「は？」

「いや、なんでもない」

メインスピーカーから元気のいい声が流れる。

ルッキンフオーラブ　いまたちならつぷ　まちなーかでくちずさむう――

「やべえっ！」

かなりやばい。かなり音痴。やばすぎる。

「やばくねえ？」

「きついね」

あちこちから失笑が聞こえてくる。ステージ下は暗いから、ステージの上からはこっちの様子がわからない。ヴォーカルの男の子は悦に入った表情で歌い続けている。

肝心のサビの入りのところで全体がヨレる。演奏がバラバラ。どれかのギターが常に一步先を弾いているように聞こえる。声量はあるが、サビの一番高い音が歌えていない。

「ヴォーカルの子、ギター弾いとる？」と敬ちゃん。

「いや、弾いてねえ。見かけ倒しかよ」とヨシヒコ。

『『イノセントワールド』で弾くんかなあ』

「それならそっちをやらねえとリハの意味ねえぜ」

「確かにそうやねえ」

サウンズの演奏は何とか終わった。一番右のギターの女の子は最後までずっと下を向いていたから顔がわからなかった。

「えーっとお」とワタさんが手元のマイクで喋る。「ヴォーカルの人はギター弾くんかな？」

「はい、もう1曲のほうで少し」

「ほんならそっちをやってくれんといかんやん」

「あ、そうなんですか？」

それを聞いたヨシヒコがまた笑っている。

リハは着々と進み、いよいよ僕たちの出番がやってきた。リハとはいえ、やっぱり緊張する。生まれてはじめてのステージでの演奏。緊張しないわけがない。

「チェスター・コパーポットさん、お願いします」

僕はステージ袖に準備してあったシンセを移動し、キーボード用と書いたラベルの貼ってあるシールドをシンセに差す。

「ワタさん、シンセの電源入れるで」

「どうぞー」

ステージの上はとても明るい。天井を見上げると、緞帳のすぐ裏側にライトが一行に並んで

いる。ヨシヒコと平尾はもう音を出している。いつものスタジオと音の聞こえ方が全然違う。アンプは2つとも観客側に向かっているから、音が自分の近くで鳴っている感じがしないのだ。唯一こちらを向いているのはヨシヒコの足元にあるモニターだ。

「ヨシヒコ、モニターちよつとだけこっち向けてくれるん」

シンセのボリュームを上げていくと、モニターから少しずつ音が聞こえてくる。思ったよりも音は大きい。放送部員がシンセの前にマイクスタンドをセットしてくれる。声を出してみると、自分の声もモニターからかなりのボリュームで返ってくる。もちろんヨシヒコの声もそこに混じっている。外のメインスピーカーの音がステージの中に回り込んでくるのもちゃんとわかる。

「マイキー、自分の音聞こえるか？」とワタさんが気を遣ってくれる。

「おう、大丈夫やと思う」と僕は答える。スタジオ練習のときにはいつも椅子使っていたけど、本番は立って弾く。ちゃんと立って弾く練習もしてきた。

「平尾、大丈夫か？」とヨシヒコがマイクから顔を背け、こっちに向いて言う。

「いけるで」

「敬ちゃん？」

「いけるよー」ドラム用のコーラスマイクもちゃんとセットされている。

「じゃあいきます」ヨシヒコが今度はマイクに向かって喋る。

カッ、カッ、カッ、カッ――

演奏は上々だった。モニターからは自分の声もシンセの音もちゃんと聞こえてきた。ときどきステージの下に目をやると、暗がりの中でみんながじっと聴いているのがわかる。サビに入った瞬間、何人かが「あっ！ あの時曲や！」という感じで横を向いたり誰かに話しかけるのが見える。

曲が終わるとパラパラと拍手が鳴る。感触は良かった。

「ありがとうございます。本番もよろしくお願いします」とヨシヒコがPAさんにお礼を言う。他のどのバンドもやらなかったことだ。

「どうやった？」ステージを下りたところで平尾が僕に聞く。

「めっちゃええ感じや。色んなところから音が聞こえてきて気持ちよかった」

「すごいなあ、俺そんな余裕なかったで。ようけ失敗したし」

「大丈夫やて」僕はそう言いながら、リハに簡単な『ガンダーラ』を選んだのは正解だったと思った。『ホーリー・アンド・ブライト』ではこんな余裕は絶対になかっただろう。

「ドキドキした」と敬ちゃん。その割にはしっかりコーラスもやっていたし、練習通りだったのではないかと僕は思う。

リハの後、ヨシヒコはあまり喋らなかった。意外と緊張していたのかと思ったけど、どうやらそうではないみたいだ。そう、次はヨシヒコにとってももうひとつの本番、ダンスパーティーの時間なのだ。

【学園天国】

僕とヨシヒコが適当なことを言って講堂から抜け出してきたとき、すでにダンスパーティーは始まっていた。鹿鳴館の周りには人だかりができていて（2階席に入れなかった1、2年生だ）、中から賑やかな音楽が聞こえてきた。僕とヨシヒコは正面入口に回り、扉の前に立っていた文化祭実行委員に事情を説明して中に入れてもらった。

鹿鳴館の中ではものすごい数の人がうごめいていた。そして言うまでもなく、ものすごい熱気が溢れている。笑顔と見栄と勇気が武器。そんな文化的な戦争。でもそこは学園天国。見ているこつちが恥ずかしくなるような光景だった。

壁際のカウンターテーブルには発射待ちの予備軍と、一旦打ち終えて戻ってきた先鋒隊が控えている。一部は補給待ちで再出動の準備。そして赤じゅうたんフィールドには不発弾と暴発弾が散在。その中に気が狂ったのかと思うような動きをしている1、2名の核弾頭がいる。パトナーの女の子は明らかに嫌がっている。

ヨシヒコは壁に沿ってささっと移動し、鹿鳴館の中心部が見える位置へ。「あれ、マイキーも来たのか」と今頃になって気づくほどテンパっている。

「あ、いたいたっ！」

ヨシヒコの視線の先には本日のターゲットが。ターゲットはサッカー部のキャプテンと踊っている。ヨシヒコは一番近い位置のテーブルについて、グラスに注いであったノンアルコールシャンパンを飲む。

僕は「それにしてもすごい雰囲気やのー」と害のないコメントをしてみるが、ヨシヒコは何も言わない。仕方がないので僕は黙ってお菓子をつつく。そして1分ほどして2人が離れた瞬間、ヨシヒコがものすごい勢いで飛び出した。

一直線。その言葉がぴったりだった。照準完璧。誤差なしで着弾。ひと言ふた言交わしたあと、2人が手をつないで踊り出す。最初にヨシヒコの体がくるっと回るところで、僕と目が合う。その顔は酔っ払ったときのように真っ赤だった。その瞬間、僕の心の中で抑えていた感情が噴き上げる。

——お、俺も、俺も井上さんと踊りてえっ！

これがジェラシーか？ 禁断の恋か？ 急に喉が渇く。シャンパンを一気飲み。もう一杯も一気飲み。隣のテーブルに移ってもう一杯。

そこで1曲が終わり、ほんのわずかな間ができる。その瞬間、ヨシヒコの手が井上さんから離れる。2人がお辞儀をしてサヨウナラ。ヨシヒコはそのまま真っ直ぐ出口に向かって歩き出

す。僕のことは完全に忘れていたみたいだった。

僕はしめた、と思った。このままヨシヒコが僕のところに帰ってきたら、僕はヨシヒコと一緒に鹿鳴館を出ていただろう。

僕は大きく息を吸い込んで、ずっと赤じゅうたんのエリアへ歩み寄る。井上さんが壁際へ向けて歩き始めたところで、僕と目が合う。僕は1歩、2歩と着実に近づく。向こうもゆっくりとこちらに向けて歩いてるように見える。

真正面。でも僕は何も言えなかった。口が動かなかったのだ。手は汗ばんでいるし、真面目にダンスの練習をしていないから、体をどう動かしていいのかとつきにわからない。でもとりあえず手だけは握る。

頭の中は真つ白だった。何に緊張しているのかよくわからない。適当に体を動かしていると、仕舞いには自分が何をしているのかわからなくなる。踊っているのか、手を握っているのか、回っているのか、それさえもわからなくなる。ときどき井上さんと至近距離で目が合い、さらに緊張感が増す。

そうやって自分の気持ちの整理がつかない間に、曲の切れ目がやってくる。自然と動きが止まり、「終わりですよ」という空気の流れができる。煮えくり返った僕の脳が「音楽ハ残酷ダネ、マイキイ」とメッセージを送ってくる。

気づくと目の前で井上さんが「じゃあね」と言って腰のあたりで小さく手を振っている。僕は無言のまま小さく笑顔を作り、軽くお辞儀をしてその場を離れる。そしてヨシヒコと同じように出口の扉へ向かって一直線に駆ける。そのときの僕にはヨシヒコの気持ち痛みほどよくわかった。それはあつという間の出来事だった。

「マイキーもどこ行っとったん？」講堂に戻ると、平尾がささと近づいてきて言った。合唱部のリハーサルが終わったところだった。これから吹奏楽部の番だから、敬ちゃんがステージの上にいる。

「トイレや」と僕は嘘を言う。

「なんや、2人とも緊張しとんちゃう？　ヨシヒコくん、またトイレ行つて帰つてこんよ」

「大丈夫やろ。まだ本番まで時間あるし」

吹奏楽部のリハーサルは12時ちょうどに終了。鹿鳴館でも休戦の号令がかかっているところだ。最後の最後に戻ってきたヨシヒコがぼやいている。

「ああーマジ腹いてえ」

どうやらそれはそれで本当のようだった。

【最終チェック】

昼ご飯は自分で作った焼きそばだった。「余りそうやけん食べて、お願い！」と言われて断れ

なかったのだ。頼まれて食べ、しかも自分で焼いたのに、しっかりお金は取られた。材料はクラス費から出ているから材料代も自分で払っているのに。ひどい話だ。

リハーサルが終わったあと講堂の入り口には一旦鍵が掛けられ、関係者は裏口から出入りするように言われる。僕たちは焼きそばを食べ終わると、また1時過ぎに講堂に戻った。本番まではあと1時間弱。講堂の中では放送部員が最終チェックのために忙しそうに走り回っている。ワタさんはおにぎりを食べながらミキサーのところで座っていた。僕はその横に場所を取り、床にあぐらをかいてCDを聴き始める。こっちも最終チェックだ。ヨシヒコと平尾は講堂の真ん中で楽器を提げて何やら話しこんでいる。敬ちゃんは吹奏楽部が集まっているところで部長の話を聞いていた。

「ほんまは照明もちゃんとやりたいんやけどな」とワタさんがぼそつと独り言みたいに言う。講堂の音響設備は確かに立派だけど、照明はたいしたことができない。せいぜいステージ上のライトを点けたり消したりするくらいだ。色つきのスポットライトや、鹿鳴館で使っていたようなミラーボールはない。

講堂の中は午前中よりも暑くなっていた。このまま本番に入って全校生徒が入ってきたら、さらに室温が上がるだろう。ライトが当たるステージ上はさらに過酷だ。僕は近くにいた実行委員をつかまえて、空調を強くできるか聞いてみた。すると「今つけたばかりやけん、そのうち効いてくると思う」ということだった。

2時が近づくにつれ、講堂の外が騒がしくなる。人が次第に集まり始めているのだ。

吹奏楽部の準備はもう終わっていた。緞帳が下りているから見えないが、ステージの上にはパイプ椅子が並べられていて、そこにはすでに吹奏楽部員が座ってスタンバイしている。

2時きっかりに講堂の入り口の扉が開く。光が射し込んできて講堂の中が一瞬明るくなるが、生徒が入り始めるとまた少し暗くなる。アナウンスは何もなく、上履きの足音がバタバタとやかましく響く。それにしてもものすごい人数だ。砂時計の砂が溜まるみたいに前から順番に埋まっていき、すぐに講堂の前半分が人で埋め尽くされる。

【ルパン三世のテーマ】

ボンツとマイクのスイッチが入る音がしたかと思うと、司会の生徒が右の舞台袖から現れ、緞帳の前を通ってステージの中央で立ち止まる。手にはワイヤレスマイクを持っている。

「みなさん、音楽発表会へようこそ！」

おおおおおっ！ と歓声上がる。

「第43回満中文化祭も、残すところあと3時間となりました。その最後の時間を、みなさんとここ講堂で一緒に過ごせることは——」

喋っているのは文化祭実行委員長だ。彼は朝からずっと講堂でこのスピーチの練習をしてい

た。ワタさんの左後ろで、2年生の放送部員がカメラを回している。

「――さて、それでは最初のプログラム、我が満中が誇る吹奏楽部による演奏で、『ルパン三世のテーマ』。よろしくお願いします！」

割れんばかりの拍手に続いて緞帳が上がる。楽器にライトが当たってステージ全体が金色に光っているように見える。

速いカウント。もちろん敬ちゃんだ。

カッカッカッカ――

言わずと知れたルパン三世のテーマ曲だ。

「真っ赤な――バーラーは――あいつの――くちびる――」と歌いたくなる。みんないきなりノリノリだ。実際に誰かが歌っている声も聞こえてくる。

おーそこには――自分の――世界が――ある――たとえるなら――

僕は敬ちゃんの動きを見ていて気がついた。この曲は16ビートだ。ゴダイゴにはなかった速いビート。ハイハットを両手で叩いている。チキチキチキチキ。スネアもちろん叩かなければいけない。

「どうやっとなん？」

僕は隣にいたヨシヒコに聞いてみた。

「こうやってやるんだ――」ヨシヒコは手振りで説明してくれた。「右左右左ってやってて、ときどきハイハットを飛ばしてその代わりにスネアを叩く。な」

「なるほどお、かっこええなあ！」

それにしても大変そうだ。チキチキチキチキ。こつちがしんどくなってくる。

吹奏楽部の演奏は全部で5曲。残りの曲は聴いたことはあるけど曲名を知らない曲ばかりだった。古い映画みたいな曲、と言ったらいいのだろうか。チャップリンが出てきそうだった。ルパンで盛り上がっていた聴衆も少し落ち着きを取り戻す。

最後の曲が終わると、全員が立ち上がってこちらに礼をする。それから各自が自分の椅子を持って左の袖へとはけ、すぐに合唱部が入れ替わりで入ってくる。緞帳の上げ下げはない。

合唱部の部員は3学年で10人しかいない。15年ほど前に県大会3年連続優勝という輝かしい成績を収めたことは過去の栄光として語り継がれているが、今や見る影もない。

そんな合唱部のコーラス。ちよつと気を利かせてBOYZ・II・MENのヒット曲や『となりのトトロ』を歌ったりしていたけど、歌がダメではどうしようもない。テナーとバスがひとりずつというのが致命的だった。

僕にはその人気の低迷と実力の低迷、どちらが先でどちらが後かはわからない。わからないが、現在はどちらも低迷中だということが誰にでもわかるような30分だった。

【およげ！ たいやきくん】

さて、いよいよ僕たちの出番だ。前座（と言っては悪いがまさにそんな感じ）の前半が終わり、再び司会者が現れる。

「皆さん、長らくお待たせいたしました！」

ワアアアアア！

すごい盛り上がりだ。一体となった群衆。騒然とする講堂内。毎年のこの時間を楽しみにしている者。生まれて初めてロック・バンドのライブを観る者。ベースとギターの違いのわからない者。どうやってはしやいだらいいかよくわからずきよろししている者。女の子に体を密着させるのが目的の者。他にも色々いる。でもみんな一様に田舎者の満濃町民。僕は全員を見渡せる位置に立って、その様子を眺めていた。前から見たらみんな違うけど、後ろ姿だけ見たらみんな同じだった。それが僕を少しだけ安心させる。

僕は兄を探した。ヒト、ヒト、ヒト。アタマ、アタマ、アタマ。しかも暗い。これでは見つけれられそうにない。でもどこから見ているだろう。兄のことだから約束は守る。本当はここに呼びたかったが、人が多すぎてとてもじゃないけど無理そうだ。

最初のフォーク・バンドの演奏が始まる。英語の曲を歌っているが、誰の曲かわからない。ちらっとワタさんの方を見ると、ワタさんが厳しい顔をしてフェーダーに指をかけている。ときどき右手でパネル上部のツマミを少しだけいじって、またもとの姿勢に戻る。まるで職人だ。僕の少し前のあたりで、ヨシヒコと平尾が並んで立って演奏を聴いている。楽器は準備室に全部置いてきているから、2人とも何も持っていない。僕たちは3つ目のバンドが終わったら準備室の裏口から入ればいいことになっている。

2曲目の『True Love』が終わると大きな拍手が起こる。ステージの2人がこちらに手を振ってにこやかにステージを去る。

そしてミスチルバンド登場。

演奏前の準備にはそれなりに時間がかかる。ドラムはスネアの位置やハイハットの位置を微調整する。キーボードはシンセを運んできてシールドをつなぎ、音色をひととおり鳴らしてみる。何回スタジオで出した音であっても、ちゃんと音が合っているかはやっぱり気になるものだ。ベースとギターはシールドを差し、アンプから音を出しながら足元のエフェクターをチェックする。サウンズにはギターが3人もいるからなおさら時間がかかる。ヴォーカルが神経質そうにマイクの位置を調整している。色々な楽器の音がバラバラと絶え間なく鳴る。

6人がステージに現れてから10分が経過。片付けのことを考えるとすでに制限時間いっぱいだ。そのとき誰かが僕の左肩をとんとんと叩く。顔を向けると、目の前に井上さんが立っている。

「あつ」僕はとっさにそれしか言わなかったけど、心の中では「さつきはどうも」と付け加えている。もちろん井上さんには聞こえないが、彼女も特に何も言わない。

と、そこでメインスピーカーから大きな声が。

「みなさーん！ サウンズでーす！」

ワアアアアアアアア！

司会者が出てきたときより声援が大きい。クラスメイトたちだろう。僕も井上さんも思わずそっちに視線が移る。

「それでは僕たちの練習の成果、見てください！」

カウント。

カッ、カッ、カッ、カッ――

『イノセントワールド』だ。難しい方を1曲目に持ってきたみたいだが、どうしてこの曲順にしたのが謎だ。簡単な方からやればいいのに。そして歌がうまくなるはずもなく、やっばり下手。

ひでえなあ――と顔をしかめたところで、僕はまた肩を叩かれる。

「もう少しやね」

井上さんだった。せつかくの井上さんの声が演奏がうるさくてちゃんと聞こえない。

「うん。この次のバンドが終わったら行くんや」

「ねえ、これミスチルやろ？」

「一応な」

「ミスチルに聞こえんね」

「最悪や。まあ2年生やし、しゃあないかのー。俺らはもつとうまいで」

「楽しみにしよるけん」

「うん」

その会話は、もし場所がここでなければ壁を通り越して隣のクラスまで聞こえるような大きな声だった。でもそのくらい声を出さないと、こんなに近くで話していても聞こえないのだ。そのくら講堂の中はうるさい。井上さんの唾が飛んできそうだった。ウェルカムだけど。

サウンズの演奏はどこまでいっても下手だった。聴いていると僕の方がなぜか自分のことのように恥ずかしくなってくる。弟分みたいで親近感が湧いてきているからか？ いや、違う。井上さんが隣にいるせいだ、きっと。僕は井上さんの耳を塞ぎたくなった。あるいは演奏をやめさせるか。

いーだろー ミスタァーマイセツ いーつ、つ、い、いーつうわっ！

ガラガドカズンチャツ！

楽器がいつぺんに壊れたような音がして演奏が止む。

——ん？ 僕の心の声が届いたのか？ 場内がざわついている。笑い声も聞こえる。

「あつ——すいませつ」ヴォーカルの子がたじたじだ。「あつ、そ、終わりです！」

どうやらヴォーカルが歌の入るところを間違えて、それに何人かがつられて演奏が止まってしまったようだ。

「あちゃーっ」僕は天を仰いだ。前にいたヨシヒコはもっと大きなアクションで天を仰いでいた。「ジーザス！」と言ったのが聞こえたような気がした。

「どしたん？」と井上さん。

「まちごうてしもたんや。あそこ、ひとつ間があるところやのに」

「ふうん」

井上さんは何も言わないが、横顔が明らかに幻滅している。幻滅されたのは僕ではないが、なぜか僕の気持ちも沈む。しつかりしろ、サウন্ズ！

「気を取り直して、次の曲いきますっ！」ヴォーカルの子の立ち直りは早い。何もなかったみたいに次の曲のカウントが始まる。

カッ、カッ、カッ——

『クロスロード』のイントロ。確かに『およげたいやきくん』に聞こえなくもない。

演奏は大惨事の後にしてはまじだった。リハーサルするときよりちゃんと聴けた。緊張していたのが、笑われて吹っ切れた感じだ。

無事演奏が終わると、客席からは大きな拍手。6人が両手を挙げて笑顔でそれに応えている。

「じゃあまたね」井上さんがそう言って、友達のところへ戻っていく。僕は「またね」と言って手を振る。その様子は誰にも見られなかったみたいだ。

【ファンサービス】

さあ、いよいよこの時がやってきた。5ヶ月。1年の約半分を僕はバンドに費やした。その集大成。1回きりの本番。僕は何度も深呼吸をしながら、準備室で前のバンドの演奏を聴いていた。

「ごめんごめん」そう言いながら敬ちゃんが部屋に入ってきた。「真ん中あたりでおったら抜けれんくって。すごい人やね」

「お疲れさま。ルパン良かったで、かつこよかった」と僕は感想を言う。

「ほんま？ あの曲が一番大変なんよ」

「16ビートやろ？」

「うん。手がつるかと思った」と言いながら敬ちゃんは右腕を振っている。

落ち着きがなかったのは平尾だ。さっきから何度もズボンで手を拭いている。ヨシヒコは黙ってチューニングをしている。チューナーのLEDの光が右へ左へ動いている。

演奏が2曲目に入る。講堂の中は静かだ。バラードをみんながしんみりと聴いている。その静けさで余計に緊張する。息をひそめて隠れているみたいだ。

「あ、象が増えとる」

僕はベースにペイントしたピンクの象が2匹になっているのに気がついた。

「う、うん。昨日描いたん」平尾が顔を上げて言った。「寝れんかったけん夜中に起きて描いた」
「なんだよ、それで寝不足なのかよ」

ベースのボディをよく見ると、象の右上あたりにピックが張り付いている。

「平尾、そのピックなに？」と僕は聞いた。

「本番中にピック落としたときの予備。ヨシヒコ君がやれって」

「俺なんか5つあるぜ」ヨシヒコがギターをこっちに向けて言った。確かにボディの上のほうにピックが5つきれいに並んでいる。両面テープでくっつけているようだった。「最後に全部投げらんだけ」

「誰に？」

「俺のファン」

「そんなんおるん？」

「いるに決まってるんだろ。当然ファンサービスしねえとまずいだろ」ヨシヒコは臆面もなくそういうことを言う。たいした自信だ。

「じゃあ皆さん、準備してください」すぐそばに座っていた文化祭実行委員が小声で僕たちに向かって言う。

「よしっ！」僕がひとりで気合を入れると、ヨシヒコが「いっちょ円陣組むかあ！」と言ってみんなを集めて輪を作る。

「チェスター・コパーポット初ライブ！ 気合入れていくぞお！」もちろん小声だが、迫力は十分だ。

「おお！」それも小声だが、4人の息は合っていた。

そして僕たちはステージへ向かった。

【チェスター・コパーポット】

パチパチパチパチパチ！

先頭の平尾がステージに現れると、客席から大きな拍手と声援が沸き起こる。ヨシヒコが続き、敬ちゃんはドラムセットへ。僕はシンセを移動させ、すばやくシールドを差す。シンセの電源を入れ、ボリュームを印をつけておいたところまで回す。これで準備完了。ちよつとだけ弾いて音が出ていることだけを確認すると、それ以上は触らないようにする。演奏に入るまで、

敬ちゃんは僕の方を見て目で笑った。

「みなさん！ こんにちは！ チェスター！ コパーポットです！」

ワ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
！

「それでは1曲目！」

僕は両手を鍵盤に乗せる。『ガンダーラ』のイントロはアコギの音だ。

カツ、カツ、カツ、カツ

そこーにゆーけばあー
 どーんーなゆーめもー
 かーなうとーいうよー

イン ガンダールア ガンダールア ゼイセイ イトウワズイン インディア――

僕はAメロを弾きながら最初にスタジオでこの曲を歌ったときのことを思い出していた。平尾の持ってきたCDを再生しながら、ヨシヒコと2人でカラオケ気分で歌ったときのことだ。

-126-

サビのコーラスがびったりはまっているのが自分でわかる。スタジオ練習のときには自分の声は他の音にかき消されてあまり聞こえなかった。それに敬ちゃんがコーラスに入ってから、マイクの前で歌ったのはほんの数回だ。

最後のサビの繰り返し。敬ちゃんのコーラスもちやんと聞こえている。実は敬ちゃんは歌がうまい。女性コーラスが入るだけで、断然サビは華やかになる。繰り返しは3回。そしてイントロに戻る。イントロの終わりでびたつと音を止める。余韻が少し残る、ちよつとマイナーな感じの終わり方。

そして拍手拍手の大嵐。ヒューヒューと口笛があちこちで鳴っている。ヨシヒコが「ありがとうございまーす！」と大きな声で応える。

ジャーンとギターの音がひとつ鳴ってすぐに消える。

「それではみなさん、最後の曲になりましたが」そこで少し笑いが起こる。僕はシンセの音色を切り替え、スタンバイ。カウントはすぐだ。

「最後まで聴いてくれてありがとう！ チェスター・コパーポットでした！」

申し合わせていたとおり、間を空けずにここでカウント。

カッカッカッカッ

トゥルトウトウ——ターツタツチャツチャラ

そのフレーズが鳴っただけでまた歓声が上がる。たぶんこのイントロだけでわかるのはほとんどが男子だと思う。みんなの頭の中に『西遊記』が甦ったのが見えたような気がした。はに丸王子がコンコンコンコンと気持ちのいい音を響かせる。イントロの終わりはスネア。そして歌。

とおーいー むかしのはーなーしーで あたらしいーこのーほしーが——

よく見えないけど、講堂の真ん中あたりで誰かが飛び上がっている。客席の動きが大きくなっているように見える。黒い頭が左右にうねるように動いている。

僕たち4人の演奏を200人以上が聴いている。僕たち4人のことを200人以上がじっと見ている——

ホーリーー ホーリエンブライ

アスターイズシャーニエン ホーリエンブライ

ホーリーー ホーリエンブライ

ネバーレリーリゴウ アウトーヨウサイツ

平尾と敬ちゃんが作った音の土台の上で、僕とヨシヒコの音が踊る。ベースとキックが支え、シンセとギターと歌が跳ねる。確かにそれはゴダイゴの曲をコピーしただけのコピーバンドで、演奏しているのは誰かが作った他人の曲だ。歌詞だってメロディだって他人のものだ。でも確かにここでは、僕たち4人が曲を作り上げている。同じテンポで、同じリズムで、同じコードで、一つの曲を作り上げている。これはチェスター・コパーポットのライブ。チェスター・コパーポットの演奏。チェスター・コパーポットの曲。

僕はわかった。

音楽を奏でるという体験は、ステージの上でこそ至福の境地へと到達できる。

ここは世界で一番幸福な場所。僕たちはいま、その場所にいる。

演奏が終わった瞬間、ヨシヒコが両手を挙げて何かを喋った。僕は両手を鍵盤から離れた。平尾がベースを片手に持ったまま誰かに手を振っていて、敬ちゃんも手の代わりにスティックを振っている。僕も右手を上げて、歓声に応えた。胸が熱くなった。ステージ下から沸き起る歓喜の声は、いつまで経ってもやまなかった。

幕に隠れてしまうと、ステージの暑さと緊張から開放されてすつと気持ちが楽になる。それと同時に色んな思いが押し寄せてきて、体が張り裂けそうになる。振り返ると、空っぽのステージが次の演奏者を待っていた。

こうして、僕たちチェスター・コパーポットの初ライブが終わった。

【スタジオ15畳】

翌週の日曜日に、僕たちはスタジオ15畳に集まった。機材を片付け、家の掃除するためだ。アンプやミキサーの電源コードを抜くのは実に5ヶ月ぶりだった。アンプの裏側やスピーカーの上にはかなり埃がたまっていた。僕たちはそれぞれが使った機材をハタキと濡れぞうきんで丁寧に掃除をした。さすがのヨシヒコも手を抜いている様子はなかった。開けた窓から気持ちのいい秋風が通る。外にはまだ夏の陽気が残っていたが、畳の部屋は涼しい。春夏秋冬と3つの季節を過ごしたこの場所を、僕はいま手放そうとしている。

途中で一度休憩をしたときに、ばらしている途中のドラムセットを見て平尾が言った。

「ドラムって、この状態やと寂しいね」

「そうやね」と敬ちゃん。

シンバルとハイハットとスネアが取り外された状態のドラム。残っているのはバスドラとタムだけ。ペダルも外されているから、もう音は出ない。フルセットで置いてあるときはあんなに勇ましかったドラムが、今はただの鉄くずに見える。どこかで早くもとの形に戻してもらって、スティックで思いつき叩いてもらえよ。そう言いたくなるような姿だった。

「ジュース買ってくるで」

「ええね。俺ナタデココ」

「私ウーロン茶」

「アイスコーヒー」

僕は何度も通った自動販売機までの道を歩いた。道の右側には満濃池から引いている用水路があつて、水が滔々と流れている。用水路の向こうには、稲刈りを終えた田んぼと、まだ黄色い稲穂が残る田んぼが入り混じって見える。米の収穫が本番を迎えているのだ。

自動販売機の前。いつも押すボタンが赤く点灯している。ナタデココが売り切れていた。

僕はライブのあとで井上さんが声を掛けてくれたときのことを思い出す。親の車にシンセを積み込んでいるときだった。

「かつこよかったよ、城崎君」

井上さんはその一言だけを言って、すぐに友達のところへ戻って行った。僕の人生で一番嬉しかった一言だった。

「平尾、ナタデココ売り切れやった。代わりに麦茶買ってきた」

「ありがと。飲みすぎたんかな」

「そうかもしれん」

機材は明日うどん屋のおじさんが取りに来てくれることになっていた。玄関先に機材を集め、最後に掃除機をかけると片付けは終わった。ちゃんと気をつけていたつもりだったが、畳の上にはキャスターやドラムの跡がうつすらと残っていた。

戸締りを確認して外へ出ると、平尾が玄関に鍵を掛けた。それはスタジオ15畳との別れの瞬間だった。

「一九八六年三月 平尾と別れ」

話は翌年の3月に飛ぶ。

先週、ようやく公立高校の入学試験が終わった。学年としての全体的な受験の結果は例年より良かった。7割の生徒が第一志望の高校に合格し、進学を希望していたほぼ全員が高校に上がることになった。その中であつて、僕と敬ちゃん第一志望に無事合格。平尾は当日風邪を

引いてしまつて本来の力を出せず不合格となり、ヨシヒコが受験した私立高校に進むことになった。

ヨシヒコが北海道に帰る。

そのことを僕が聞いたのは平尾からだつた。合格発表のあと、落ち込んでいた平尾を慰めに行つたときのことだ。

「ヨシヒコと一緒にやけん、またバンドできるなあ、平尾」

そう言つた僕に、平尾が教えてくれた。

「マイキー、実はヨシヒコ君、北海道に帰るんやて」

「え？」

「俺、前から知つとつたんやけど、口止めされとつたけん――」

それは合格の喜びが吹き飛んでしまうようなニュースだつた。僕は平尾を慰めにきたことも忘れ、しばらく黙り込んでしまつた。

「俺も聞いたときはびっくりしたけど、しゃあないよね、家のことやし」

「いつ知つたん？」

「夏休みの前」

「そなん前？」

「うん。やけんヨシヒコ君、このメンバーでやるんは最後なんやつていつも言うとつた」

「そうなんか」

神社の前で井上さんに話し掛ける作戦を立てたとき。あのときには、もう決まっていたことなのだ。合宿のときも、ライブのときも、受験勉強の間も、ヨシヒコはそんな素振りを全然見せなかった。

でも今思い返してみれば、ひとつだけ氣になっていたことがある。それは文化祭のライブが終つたあとのことだ。

ステージ裏の通路を通つて一旦講堂の外へ出てから4人で手を取り合つて喜び、一息ついて講堂に戻つたときには最後のバンドの演奏が終つていた。司会者の最後の挨拶が終つて講堂を出たところで、僕は兄と母親を見つけて声を掛けた。兄が「とにかくよかった」と手放しで褒めてくれ、僕は泣きそうになった。勢いで「高校行つてもバンドやるけん」と言うと、兄は「がんばつてやれや」と励ましてくれた。母は特に何も言わなかったが、シンセを買い与えたことは正解だつたというように言つてくれた。父親にも見せたかつたなと僕は思った。他のメンバー3人はそれぞれ友達に囲まれて賑やかに話し込んでいたから、僕は一人で講堂に戻つた。講堂では早速片づけが始まつていて、準備のときと同じようにワタさんが大きな声で指示を出していた。ワタさんをつかまえて礼を言い、「手伝うで」と言つてみたが断られた。僕は準備室に置いてあつたシンセを持って教室に戻つた。

教室にはヨシヒコがいた。「お疲れさん」と声を掛けると「おう、楽しかったなマイキー」と言ってヨシヒコが握手を求めてきた。

「講堂の片付けしようとしたら、ワタさんに『せんでええ』って言われた」

「アーティストは偉そうにしときやいんだよマイキー」

「まあもう」

そこで僕が「もう1回やりたいのー、このメンバーで」と言ったとき、ヨシヒコが少し暗い表情を見せた。口では「おお、そうだな」と言っていたが、いつもの軽さがなかった。それを見たとき、とっさに僕は、4人が別々の高校に行くことを考えているのだと思った。

でもそうではなかった。ヨシヒコは、卒業して北海道に帰ることを考えていたのだ。

そしてヨシヒコは僕の知らない間に札幌の私立高校を受験し、僕の知らない間に合格通知を受け取っていた。

【夕陽に別れを告げて】

3月22日JR琴平駅。3年のクラスメイトと、ヨシヒコと同じクラスになったことのある何人かがヨシヒコを見送りに来ていた。

ヨシヒコはいつも変わらない様子だった。両親の知り合いも来ていたから、夕方の駅の待合室はいつになく混み合っていた。写真撮影のフラッシュがあちこちで光っていた。

「あつという間やったのう」僕はヨシヒコにさりげなく声を掛けた。

「そうだな。3年って短けえな」

「荷物それだけなん？」お土産売り場で買った瓦せんべいとお茶だけしか持っていないヨシヒコを見て僕は言った。

「今から大阪の知り合いのところに寄って、夜には飛行機で千歳行きだ」

「そっか」

「北海道来いよ、札幌のピンク街を案内してやるからよ」

「なんや偉そうに。行ったことないくせに」

「まあな」そう言ってヨシヒコはゲラゲラと下品に笑った。「なあマイキー」

「ん？」

「これやる」

ヨシヒコがポケットから出したのはギターのピックだった。

「ライブンとき、投げ忘れたんだ。あんなに俺のファンが目の前にうようよいたのによ。だからマイキーにやる。いつかの礼だ」

「なんの礼や」

「井上さんの件」

「――ああ」

「井上さんにもちゃんと渡してるから心配すんな。それはお前のやつ」
「サンキュ」

高知から来た特急電車がホームに入ってきて、構内アナウンスが流れる。電車が止まり、狭い改札口から待合室の中に射し込んでいた夕陽を遮る。

「また会おうぜ、マイキー」

「おう、またな、ヨシヒコ」

ヨシヒコはみんなに手を振ってから、一度も立ち止まらずに改札を抜けた。電車が出る間際にこっちを振り返って、電車の中から何かを言いながら小さく手を振った。後ろで両親が頭を下げていた。僕の隣では平尾と敬ちゃんが大泣きしていた。でも僕はぐつと堪えた。

「宗山君の標準語、もう聞けんね」と誰かが言った。

そうかもしれない、と僕は思った。

駅を出たところに井上さんがいたのを見つけ、僕は声を掛けた。

「久しぶり。来とったんや」

「うん。ちよつと遅れてしもたけど」

「ヨシヒコがピックアップくれた」そう言って僕はもらったばかりのピックアップを見せた。

「私ももろたよ。赤いやつやった」

「あいつ意外と照れ屋やけん、ボタンあげるんは恥ずかしかったんやと思うで」と僕が言うと、井上さんは「ううん、ボタンももろたよ」と言って笑った。

井上さんも第一志望の高校に合格したそうだが、僕とは違う学校だった。

「みんなバラバラになるね」と井上さんが言った。「城崎君、高校でもバンドやるん？」

「うん、軽音部があるらしいけん、そこでやると思う」

「メンバー探さんといかんのやろ？」

「そう、それが一番大変や」

そのとき「マイキー！」と平尾が僕を呼ぶ声がした。井上さんが手を振り、「またライブやるときは呼んでね」と言ってくれた。

「うん、絶対呼ぶけん」そう言って僕も手を振った。

泣きはらした平尾と敬ちゃんが撮ったばかりのポラロイドカメラの写真を見せてくれた。四角いフレームの中に、チェスター・コパーポットの4人が写っていた。

僕とヨシヒコと平尾と敬ちゃんが一緒になった、今思えば運命的ともいえるあのクラス替えから、丸1年が経とうとしていた。

春が来るたびに思うことがある。それは虫の数が年々減っているということだ。これは「今年の夏は暑いねえ」と毎年誰かが言うようないい加減な感覚ではない。明らかに虫の数が減っているのだ。僕が幼稚園の頃には、山や川や田んぼの中に、もつとたくさん生き物がいた。山に行けばたいした苦勞もせずカブトムシを捕まえられたし、川にはいつもドジョウとアメンボがいて、田植えのあとには田んぼにカブトエビが気持ち悪いくらい大量発生した。6月の夕方に縁側に座っていれば、用水路から飛んでくるホタルをすぐ目の前に見ることができた。7月にはセミとカエルが朝晩交代で嫌になるくらい鳴き続けた。そういう小さな生き物たちが、僕にでもわかるくらいどんどん減っているのだ。

原因はたくさんあるのだと思う。その原因について一生懸命考えている人たちがいて、それが何かはつきりしていることも僕にはわかる。時代のせい。成長の代償。生産性第一主義。でも満濃池のほとりに「ホタルの里」なんて場所を作ってみても、僕の家の中には2度とホタルは飛んでこない。そういうやるせない諦めのような感情が、春になって出てくるはずの虫たちが姿を見せなくなるたび、心の中に沸々と沸き起こる。

そういうとき、僕はカバンから取り出したCDプレイヤーのイヤフォンを耳に押し込み、黙って音楽を聴く。電車で揺られながら、自分の世界にこもって音楽を聴く。そうすると、しばらくしてセミやホタルのことを忘れてしまう。ドジョウのことも、アメンボのことも、カブトエビのことも、みんなうまく忘れることができる。

気がつくとも僕は電車を降りて歩いている。高校の正門が見えたところでイヤフォンを外してカバンにしまう。

高校の校舎は真新しい匂いがした。満中よりもすべてが洗練されているような気がする。食堂、自動販売機、部室、トレーニングマシン、視聴覚教室。満中になかったものがたくさんある。

中学よりも少し遅めの放課後、僕は一人で廊下を歩いていた。A棟の一番奥の階段を5階まで上ると音楽室がある。音楽室の隣には吹奏楽部が使う大きなホールがあって、そのホールの先の渡り廊下のさらに向こうに、軽音部の部室がある。

部室の中からは賑やかな話し声が聞こえてきた。ドラムがドン、ドン、と鳴っている音も聞こえる。

僕はドアの前に立って一度深呼吸をして、腹を決めてノックをする。

「はーい」と女の人の声がする。

「見学に来たんですけど！」僕は大きな声を出す。

「どうぞー」

「失礼します」

僕はゆっくりと部室のドアを開けた。
その部屋の中には楽器が溢れていた。
少しでもスタジオ15畳と同じ匂いがした。

了

このたびは『僕たちのライブ 1995／真鍋 敢』をご購読いただき誠にありがとうございました。

ホームページにて感想・コメントを承っておりますので、お時間がございましたらご協力をいただきますようお願い致します。

（左のリンクをクリックしていただくと評価画面が開きます）

http://www.kanmanabe.com/rate_novel.php?novel=live&finKey=1

2006年8月1日 真鍋 敢